
フリーナイン

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーナイン

【NZコード】

N6782A

【作者名】

スグル

【あらすじ】

『焼野原にだけは、睨まれるな…』それが、この街の隠れたルールだった。

プロローグ

ここは、都心近くのS県の某市内。

商店街が多く賑わっていたが、深夜には治安が悪くなることで有名であった。

深夜は、不良などの高校生やチンドミラがつらつらと歩いて危険であった。

警察も投げやりになっていて、治安は安定しない。

市民は諦め半分で、夜、家の近くで喧嘩があつても無視して寝付くのであった。

そんな街の駅裏に、例の看板があった。

・・・・・

そんな危険な夜7時のカラオケボックスにて、女子高生が5人いる一部屋に男が一人居た。

「えっと・・・あなたの彼氏さんからのメッセージで・・・別れてくれだそうです・・・」

と、身長170センチ以下の茶髪の男が、いわゆるヤマンバ一人の女子高生に向かって言つた。

バゴッ！！！

男は、鼻にいいパンチを彼女から貰つた。

「うーお！」

思わず、鼻を押された。

手からは、鼻血が漏れてた。

「消えろ！――タコー！」

と、女子高校生軍団から罵声を貰つて、男は部屋から出された。

バタン！！

出されて、強くドアを閉められた。

「イタツ・・・。依頼、終了・・・」

と、鼻血の付いた手でズボンのポケットからメモ帳と赤ペンを取つた。

メモ帳には、こう書かれていた。

『彼女との別れ話を告げる』

そう書かれた部分に、赤ペンで線を引いた。
赤ペンのインクの前に、鼻血が付いた。

・・・・・・・・・・

夜8時あたりの駅裏は、サラリーマンたちが飲み屋で賑わっていた。
そこの一軒の飲み屋に鼻血を出した男が、カウンターでチュウハイを飲んでいた。

パッと見、未成年に見える彼だが、一応、23歳であった。

「最近、千円台の仕事しかこねえな・・・

と、懐からタバコを出した。

それを見てマスターが、ライターを渡してきた。

「まあ、いいじゃない。九ちゃんのおかげで、平和に店が建つてゐる
もんだし」

と、わっさのつぶやきの返答をした。

ビィィィィーーーーーーーー！

携帯のバイブ音が鳴つた。

男は、血の付いたポケットから携帯を出した。

「また、ビジネスの電話・。勘定ツケといで・・」

と、言いながら持っていたタバコを灰皿に押し付けた。

「その台詞、54回目だぞ・・」

そう言われて、逃げるよう立つて店から出て行つた。

「さよなら・・」

「待て、こらあ！！！」

と、店主から叫ばれながら、男は去つて行つた。

プロローグ（後書き）

些末な文章ですが、読んでいただきありがとうございました。

第1話「僕の痛みを消してくれよ」

『一千円以上払ってくれる仕事なら、なんでも承ります。ご用件は、いかがまで。

電話番号・・

住所・・

by (有)フリー・ナイン』

こんな看板が、都心に近い田舎町の駅裏に貼られていた。ボロボロで、なんてことのない悪戯書きに近い看板があった。普通だつたら、みんなスルーしてしまう。

一般人には、よくあるデリヘルの貼り紙と同レベルである。だが、なんでも承るのは本当らしい・・。

これは、とある伝説だ。

一つの組を潰した・・。

組とは、もちろんヤクザの意味である・・。

なんでも屋にヤクザが潰せるのか・・。

とりあえず、一千円以上払えば、なんでもしてくれる・・。

そんな看板に、釘付けになつている少女がいた。

「これだ！」

そう言つて、自分の持つっていたメモを取つた。

彼女は、短髪で、どこか幼く美しい18歳ぐらいのだった。

この看板の住所、電話番号を書き切つた後、周囲に誰も居ないか確

認してから、その場を早足で去つて行つた。
時計は、午後の11時を指そうとしていた。

・・・・・

とある廃墟の5階建てのビルがあつた。

午後の11時を指していたせいか、不気味で氣味が悪かつた。
そのビルの2階には、明かりが灯つていた。

どうやら、誰か居るようであつた。

このビルの住所は、ちょうど例の看板に書かれてあつた住所であつた。

つまりは、例のなんでも屋の「フリー・ナイン」は、ここにあつた。

そのビルの中は、意外に綺麗に掃除されていた。

明かりの灯つてる2階の空間だけであったが。

2階の一つだけ大きくスペースの取られた部屋には、机や台所、トイレ、テーブル、ソファーやなど普通に完備されていた。

そこから、声が聞こえた。

「九乃助さん・・

「なんだ・・

坊主に近い髪型の16歳ぐらいの少年が、椅子に座つてTVを見ている茶髪の23歳ぐらいの男に声をかけた。

茶髪の男は、数時間前に女子高生から鼻を殴られた男だつた。彼は、九乃助と呼ばれていた。

そして、彼がこのなんでも屋をやつていたのだつた。

鼻が殴られたのは、彼が女子高生の彼氏の依頼で別れ話を切り出したからだ。

そんなくだらない仕事までやっていた。

坊主髪の純太少年は、自分の財布から大量の領収書を出した。それを、九乃助の前に差し出した。

「なんの領収書よ・・・」

しぶしぶ、九乃助は領収書を手に取った。

「生活費・・・。アンド・・・、あなたの飲み屋のツケだ・・・
ははっ・・・」

九乃助は苦笑いして、顔をテレビの方に戻した。

純太が、テーブルからテレビのリモコンを手に取った。

プチン！

テレビの電源が切られた。

「人の話をお聞きなさい・・・」

純太は、リモコンを元の位置に置いた。

九乃助は、純太の方に顔を向けることにした。

「純太君・・・、顔怖い・・・」

「あなたが飲み屋にツケるからだろうが！！」

思いつきり、純太はテーブルを叩いた。

「いいですか！！最近、うちに来る電話は、1000円台の微妙な仕事か、エロ電話、なんかの勧誘！！」こっちに来る依頼人は、掃除、アルバイトの代打か、なんかの勧誘！セールス！！とどめに、なんかの勧誘！！」

大きい声で、九乃助の耳に穴が開きそうなほど叫んでいた。しかも、勧誘を3回言つていた。

よく見ると、この部屋のテーブルにはチラシが多かった。

「要するに、お金がないんですよ！！だから、もう少し宣伝して・・・」

回りくどかっただが、純太は本題を言つた。

「ある程度、生活出来るからいいだろ・・・」

九乃助は愚痴つた。

「あなたはツケで食つてるからいいけど、僕は毎日、カッパめんだぞ！！栄養は野菜ジュースからしか摂ってないっすよ！！」

純太の目には、涙が浮いていた。
わざとらしい涙だったが。

「へつ・・・

その演技臭さに、九乃助は笑つた。

「九乃助の腎臓担保にして、借金借りてきましょうか？」

笑った九乃助に向かつて、純太は顔の影を濃くして言った。

九乃助の顔が停止した。

腎臓の担保、つまりは・・・。

そんな想像もしたくないことを脅しに使うのが、純太少年だった。

ガチャツ!!

「！」

いきなり、事務所であるこの部屋のドアが開いた。ドアが開いた先には、このフリー・ナインの看板をメモにつけていた少女だった。

「はあはあ・・・」

走つてきたらしく、息遣いが荒くなっていた。同時に髪の毛も乱れていた。

「・・もしかして、依頼人・・・」

部屋にいきなり入つて来られて、多少は驚いたが、純太は冷静に依頼人が来たと受け止めた。

九乃助は、彼女が部屋に入つてきた瞬間に、急に顔つきが鋭くなつた。

彼女の息遣いは乱れたままだつた。

「あの女・・、どこ行きやがつた！」

・・・・・・・・・・・・

「「Jの近くなのは確かだ！！」

そういう声が、この窓から聞こえてきた。

人探しにしては乱暴な声だった。

黒いスーツを着た男一人が、この廃墟のビルの近くにいた。

九乃助は、その男たち二人の様子を窓から眺めていた。

どうやら、彼女は追われている身らしい。

その彼女は、息を落ち着けて椅子に座っていた。

純太は、気を利かせて水を持ってきた。

テーブルの上に置かれた水を、彼女は受け取った。

「ありがとう・・・」

と、純太に向けて例を言った。

「いいえ・・・。気にしないで・・・。ははは！・・・」

純太は照れながら、微笑んだ。

どうやら、女好きなようだ。

そのせいか、目線は彼女の胸元だった。

「さつきから、このあたりを男一人がうろついてるが・・・

「・」

純太が、いやらしい想像してのを拒むように九乃助が声をさした。

その声は、どこか冷たい感じだった。

「察するに、あの男たち一人は、そこら辺のチンドラにしては服装

が綺麗だ。なんかの組織か、大企業かな・・・貴様が、なんか問題を起こして、あいつら逃げてきた・・・

淡々と、九乃助が彼女に向かつて問い合わせてきた。
その冷たい感じに彼女は、ちょっと戸惑っていた。
いきなり、貴様呼ばわりされたのだから。

「九乃助さん・・・もう少し丁寧に言ってくれませんか・・・」

と、純太が語り方に注意をした。

「そうです・・・理由は語れませんが、あの一人から逃げます
「えつ・・・」

純太が、驚くようなことを彼女は言った。
なんと、九乃助の察しが当たっていた。

そして、彼女は自分のカバンを取り出した。

九乃助の冷たい目線は、窓の外の男たち二人からカバンの方に向いた。

カバンのチャックが開くと、中には多くの札束が。
すべて、一万円札であった。

その札束が、カバンがはちきれんばかりに入っていた。

彼女は椅子から立ち上がり、九乃助の方に体を向いた。

「今のお金は上げます！―ですから、助けてください！―！」

と、唐突に彼女は叫んだ。

その声には必死さがあった。

物凄く思いつめた声だった。

すると、彼女の目からは涙が出てきた。

九乃助は顔を鋭くして、その声を受け止めた。

純太は、彼女の方へ近づいて肩に触れた。

「落ち着いて・・・」

そう言って、彼女を再び椅子に座らせた。

彼女は、自分の涙をぬぐった。

そして、純太は自分のポケットからハンカチを取り出して、彼女に渡した。

テーブルに置かれたカバンの近くには、水が入ったコップの氷が音を鳴らした。

「・・・」

カバンの方を見つめていた九乃助は、椅子を回転させて窓の方を向いた。

窓の外には、もう黒いスーツの男が居なくなっていた。
周りを見渡しても、男の姿が消えていた。

「この依頼・・・」

九乃助が、窓の外を見渡しながら声を出した。

「！」

涙を拭つていた彼女が、顔を上げた。

純太は、未だに彼女の肩に手を置いていた。

窓からのぞいた月の光が、九乃助を照らしていた。

窓の外のいた男たちの行方を、目で探しながら九乃助は言葉を発した。

「断る」

たつた一言、そう言った。

その一言が、彼女の動きを止めた。

そして、絶望させた。

「・・」

その一言を言った九乃助は、男たちがどこに消えたかが解った。そう、このビルの中に・・。

第2話「不安なのは、こんな夜に馴れてしまつた」と

・・・・・・・・・・・・・・

廃墟の5階建てのビルがあつた。

午後の11時を指していたせいか、不気味で氣味が悪かつた。そのビルの2階には、明かりが灯つていた。

どうやら、誰か居るようであつた。

このビルの住所は、ちょうど例の看板に書かれてあつた住所であった。

つまりは、例のなんでも屋の「フリー・ナイン」は、ここにあつた。

この不気味なビルの一階に、足音がした。
明かりが点いているのは2階である。

よつて、一階には誰も居ないはずである。

だが、足音がした。

二人分の・・。

何故なら、黒いスーツの男が潜入していたからだ。

・・・・・・・・・・・・

そのことに気づいたのは、九乃助だけであつた。

「断るつて言つたら・・

と、追い討ちをかけるように彼女に言つてやつた。
彼女は下向いていた。

ショックだったようだ。

それでも、窓の外のいた男のたちの行方を目で探した。

「九乃助さん・・」

「！」

その九乃助の後ろに、いつの間にか、純太が居た。

純太の手が、九乃助の後頭部を握つた。すると・・。

「この飲んだくれが！――！」

そう気合を入れて叫んだ。

バリーン――――

「ぐはっ――」

純太の手の動きにより、九乃助の顔がガラスに押し付けられ、突き破られた。

思わず、下を向いていた彼女が窓の方向を見た。

九乃助の顔が、窓を突き破つていた。

窓は当然、割れていた。

「ふう・・・

「なつ・・・」

純太は、一息つけて、驚いていた彼女の方に歩いて行つた。

九乃助は、ピクリともしなくなつていた。

そんな状況に、彼女は驚いた。

といふか、いろんなことが起こりすぎて、対応に困つていた。

「あの・・・、彼は大丈夫なんですか・・・」

依頼を断ると、冷たくあしらわれた九乃助のことを気にしていた。
彼女の人人が良いと言づか・・・、心配しなきやならなくなるというか・
・。

「いや、気にしないで。この人、貴、なんかあつたらしくて、女性
不信に陥つてるから」

と、純太は笑顔で語り始めた。
パツ、パツと手を払つていた。

ちょっと、その一言に彼女は戸惑つた。

「女性不信・・・？」

聞いた事のない単語に、彼女は戸惑つた。
その仕草が、純太は可愛く感じた。
というか、今で言う萌えていた。

「要するに、女性が信じられないんだって」
「えつ・・・、そうなんですか！！」
「可哀想な人だよねー」

そんな、九乃助の心理を純太は語つた。

「・・・」

九乃助は、ガラスが刺さった自分の顔を鏡で見ていた。
しかも、丁寧に刺さつたガラスを抜いていた。

慣れた手つきだった。

つまり、今に始まったことではないと・・・。

「そういうこいつた・・・頼るんなら、「シイー・ハター」にしろ。女好きだし」

ガラスを抜き終わつた、九乃助がそう言つた。

「それは、漫畫です・・・」

すかさず、純太はツツ「ゴミを入れた。
まるで、コントを見せられてるようで、彼女は混乱していた。
助けを求めるに来たのに・・・。
と思つていた。

むしろ、「シイー・ハター」が、実際居てくれたらなー。
と思つてしまつた。

・・・・・・・・・

そんな九乃助たちのやりとり中に、二つの人影が2階に出現した。

「さつきのガラス音は何だ・・・」

「そんなことより、明かりが点いてるぞ・・・」

耳を澄ましても聞こえないくらいの小声がした。

黒いスーツの男が、2階に来ていた。

そして、明かりの点いている九乃助たちが居る部屋を発見した。

「ここに、あの女が居るかもしねー・・・」

そう言つて、足音を立てずに部屋のドアに近づいて行つた。
どうやら、彼女を探して、ここに来たようだつた。

「入るぞ・・」

「ああ・・」

一人がそう言つと、黒いスーツの男が銃を構えた。
このドアを突破するつもりらしい。

「どうに入るの?」

どこからか、声がした。

その声は、一人の後ろからだつた。

「あの部屋にだよ」

銃を構えた男が、答えてやつた。

「おい、誰と話してる・・」

突破を示唆した男が、ツッコんだ。

「えつ・・」

一人の男は、ゾッとした。
背中に人の気配を感じた。

自分たち以外、後ろにはいないはずであった。

「おい・・」

「誰か、後ろに居るぞ・・・」

恐る恐る一人は振り返った。

今までにない悪寒を感じつつ・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・

「そういえば、名前聞いてなかつたね」

と、部屋の外には黒いスーツの男が一人居る状況で、純太が彼女に名前を尋ねた。

「えっと・・・、レビン・・・」

そう、彼女が自分の名前を名乗った。

他に言いたそうなことがありそうな様子だった。

「レビンか・・・、いい名前だ・・・」

純太が、レビンという少女の名前を聞いて喜んでいた。

「あの・・・」

「はい?」

レビンは、純太に問つた。

「さつきの彼・・・、窓の外へ降りて行っちゃいましたけど・・・

窓の近くの椅子には、さつきまで座っていた九乃助が居なくなつて

いた。

窓から、一階に降りたそつだ。

「ああ・・・。部屋の外に、君を追つて居るのが居るからね・・・。突破されたら、君の体が危ない・・・。それで、あの人、窓から降りて、君の追つ手のケツを叩きに行つたんだよ」

純太は、どこか自慢げに語つた。

「追つ手が、ここに来たのを解つて・・・」

彼女は驚いた。

わざわざ、窓から降りて、2階に来た黒いスーツの一人を後ろから叩きに行つたのだから。

普通はやらないし、普通だつたらドアから出るべきだ。
だが、九乃助は、窓から出て追つ手の後ろに来た。
それは、ドアから出たら逃げられるからだ。

実は、ある程度の合理的だつた。

とりあえず、2階から普通に降りて、すぐ追つ手の後ろにつく、九乃助の身体能力が異常だと思うべきである。

純太は、窓の近くの椅子に腰をかけた。

「あの人、女性不信だけど信用していい・・・。彼は断つたけど、この依頼受けるよ・・・」

「えつ！」

といつて、純太は彼女の依頼を受け取ると言つた。

「どうしだしろ、彼のマネージャーは僕だし・・・。彼に断る権利な

しー。」

そう言いのけた。

レビンは、その一言が嬉しかった。

そして、もうひとつ気になつたことがあつた。

「あの・・・彼の名前は・・・」

そう尋ねた。

純太は、椅子にもたれ掛かつて、静かに口を開いた。

「焼野原 九乃助・・・」この「表から裏のなんでも屋」フリーナイ
ンの代表・・・一部じや、「関東圏の悪夢」と言われてる、元不良
の男さ・・・

・・・・・・・・・・・・・・

黒いスーツの男二人は振り返つた瞬間に、氣を失つた。
ほんの一瞬で、意識が奪われていた。

そして、地面に倒れこんだ。

理由は、振り返つたと同時に、一人同時に顎に衝撃が来た。
その衝撃の速さは、信じられなかつた。

当たつたのも気づかないくらいだ。

衝撃は、二人の意識を消した。

その衝撃を放つたのは、焼野原 九乃助の蹴りだつた。

両手をポケットに突っ込んだまま、衝撃と速さが異常な蹴りを放つ
男。

そんな男が、フリーナインをやっていた。

そんな男がやっているフリーナインに、レビンが来たことから物語は始まつた。

・・・・・・・・・・・・・・

「なんでも良いけど、あいつ（純太）、依頼受けやがつた・・・」

九乃助は愚痴つた。

・・・・・・・・・・・・・・

第3話「神様は大嫌い・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『一千円以上払ってくれる仕事なら、なんでも承ります。
ご用件は、いちいちまで。

電話番号』・・

住所・・

by (有)フリー・ナイン』

こんな看板が、都心に近い田舎町の駅裏に貼られていた。
ボロボロで、なんてことのない悪戯書きに近い看板があつた。

だが、この看板が一つの組を潰した・・。
組とは、もちろんヤクザの意味である・・。

そんな看板には、危険な雰囲気もしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガラツ・・。

午後6時の居酒屋のドアが開いた。

「いらっしゃい・・」

鉢巻を巻いた店主の主人が、焼き鳥をつちわで扇ぎながら、掛け声を出した。

「ちっす・・・」

開けたのは、ツケばかり溜める客の九乃助であった。
彼は、どこかクタクタな感じだった。

そんなフラフラ感を漂わせ、カウンターの椅子に座った。

「どうした、珍しいー。こんな時間に早く来るなんて
『いろいろあつてね・・・』

店主の声を聞きながら、九乃助はポケットに手を突っ込んだ。
いつになくお疲れ気味の九乃助を、変に店主は思った。

すると・・・。

ポケットから出た九乃助の手に握られていたのは、札束であった。

「なつ・・・」

店主は驚いた。

その反動で、うちわを落とした。

「これ、今までのツケね・・・」

そう言つて、札束を九乃助はカウンターに置いた。

「なにが、あつたんだよー！九ちゃんー！別に、少しづつで良い
んだよー！ツケなんて・・・」

急に気前良く、ツケを払われたため、九乃助が犯罪をやつちまつたと誤解してしまった。

「はあ・・・、実はね・・・」

九乃助はため息をついて、さっきまでの出来事を思い出し一つ語り始めた。

・・・・・・・・・・・・・・

先日の夜、純太の独断でレビンの依頼を受けた九乃助こと、フリーナイン事務所。

レビン少女は、未だに、自分の名前以外は語らずに居た。何故、追われているのは言わなかつた。

追っ手の黒いスーツの男二人は、身分を証明できる物を持っていかつたので、不法侵入ということで警察に送つた。結局、誰に追われているのかすら不明である。

更には、廃墟の事務所に泊めてくれとまで言られたのだった。そこから、九乃助のクタクタの始まりだつた。

・・・・・・・・・・・・・・

時計は、あれから午前1時を指していた。

事務所のシャワー室からは、音がしていた。

純太は、椅子に腰掛ける九乃助の目の前にいた。

「彼女は、今、シャワー浴びてます・・・」

「知ってるよ・・・。誰が覗くか、ぼけえ・・・」

と、純太がレビンの入浴中なのを九乃助に知らせていた。
そんなこと言われても、九乃助の心の病気は、なにも思わせること
はなかつた。

「彼女の部屋なんですが・・・」

「泊まらせるのかよ！――ふざけんな――！」

純太の部屋割りの話に、激しく拒否反応をした。
それほど、心の病気がひどかつた。

というか、そこまでに至らせた原因が気になる。

「嫌だぞ！――」

と、九乃助は純太の襟首掴んだ。

「いいじゃないですか・・・。うふふ・・・」

何故か、嬉しそうに純太が言った。

この廃墟で使える部屋は、事務所だけであり、この部屋の構造上で
寝室が、隣同士の2つ部屋しかなかつた。
だから、どちらかが、レビンに部屋を譲つて事務所の椅子で寝なけ
ればいけなかつた。

つまり、純太が言いたいのは・・・。

「九乃助さん、椅子で寝て」

純太がはつきり言つた。

九乃助の顔の影が濃くなつた。

純太は笑顔だった。

九乃助の顔には、氣持が悪しく、少しに穩やかだつた。

• • • • • • • • • • • •

物凄い奇声が聞こえた。

ゴシゴシ・

レビンはシャワー室から、自前の服に着替えて、タオルで髪を拭いていた。

さつき、事務所から物凄い奇声が聞こえていた。

なんだと思いながら、事務所の方に向かつた。

「ひつ！」

事務所の方を見たら、九乃助が純太にアルゼンチン・バスクブリー
フを教つてやつた。

その光景が、物凄く殺氣立つていた。

純太は気絶していた。

原因は、さつきのアルゼンチン・バスクブリーカなのは言わなくて
も解るであろう。

まるで、カニのように綺麗な泡を吐いていた。

プシュッ・

ビールの缶が空いた。

そこから、泡が出ていた。

「・・」

ビールを開けた九乃助は、飲みづらかつた。

理由は、ビールの泡が純太の泡に似ていたのと、事務所には、気絶
した純太以外で、自分の病気の対象であるレビンがいたからであつ
た。

「・・」
「・・」

椅子に座っていたレビンの方は、話しかげづらかつた。

さつき、テレビを点けても、深夜帯のため変な番組が真っ先に画面
に映ったため消した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

室内一人（プラス1）の空間では、心の葛藤が始まっていた。

九乃助の中には、こうなっていた。

なんで・・・こんな期限がいつまでだか、わからん仕事しなきゃならんのだ・・。

純太のやうつ・・、女好きだったか・・。

くそ・・、ここで寝たら、ジャッキー・チャンの映画「スバルタンX」みたく、この得体の知れない女に、事務所の物盗られる事か・・。

不安で眠れんぞ・・。

さつせと、寝るーこの女ー！

つていうか、なんで、追われてんだよー！

事情ぐらいい話せんのか！！

今度から、事情なしの仕事は受け付けんぞ・・。いつそ、もう男限定にしてようかな・・。

この仕事・・。

ああ、でも、ホモって思われんの嫌だし・・。
いや・・、むしろ、思われていいや・・。

「うほっ・・、いいなんでも屋」って名前こじよつ・・。
いや・・、でも、本物から掘られんの嫌だな・・。

あつ！

「掘る」つい漢字で思い出した・・。

出所後のホエモンは、一体、どんな心境の変化だ・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

レビンの方。

さつきから、ずっと黙つてゐるけど・・・。
この人、女性不信って本当かしら・・・。
なにが、あつたんだろ？・・・。
気になる・・・。

でも、今日、ずっと逃げてたせいか・・・。
眠い・・・。
・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「すう・・・
・・・！」

椅子に黙り込んでいたレビンから、寝息が聞こえた。

「寝やがった・・・」

こうして、二人の心の葛藤は終了した。
かに思えたが・・・。

「この俺を、油断させる気か！？」

九乃助の女性不信は大きすぎた。
だから、狸寝入りと思い込んだ。
そして、自分が寝た隙に物を盗ると信じ込んだ。

「こいつ・・・、マジで寝てるのか・・・」

そう思つて、近づいてみた。

だが、聞こえるのは寝息だけだった。

「こいつ、演技上手いな・・・」

どこのまで、不信がひどいんだ、こいつは・・・。

・・・・・・・・・・・・・

ここで、また心の葛藤スタートした・・・。

マジで寝てるのか・・・。

こいつ・・・。

いや、油断させる気だ・・・。

俺を・・・。

ちょっと、体触つてみるか・・・。

なにか、反応をしめしたら確信犯だ・・・。

いや、でも・・・セクハラで訴えるかもしれない・・・。

そしたら、勝ち目ないよ・・・。

この日本じゃ・・・。

ああ、アメリカ行きたい・・・。

アメリカなら、勝てる・・・。

いや、駄目だ！

今、関係ないだろ！

問題は、ここつが・・。

いつ盗むかた…（段々盗まれる）とか前提になつてゐる

ベリナーニー・ベリナーニー・俺ー！

• • • • • • • • • •

夜中の1時から、9時間後・・・

1

レビンが田を覚ました。

氣づくや、ベジの体こな毛布がかかつていた。

「おつ・し」

そして、彼女の隣には、心の葛藤の末に眠り込んだ九乃助がいた。

「もしかして・・・」

彼女は思つた。

九乃助は、自分の身を守るために眠らずに、ずっと傍に居てくれた
と…。

女性不信とか、言つておきながらも、自分をこうして守つていてくれたと・・。

大変な誤解をした。

確かに、毛布をかけたのは九乃助であった。

そのせいもあつてか、彼女は変な感情を抱いてしまった。

「・・」

そして、レビンは、そつと自分にかかるていた毛布を九乃助にかけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その数時間後が、九乃助が起きて居酒屋に言つた時間であった。

以上のことの一部を、九乃助は店主に話した。

「で・・、今までのツケを出してくれた彼女は、なにしてるの

と店主が言った。

九乃助は、口に焼き鳥を放り込んだ。

「掃除とかしてやがつた・・。不覚にも寝てしまつたが、何も盗まれてない・・。だが、いつ、隙を突かれるか・・」

と女心も解らずに言つた。

そのことに、店主は笑つて答えてやるだけだった。

・・・・・・・・・・・・・・

事務所では・・。

「あつ・・、そこ・・」

「ここですか・・」

「あつ！ちべて！くそ！あの飲んだくれ！・・！」

純太が、レビンに腰に湿布を貼つて貰つてた。

「野蛮な男でしょ・・、あいつ・・」

そして、湿布を貼られ終つて、純太は服を着ながら言つた。

「いいえ・・、素敵な方ですよ・・、彼・・」

「くつ・・」

そう勘違いしたレビンは答えた。

純太には、悪い冗談に聞こえた。

未だに、レビンは何故、追われるか不明だったが、この3人の生活は始まった。

・・・・・・・・・・・・・・

第4話「Jの時間を吸い取つていいくだけ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつーおはよひざわいます」

と、レビンの挨拶が、事務所で朝食を食べている九乃助と純太に向かれた。

「・・・

「おつはーよー！」

挨拶したのは、純太だけであった。

九乃助は、食パンを大口開けて突っ込んだ。

朝食は、簡単な食パンとコンビニのパンと、コーヒーであった。

九乃助がソファー寝をするようになつてからは、九乃助の部屋はレビンの貸し部屋になつた。

そのことには、九乃助は不本意であったが、ビジネスとして我慢した。

レビンは朝食よりも、先にシャワー室に向かつていた。
それを、純太は目で追つていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さつき、電話で依頼があつたんですが・・・。 地区のこの橋の下に行つてもらいたい・・・

と純太はメモを渡した。

九乃助は、片手に食パンを持ちつつメモを受け取った。

「この地区、不良の溜まり場じゃねえか」

と、今度は片手に缶コーヒー持ち替えて言った。

「不良退治か？」

と、言つて缶コーヒーをすすつた。

「いや、詳しくは聞いてないです・・・」

と言いながら純太は、目線をレビンの入ったシャワー室に向けていた。

まったく、九乃助の方に顔が向いていなかつた。
その行為に九乃助は、軽くムカついていた。

「・・・！」

それで、たまたま手元にあつたタバスコを、九乃助は握つた。

そして、純太の目線がシャワー室に向いてる事をいいことに、純太の缶コーヒーにタバスコを流し込んだ。

「じゃあ、行つて来る・・・」

と言つて、九乃助は立ち上がつた。

「いってらっしゃい」

純太は、目線をシャワー室に固定したまま手を振った。

このあと、純太は缶コーヒーを飲んだかどうかは、九乃助の帰宅後に解った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『一千円以上払ってくれる仕事なら、なんでも承ります。』
用件は、こちらまで。

電話番号・・

住所・・

b y (有)フリー・ナイン』

こんな看板が、都心に近い田舎町の駅裏に貼られていた。
ボロボロで、なんてことのない悪戯書きに近い看板があつた。

そんな看板には、今日も危険な雰囲気もしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガタン・・
ゴトン・・

電車が動き始めた。
日曜の午前中だけあって、少し空いていた電車内の吊り革に、九乃
助は体重を預けていた。

九乃助は、周囲の女性と距離を十分に取っていた。
痴漢と誤解されない距離の意味である。

「ゴソッ・・

ポケットに入れていたメモを手に取った。

九乃助の十代の頃は、喧嘩に明け暮れていた。

この頃は、喧嘩ぐらいしか楽しむことはなかつた。

だから、関東圏の不良の溜まり場に自ら、一人で向かつていしたこと
も多かつた。

そのせいで、時にはボコボコにされたが、その中で喧嘩術を覚えた。
だから、一人でも数十人を地面に倒せるようになった。

そのような過去があつた彼は、これから向かう場所は、その場所の
ひとつであつた。

九乃助は少し思い出に浸つた。

・・・・・・・・・・・・・・

その場所は、九乃助が高校時代、売られた喧嘩を買った場所であつ
た。

だが相手が多く、しかも、武器を所有していたため、惨敗でボロボ
ロであつた。

相手が去つた後、その場で、九乃助は動けなくなつていた。
散々、痛めつけられて動けなかつた。

だが、そんな重傷でもなかつたが、動く気になれなかつた。

様々なことで絶望しきつて。

この頃の九乃助は、いろいろ問題があった。
勉強が駄目で、人望もなかつた。

今は和解したが、この時期、家族からは見放されていた。

ずっと、一人の状態が多かつた。
だから、心がささくれた状態であつた。

そんな状態で…。

「大丈夫か！！」

一人のスーツのおっさんが、近寄つてくれた。
そのおっさんは、近くの薬局から薬を買ってきてくれた。
このあと、飯もおごつてもらつた。
行動も会話も、おっさんの一方的であつたが、九乃助は心の底で感謝していた。

その男とは、それつきりであつたが、深く心には刻まれていた。

そのせいあって、例の橋の下は少しは懐かしくあつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらくして、その場所に着いた。

橋の下の壁には、多くのスプレーでの落書きがあつた。
更に、血の後もついていた。

川の方には大量の投げ捨てられたごみがあった。

どこか、異臭もしていた。

九乃助が以前、訪れた時と、なにも変わっていなかつた。

やはり、まだ不良の溜まり場となつてゐるようであつた。
今は、昼間であるせいか、不良はいなかつた。

その場所に、中年の中年男がいた。

男は瘦せて、汚れた作業服を着ていた。
顔には絆創膏など、傷が多くつた。

そして、バケツやゴミ袋などの清掃用具を持っていた。

「あの・・・、焼野原さんですか・・・？」

と、中年の中年男が、九乃助に近づいてきた。

「そうですが・・・」

掃除用具を見て、嫌な予感がした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

九乃助は、「ゴミ袋を持つて、川の方のゴミを拾つていた。
予感は当たつてしまつた。

「ははー!さすが、手馴れてますなー!ー!」

と、中年の中年男は言つた。

九乃助は、あまり嬉しくなさそうだった。

だが、空き缶を拾つ姿は様になつていた。

「いやー、ここは拾つても、拾つてもゴミが捨てられてねー」

と、中年男性は世間話をするノリで話しかけてきた。

「いやね、最近の近隣住民は苦情だけ言つて、ここではゴミは拾おつとはしないんだよね！！」

男は、一人で盛り上がっていた。

九乃助は、苦笑いで答えてやるしかなかつた。

「まったく、最近はねー」

と、男は長々と語り始めた。

九乃助は、苦笑い状態で顔の筋肉が固定されていた。

「なんで、こんな同じ仕事ばつかなんだ・・」

ちなみに、今月で20回目くらいであった。

しばらくすると、中年男性の話が終わり、チラッと後ろを見ると、中年の男性は汗を拭きながら壁の落書きを消していた。
壁の落書きは、そう簡単に取れる物ではない。
なのに、男は一生懸命に壁の落書きを消していた。
壁の落書きは、少しずつだが消え始めていた。

九乃助は、会社や建物の掃除のバイトの穴埋めで掃除をすることが多いが、個人で頼まれたのは初めてであつた。
なにか、あるのかと思いつつゴミを拾つていた。

良く見ると、男の腕にあざがあった。

「川の中には、ポルノ雑誌があつて、女性不信の九乃助を不愉快にさせた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんで、一人で・・」

と、数時間後の小休憩中に、九乃助が男に話しかけた。

九乃助は、汗を借りたタオルで拭いていた。

そういわれて、背伸びしていた男はお茶のペットボトルから口は離した。

「いや、私しかやらないんだよ・・」

と、寂しげに答えられた。

男は、座り込んだ。

「私の若い頃は、ここは綺麗な川だったんだけどね・・」

男は、また語り始めた。

九乃助は、タバコを取ろうとしたがやめておいた。

「特に、この川には思い出もないんだけどね・・。数年前、家族もなく仕事一筋だったのに、リストラされてね・・。それで、落ち込んでたとき、喧嘩でボコボコにされた不良がいてね・・」

「えっ！」

九乃助は、驚いた。

もしかしたら、自分のことであった。

更には、あの時の恩人が目の前に居たのであった。

「寂びそうな目をしていてね・・・なにも、喋らなかつたよ・・・。
ひどいくらいに、ボロボロになつてたのに、それでも、自分の歩いて帰つていた姿がなんか・・・。胸に来てね・・・」

「・・・」

そう言われて、なお更、自分と確信した。

「ボロボロになつても、自力で家に帰ろうとした彼の姿見たら・・・、落ち込んでたのが、どうでも良くなつてね・・・」

「・・・」

中年男性の目から、何故か、涙が滲んでいた。
別に、九乃助は、この男性に何かしてやつた訳でもなかつた。
なのに、男は目から涙を滲ませていた。

「・・・」

そんな姿を見た九乃助も、何故か、泣きそうになつた。

「だから、この場所を綺麗にしてやらなきゃと思つてね・・・」

理由になつてないような感じはしたが、それが、彼の生き甲斐になつてゐるようだつた。

「しかし、何回、掃除しても、ここいら辺の近隣住民と若い奴らは、平氣でゴミやら落書きをしていくんだな・・・」

「それでも、あなたは掃除を続けたんでしょ・・・」

と、九乃助は言った。

そして、立ち上がって掃除用具を手に取った。

「さつ、やりましょ・・・

と、九乃助は、またゴミ拾いをはじめた。

男も、また落書き消しを始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゴミ広い中に、通行人が次々とゴミを投げ捨てていた。

「なんだ！－めえ－ら－！－

と九乃助が、罵倒しても通行人は投げたつきりだった。
その投げられたゴミを、九乃助は拾つてやった。

・・・・・・・・・・・・・・

時間は、薄暗くなっていた。

それでも、一人は清掃をしていた。

落書きとゴミの数が薄くなっていた。

「はあ・・・

九乃助はだれていた。

「はは！若いのうーー！」

と、男は笑つた。

それを見て、九乃助も笑つた。

そんな時・・・。

橋の下に、学生服を着たグループが現れた。

5人のキャラキャラした身の回りを綺麗にした高校生たちであつた。

「あーー！なに消してるんだよーー！」

と、落書きに指を刺していくた。

「誰に断つて消してんだよーー！」

と、数人の高校生が中年の男を囲つた。
男は壁を背にしていた。

「いや、だつてね・・」

と、中年の男が言つた。

男は怯えていた。

「よく見たら、こないだの・・」
「また痛い目にあっちゃう？」

と高校生が罵詈雑言を飛ばして、男を壁に押し付けた。

「・・・

「また・・・と、言つ言葉を聞いて、九乃助は全身に血が走った。
そういうえば、男は傷だらけだ。

このようなことがあって、男は傷が多いことに気づいた。
そのせいか、急に怒りが沸いて来た。
血管がピクピク動いてるのが、自分でも解つた。
囲つてゐる高校生たちの方へ歩いていった。

「おい・・・

九乃助は、リーダー名と思われる一人の肩を握つた。
その握る手には、血管が浮き出でていた。

「なんだよ・・・

と、振り返ろうとした瞬間。

「つぎやあああああ！――！」

リーダー名は、激痛の声を上げた。
肩からは、メリメリと音がしてゐた。

九乃助は、物凄い握力で肩に握り締めていた。
激痛の声は、他のメンバーには圧力となつた。

「帰れ・・・

ボソッと言つて、九乃助は手を離した。

九乃助の顔は、夜の暗さも手伝つて、この世の人間の形相とは思え

ない顔に見えていた。

「ひいいいいい——！」

あまりの激痛で、リーダー各はパニックになって逃げて行った。それを追つよつこ、他のメンバーも逃げて行った。

「・・・」

それを見届けると、男の肩を持つて立ち上がらせた。九乃助は掃除用具を手に取った。

「もうすぐで終わります・・。せつ、やつましょ・・」

と、九乃助は、またゴミ拾いをはじめた。

男は睡然としながら、また落書き消しを始めた。

・・・・・・・・・・・・・・

「終わった——！——！」

九乃助は、午後の11時過ぎに叫んだ。
ゴミは綺麗に消えていた。

落書きは、まだ消え切っていなかつたが、とりあえずは終了といつ形になつた。

「また、ゴミは増えると思つが・・」

と男は言った。

「また、俺を呼んでください」

と、返した。

「何故、そこまでしてくれるんだい・・・」

と、男は申すわけなれどに言った。

「数年前の俺を、家に帰らせててくれたからですよ・・・」

と言つて、男に背を向けて、九乃助は帰りへと足を向けた。
その九乃助の後姿は、中年男性の記憶にあつた不良の背中だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第5話「君の後ろに立つの誰」

• •

『一千円以上払ってくれる仕事なら、なんでも承ります。ご用件は、一いちらまで。

電話番号

by (有)フリー・ナイン

こんな看板が、都心に近い田舎町の駅裏に貼られていた。

そんな看板には、今日も危険な雰囲気もしていた。

「あのノンダクレが・・・ちくしょう・」

と、純太はトイレで便座で座りながら、呪う様に言葉を吐き続けて

レ
イ
ト
ア
ル
バ
ー
シ
テ
ル
レ
イ
ト
ア
ル
バ
ー
シ
テ
ル

腹からは、奇怪な音が出ていた。

純太は苦痛の声を上げた。

何故なら、前回のせいで、若くして痔になつたからだ。

そんな悲劇の少年は、これからもトイレで奇声を上げる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トントン・・

タバコの吸い口を軽く指で叩いてから、口にくわえた。

シユボツ・・

ライターの火が点いた。

そして、ライターをタバコに近づけた。

このようにして、タバコの吸い口を叩くのは、タバコの葉が吸い口に集まるからだ。

これを九乃助が知ったのは、つい最近である。

「ブハー」

そうして、思いっきり息を吐いた。

時間は、夜の7時過ぎであつた。

そして、九乃助の今居る場所は、昔、自分が「フリーナイン」を立ち上げたばかりの時に貼り付けた看板がある駅の裏であつた。まだ電車は通っていた。

この周囲にいるのは、仕事帰りのサラリーマンと帰宅中の学生らであつた。

この場所にいるのも、依頼であったからだ。

依頼内容は、奇妙だつた。

ただ、この時間に駅の裏に立つていろいろのことであつた。

言われたとおり、九乃助は駅の裏に立つていた。

だが指定された時間になつても、特に変化はなかつた。

吸い終わつたタバコを、駅裏の灰皿に押し付けて火を消した。

ちょうど、一本吸い終わつた頃に依頼者らしき男が現れたのだった。

・・・・・・・・・・・・・・

依頼を送つた男は、タンクトップを着た筋肉隆々の男であつた。

そして、タンクトップから見える皮膚には傷が多数見えた。

顔は、いかにも女性から支持されそうな野性的な顔つきであつた。

年齢は、九乃助と同じか下に見えた。

「お前か・・?例のなんでも屋つて・・」

と、タンクトップの男は言つた。

彼の髪型は、よく見ると、妙なオールバックであつた。

「そうだが・・」

九乃助は、質問に答えてやつた。
そして、軽くあぐびをした。

「なら、いいんだ・・」

「依頼はなんだ・・・。眠いから、早く言え・・・」

と、九乃助が口を押さえ、またあぐびをした。
タンクトップの男は、首を鳴らし始めた。

「いやね・・・。俺も、あんたと似た同業者で、私立探偵なんだがね。
・」

男は更に、肩も鳴らし始めた。

「俺の名前は、篤元^{あつもと}豪^{じょう}・・・。ある男から頼まれ事があつてね・・・」

男は、足を屈伸させ始めた。

「なにが言いてえんだ・・・。じつ・ひろみ・・・」

会話の回つくばせ!、九乃助は腹を立てた。
更に、名前を間違えた。

「お宅・・・、レビンって名前の女を預かってるか?」

やつと、豪という男は話を切り出した。
そして、拳を「キキキ」と鳴らした。

「・・・」

九乃助は、なにやら危険な予感を察知した。

「以前、お宅に、レビンという女を追つて黒いステッジが入つて行つたきり連絡が取れなくなつた・・・」

それは、数日前のことである。

そのことで、彼は九乃助を呼び出した。

彼は、レビンを探してゐる一味と見た。

「知つてゐる・・・。というか、何故か、俺の事務所に居つてゐる・・・。
あの女、なんなんだよ・・・」

九乃助は、目線を下げた。

そして、自分の靴紐がほどけていたのに気づきながら言つた。

「俺もよく解らん・・・。だが、依頼があつてね・・・。あの女と関係
があるなら・・・」

彼は、徐々に九乃助に近づいた。

「関係などないぜ・・・。」う・ひろみ・・・

嫌な言い方をされたので、九乃助は怒つた。
また名前を間違つた。

「あの女、渡してもらえないか？」

と、豪は言った。

そして、また九乃助と距離を縮めた。

「そうしたいんだけど、一応、ビジネスだから渡せないね・・・」

九乃助は、豪の頼みを断つた。

「そりゃ・・、じゃあ、渡してもいい・・」

タツ――!

思いつきり、地面を豪は蹴つた。

豪は、九乃助に向かつて、低くタックルするように突進した。そして、手を空手の構えのように位置させていた。

「つー」

驚きつつ九乃助は、右足の靴紐のほどけた靴を踵まで脱いだ。豪は、自分に近づいてくる。

そして、殴りかかってくる。

彼の手は、そのように構えられていた。

「ふん!」

ブン――!

それを見計らつて、九乃助は右足を豪の突進が来る前に蹴つた。靴が勢いで脱げた。

「なつ――」

ダン――!

脱げた靴が、突進中の豪の顔面にヒットした。

ちょうど、鼻に当たつた。

だが痛かつたが、軽くだったので鼻血は出でていない。

当たった靴は、豪の顔から落ちた。

「なんだ、お前、男好きか・・・」

と、九乃助が笑いながら言つた。

てめ

しかし、このことは、男の怒りに火を注いだ。

豪に口と、向ふに墨に相ぶ方
九乃功は、両手をポカッテこ炎(

そして二人は段々、距離を縮めていった。

ジヤー！

トイレの水が流れる音がした。

ドアが開くと、汗だくの純太が出てきた。

「はあはあ・・・」

汗を拭いつつ純太は、トイレから過呼吸状態で出てきた。

彼は痔の痛みとタバコの辛さによつて腹膜がやられてしまつていた。

・・あの、大丈夫ですか・・

一層、激しくなる過呼吸で出てきた純太にレビンは話しかけてきた。

純太の過呼吸が落ち着いてきた。

「ありがとう・・・、君だけだ・・・。僕の心のアクシズは・・・」

「（アクシズ・・・？シャ・・・？）」

と、純太は涙を片手でわざとらしく拭いた。

ちなみに、彼はアクシズと、オアシスを間違つた。

それに、レビンは気づいた。

「ところで・・・、今日の『飯は？』

と、純太はトイレから出て、いきなり晩食の内容を聞いた。

「はい、私の得意料理の激辛のタン麺です」

そう答えられて、純太の顔が凍つた。

痔は治りそうにない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

タツ！タツ！

豪は両足で跳ねながら、体を上下に揺さぶった。
距離は十分に、九乃助に近づいていた。

さつ！

そして、豪は右腕を前に出した。

強力に握られた拳は、九乃助の顔にめがけて放たれた。

九乃助の方は、避ける気配すらしなかった。

「バチン！！」

強烈な打撃音がした。

「・・・・・」

豪は目を疑つた。

彼は、いわゆる筋肉自慢であつた。

田代、サンドバックを殴り続けていた。

そのため、両腕の筋肉とスピード、破壊力には自信を持っていた。

その拳で、立ち向かってくる奴は誰だろ？と屈させた。

拳を敵の顔にめり込ませてきた。

だが、そんな豪の拳が、いつも簡単に九乃助の左の片手で止められた。

顔面に拳が近づいた瞬間に、キャッチされた。

「なんだと・・・」

メキメキ・・

そして、豪の拳には握力からの圧力が来た。

物凄い激痛と、屈辱だった。

九乃助の握力は、万力のように徐々に強くなってきた。

「ぐつ！！」

豪は耐えた。

激痛を。

九乃助の口が開いた。

「お前の依頼者に伝えろ・・・。ビジネスで、あの女は預かってるんでね・・・。そう易々、渡したら俺の信頼性が崩れちゃう・・・。信頼性つて、崩されたら戻すの大変なんだぞ・・・、つてな・・・」

そして、九乃助は左手を離した。

その手から開放された、豪の右手は赤く跡がついていた。

「ぐつ・・・、てめ・・・」

豪は、右手を押さえてうずくまつた。

九乃助は、豪に背を向けて歩いて行つた。

「トーン！ トーン！ ！」

電車の音が、豪の耳に響いた。

右手は、痙攣を起こしていた。

そして、うづくまつてから、顔を上げたときには九乃助の姿は消えていた。

こんな簡単にあしらわれ方。

自慢のパンチを握られた屈辱は、豪に強い衝撃を与えた。

「奴が・・・、「関東圏の悪夢」だと・・・」

「ドン！ ！」

左手で地面を殴つた。

九乃助は、廃墟の事務所の灯りが見える所まで歩いた。
そして、ふと足を止めた。

「あの女・・

彼女が原因で、これからもあのよしの男が現れると思つた。

「あつ・・・

右足に違和感を感じた。

足元を見てみると、右足の靴がなかつた。

さつき、豪に蹴り上げた靴を回収するのを忘れたことに今、気づいた。

どおりで歩いてる途中、痛かつたと思つていた。

「だから、女は嫌いなんだ・・」

仕方なく、そのまま事務所に帰つた。

・・・・・・・・・・・・・・

第6話「優しさは甘えていたくはない」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい！わかりました！お受けします！」

と、レビンが受話器を持つて愛想を振りまいていた。
それを、九乃助が睨みつつ眺めていた。

「なに・・・勝手に電話出でんの、こいつ・・・

と、九乃助は声に出でずに思つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『一千円以上払つてくれる仕事なら、なんでも承ります。
ご用件は、こちらまで。

電話番号』・・

住所・・

b y (有) フリー・ナイン』

こんな看板が、都心に近い田舎町の駅裏に貼られていた。
ボロボロで、なんてことのない悪戯書きに近い看板があつた。

そんな看板には、今日も危険な雰囲気もしていた。

・・・・・・・・・・・・・・

ガチャン！

レビンが、受話器を戻した。

彼女は九乃助がトイレに行つた間に、勝手に依頼の電話を承つた。そして、トイレから出てきた九乃助は、彼女の行動に腹を立てていた。

レビンは、振り返った。

「あの」近所の山崎さんが、飼っている猫を探して欲しいとの依頼です」

と、九乃助に向かつて言った。

九乃助は、椅子に座つてタバコ吸つていた。表情は強張っていた。

いつに間にか、彼女がマネージャーみたいな真似をしてるのが油断にならなかつた。

そして、灰皿にタバコを押し付けた。

「純太は？」

居なくなつた純太のことについて聞いた。

今朝から見なかつたのだった。

そして、ポケットからタバコ一本出した。

「病院です。しばらく、入院ですって・・・」

そう答えられて、九乃助はタバコを落とした。

前話から、更に悪化してしまったのだった。
そして、脂汗がたくさん出てきた。

「九乃助さん・・・」

と、レビンが九乃助の様子の変化に気づいた。

「猫探してくる・・・」

そう言って、九乃助は立ち上がった。

急ぎ足で、事務所のドアへ向かって行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらくして、九乃助の顔には猫の引っ搔き傷が出来ていた。
依頼が終わつた足で、事務所のドアの前にいた。

九乃助は、しばらくレビンと居なければならぬことに嫌気を感じた。

女性不信の彼には、辛い日々である。

いつも、心の中で葛藤しなければならなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ドアに鍵がかかっていた。

そして、持つてた合鍵で開けてみると、事務所に入るとレビンの姿
が見えなかつた。

左右に首を回したが、どこにも見なかつた。

居ないと思って、九乃助はホッとした。

そして、テーブルを見ると書置きがあった。

新聞のチラシの裏に書かれていた。

「買い物に行つてきます　by レビン」と、書かれてあつた。

「・・・」

九乃助は、少し彼女のことを可愛い氣があると感じた。だが、頭がその気持ちを拒んだ。

そして、代わりに、九乃助の頭の中で血まみれになつて倒れこんでいる高校時代の自分の姿と、多くの不良と、一人の女性の姿が現れた。

その頭の中での光景は、妙に生々しく鮮明な記憶であつた。

「また・・、思い出しちまつた・・」

と言つて、また事務所から出て行つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

廃墟の事務所の一階には、駐車スペースがあつた。

そこには、九乃助が無理して中古で買った「シビック」という車があつた。

この車は、エンジンメーカーとして有名なホーダ社の代表である「シビック」の3ドアのハッチバック式のレーシングモデルであつた。

九乃助は、車好きで去年貯金で購入したのであつた。傷があると、すぐ板金に出すほど大切に扱つていた。

九乃助はブラシとバケツや洗車用具を持って一階に来た。
今日も洗車をするはずであった。

だが・・。

バケツと、ブラシが手から落ちた。

なくつていた。

愛車、シビックが。
どこにもない。

九乃助は、事務所に走った。

やつぱり、シビックのキーがなくなっていた。
シビックは、レビンが乗つていったのだった。

「あの女ああああああああ――――――――――――――

九乃助は泣き叫んだ。

とりあえず、レビンが壊さないでくれるように九乃助は祈った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

数時間後、シビックがレッカーに引っ張られていた。
みるも無惨な姿で。

「・・」

九乃助は、口を開けてボーゼンと立ち尽くしていた。
その横で、傾斜の駐車場で、サイドブレーキをかけずに降りたレビ

ンは泣きながら謝つていた。
だが、耳には入っていない。
ショックが大きすぎて。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

第7話「世界中の誰もが解らなくても」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここは、高速道の橋の下。
夜なだけあつて、車のマフラー音が響いていた。

そんな場所に、学生服を肩に掛け、太めの腹にさらしを巻いたリーゼントの男と、細めの学生服を着た少年の二人がいた。
二人の手には、木刀が合った。

どうやら、他の不良たちと大きな喧嘩をするようであった。

「本当に来るのか・・・」

と細めの少年、池田が言った。
足が震えていた。

「大丈夫だ！－フリーナインの噂シビック」
が本当なら、あの伝説の「関東圏の悪夢」の異名を持つ元不良が、シビックに乗つて現れるはずだ・・・

」

と、太目の大田が言った。

これは、都市伝説レベルの噂であった。
「EKのマフラーと共に、奴は現れる」
という言葉が、この地域にあった。
そして、伝説にもなっていた。

この一人がフリーナインに頼つたのも、事情があつてだつた。

池田、大田の二人は、某高校の不良コンビであった。
そして、集団で行動を取らないという美学があった。
そのせいで、ホモと誤解されていた。

この二人が他校の生徒と揉め事を起こし、今日の決戦のような形に入つた。

だが普段、集団で行動しなかつたため味方が少なく、向こうの高校が集団で攻めてくるのことを聞いて、人数不足の穴埋めにフリーナインに頼つたのだった。

まさに、神にすがる気分であった。

二人は、シビックの爆音かつ、旋律の様に美しくもあるリズムのマフラー音が来るのを待つていた。

もうすぐ他校が来る。

ここで、退いたら、自分たちの面子やプライドが地面に着く。
それだけは出来ない。

だから、必死に一人はシビックを待つていた。

そのとき・・。

チャリンチャリン！

「！！」
「！！」

弱々しい自転車のベルが鳴つた。
キコキコと、ペダルの音がした。

「待たせたな・・」

フリーナインこと、九乃助が自転車にまたがつて現れた。

サラツ・

二人の手から、木刀が落ちた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ブハー」

九乃助は、いつものように吸い終わつたタバコを携帯灰皿に押し付けて火を消した。

ちょうど、一本吸い終わつたのだつた。

不良の二人が、白い目で九乃助を見つめていた。

「いやだからさ・・。本当に、私がフリーナインの焼野原です・・。
シビックはね・・。大破したのよ・・」

と、必死で身柄の証明を高校生にしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

池田と大田は、九乃助と距離を離して隅っこで二人つきりになつた。

「本当に、あいつが噂のフリーナインなのか!」

と、池田が弱々しくも大田を問い合わせていた。

呼んだ本人の大田は、困つていた。

「弱そうだぞ！！」

「つるさいな！！」

「なんだと、『ゴララ』！！」

大田は逆ギレした。

その態度に、池田は大田の襟首を掴んだ。ついには、喧嘩に発展した。

その二人っきりで言い争う光景を見て、九乃助は、この二人はホモか？と思いつつ、タバコを吸っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いつの間にか、高速道路の橋の下は賑やかになっていた。

「おい、お前ら、3人だけか？」

「マジかよ・・」

「÷10で、ちょうどだぜ・・」

と他校の30人の集団が、高速道路の橋の下に現れた。

しかも、丁寧に木刀、チーン、バッドなどの武器を持っていた。それにびびりまくる池田と大田の一人は、すでに傷まみれであった。何故なら、さつきの言い争いで、一人は30人が来る前にエネルギーを使い切っていた。

「抹茶アイス、うめー」

近くのコンビニで買ってきたアイスを、九乃助は食べていた。

30人も来たのに、動じても居なかつた。

「おい、コラ・・・」

一人の木刀を持った巨漢の学生が九乃助に近づいてきた。

「てめ、こいつらの使いか?」

と、九乃助の首に木刀をつけた。

「ああ」

氣にせずに、アイスを口に入れていた。
その態度が、巨漢の勘に障つた。

「アイスじゃなくて、俺を舐めてのか・・・」

バゴッ!

九乃助のアイスを持つ手に、木刀で叩いた。

バチャツ・・・。

アイスが九乃助の左手から落ちた。

木刀で殴られた手が真っ赤になつていた。

「ひつ・・・」

それを見た池田と大田は、ひやつとした。
血の気が一気に引いていた。

そして、二人して意識が消えそうになった。

「はははっ！…ざまーねー」

一方の30人組は、大笑いしていた。
九乃助の服は、アイスで汚れていた。

ちょうど、ズボンの股間にアイスはかかった。
その姿は、無様にしか見えなく30人の笑いを誘つた。

「・・・」

九乃助は、下を向いて震えていた。

木刀を持った巨漢は、今度は木刀を大きく振り上げた。
剣道で見る面の体制だった。

「いつまで震えてんだ・・・、こら！」

木刀で振り落とされたら、当然、無事では済まされない。
巨漢は、それを解つて振りかぶった。
そのように、彼らに容赦がなかつた。

だが、本当に容赦がなかつたのは、九乃助であつた。

「貴様・・・」

九乃助は、木刀をふりかぶった巨漢を睨みつけて立ち上がつた。

「あつ？」

巨漢が、睨み返した瞬間。

九乃助は、左手を動かした。

さつー！

巨漢の顎に、なにかが当たった。
痛くはなかつた。

だが・・。

「あれ・・」

巨漢は不思議な光景が見えた。
景色と地面が傾いた。

まるで、地球の重力がおかしくなったかのじとく。

よく見ると、九乃助の赤くなつた左腕が大きく開いていた。
いつの間に・・。

あんなに動いた・・。

あの左手が顎に当たつたようだつた。

と思つた瞬間に、巨漢の意識が消えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

バタン！！

「なんだ！！

巨漢が、地面に横に倒れた。

そのことに、不良たちは驚いた。

「てめら・・」

九乃助の巨漢の顎を叩いた左手が、ポケットに入った。
そして、30人にメンチを切つた。

「このズボン、いくらしたと思つてんだ・・」

股間が、アイスで汚れていた。
そして、見つとも無かつた。

「やつちまえ！・！」

集団のリーダー格が、そう言つた。
それに合わせて、ドドドド！・！と、九乃助に30人が突進して行つた。

「ケツ！」

九乃助は、両腕をポケットから出した。

そして、ボクシングのスタイルのように構えた。
30人の顔が迫つてゐるのに怯えては居なかつた。
むしろ、冷静に歩を出していた。

そして、集団が九乃助の数メートルに來た。

「おら！・！」

九乃助の拳が前に出て、一人を吹つ飛ばした。
更に、後ろから攻めてきた者を蹴りではじき返した。

そして、木刀で殴りかかってきた者を足で手元を蹴り上げ、持つていた木刀を離せた。

四方八方から敵が来た。

だが攻撃を受けつつも九乃助の猛攻は、早くも16人の意識を吹っ飛ばした。

そして、一人、また一人と意識を吹っ飛ばして行つた。

チエーンが手に巻きつかれても、九乃助は相手にもしない。顔が切られても、相手にもしない。

木刀の打撃が来ても、相手にはしない。

痛みにおびえてはいない。

これが、九乃助の強さだった。

ちなみに、いつの間にか、池田と大田は気絶していた。
だから、この光景は見ていなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・

俺、大田 太（17歳）、女性経験なしは、池田と共に死んでしまつたのだろうか・・・。

役に立たないお兄さんの登場と、30人の集団にびびり上がつて気を失つてしまつた・・・。

ああ・・・なんという恥ずかしさだ・・・。

これが、高校で番張つてた俺が、こんな無様にやられるなんて・・・。
高校では、ホモ扱いされてたな・・・。
いや、それはどうでもいいや・・・。

ああ・・・なんて恥ずかしい死に方だ・・・。

これが、「恥ずか死」
なんちゃつて・・・。

はははは！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

気づけば、もう朝日が昇つた頃だった・・・。

「はっ！！」

大田が、目を開けた時には信じられない光景が広がっていた。
30人もの不良たちが、地面とキスをしていた。

いや、彼らは「大地愛好家」ではない。
地面に倒れこんでいたのだ、30人全員。

そして、その先には陸橋の足にもたれて、タバコを吸っている九乃
助がいた。

信じられなかつたが、大田は九乃助が全員を倒した思つた。

「嘘だろ・・・。自転車の兄ちゃんが・・・」

大田は、目を疑つた。

だが、九乃助の生傷が30人を倒したことを証明していた。

「はー」

いつものように吸い終わったタバコを携帯灰皿に押し付けて火を消
した。

そして、田を覚ました大田の方を向いた。

「やつと、起きたか・・・」

そういうと立ち上がった。
大きく背伸びをした。

「じゃあ、帰るぜ・・・。依頼料は、銀行に振り込めよ

そう言って、大田に背中を向けて去って行つた。
朝日と、九乃助の背中が重なつた。
そのせいか、九乃助が輝いて見えた。

「なんて・・・」

大田は、思わず声を上げた。

「いい男・・・」
「・・・」

彼は亦モなのが、誰にもわからなかつた。
ただ、九乃助の背中には悪寒が走つた。
あと、ズボンには、まだ股間に変な染みがついていた。

「お母さん、これおからだよ・・・」

訳のわからない寝言を、池田は言つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第8話「譲り合い宇宙」

「あれ？　・・」

事務所に、レビンは九乃助の靴がないことから出かけたと思った。
日曜の朝、早くから出かけているとは・・。

• •

俺の名は、篤元豪（一九）・・。

に、油断して負けた。
田舎だ・・。

この屈辱の怒りは、消えそうにない・・・
あれから、サンドバッグを何回叩いたか・・・
そして、どれだけ汗を流したか・・・。

だから、今度は奴を倒せる・・・。

だが、今は電車に乗っている。。

何故なら
・
・
。

都内某所で、
フィギュアを買った後だからだ・・。

しかも、いわゆる「萌え系」・・・

体を鍛えるのが生き甲斐ではあったのに、いっその趣味に、いつか

ら走ってしまったのだろうか・・。

畜生・・。

まあ、いい・・。

このまま、埼玉の家に・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつ・！」

と電車の吊り革に体重をかけ、肩には紙袋を持っていた豪を九乃助は発見した。

「えつ・！」

豪は、目の前に九乃助がいることに気づいた。
同じ電車に乗っていたのだった。

「あつ・・・」

豪の目の前の九乃助は、紙袋を持っていた。
電車の中で、立ち会う二人は言葉を失った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、篠元 豪（19）・・。

以前、「フリーナイン」と「焼野原 九乃助」に（中略）どれだけ汗を流したか・・。

だから、今度は奴を倒せる・・。
自信はある・・。

だがフイギュアを持った、今の俺には無理だ・・。
ばれたら、死んだも同然だ・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

豪は、汗がだらけになっていた。
もし、ここで戦つたら、フイギュアを破損しかねない。
いや、それどころか、これを奴に見られたら電車の窓を突き破るほど
の覚悟だった。

「貴様は、焼野原・・」

とりあえず、フイギュアの入った紙袋を背中の方に隠した。

「貴様は、『う・ひろみ・・』

九乃助も、何故か、無口だった。
同じく汗だくだった。

彼も、背中の方に紙袋を隠した。

「・・」

二人とも無口で睨みあつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、篠元（中略）自信はある・・。

だがフイギュアを持った、今の俺には無理だ・・。

出来れば、降りたいが、次の駅まで時間がある・・。

しかも、今の俺は不自然だ・・。

汗だらけだ・・。

しかも、無口だ・・。

とつあえず、声を出しておひづ・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「どうした、焼野原・・。大人しいじゃないか・・。こないだの仕返しが怖いか・・（俺のバカ！そんなこと、言つたら刺激しちゃうだろ！！！）」

と思わず、口を滑つてしまっていた。

「なんだと、『ハ・・』

と、九乃助が近づいてきた。

「威勢がいいな・・（うわー！近づいてきたー！ー！ー）」

豪の汗は、噴水のように溢れた。

しかし、九乃助は足を進めてはいるが、近づいてこなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、焼野原 九乃助（23）
好きなお菓子は、バームクーヘン。

以前、俺に喧嘩を売つてきた、『こう・ひろみ』という奴が同じ電車に乗つていた。

こいつは、以前、俺が怯ませた。
そのせいか、こいつの今の目は飢えた獣のよつだ・・。
汗の量も、奴の気合か・・。

こいつに勝てる自信はある・・。
だが、今は無理だ・・。

ガンプラを買つた今では・・。

畜生・・、こいつ・・。
何故、仕掛けてこない・・。
不気味だ・・。

。 とりあえず、ガンプラを見られたら、こいつにオタクと思われる・・。

耐える・・。
今は、耐えるんだ・・。
俺・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ママ・・、あの人たち・・」

「見ないで！！」

「きもーい・・」

「男同士で、見つめあつてる・・」

「最近、世の中、どうかしてるな・・」

「駅員、呼んだ方いいんじやねえーか・・」

そんな電車内の周囲の声が、二人の耳に入つても、一人は動けなかつた。

二人の汗は、止まることを知らなかつた。

二人は、互いに呪縛があつた。

下手に動いたら、バレる。

相手が動いたら、もつとバレる。

この二人の呪縛が放たれるのは、電車が止まる時だけだつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、篠（中略）フィギュアを持った、今の俺には無理だ・・。

電車ーーーーーーーーーーーーーー

止まれーーーーーーーーーーーーーー

止まってくれ――――――――――――――――――――――

俺の心臓が止まる前に――――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、焼（中略）好きなお菓子は、バームクーヘン。

電車――――――――

止まれ――――――――

止まってくれ――――――――――――――

俺の心臓が止まる前に――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はっ！」

「はっ！」

「はっ！」

一人は気づいた。

この電車は、終点までの特急だった。

一人は、じつ思つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

電車――――――――

止まれ――――――――

止まれ――――――――

止まってくれ――――――――――――――――――――

俺の心臓が止まる前に――――――――――――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「終点ー。お荷物の忘れ物のないよう・・・

というアナウンスがあった。

終点に着いたのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「じゃあな・・・」

と、電車から降りた豪が手を挙げた。

「ああ・・・」

九乃助は、それに答えた。
二人は、早歩きで去った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の名は、篠（中略）

なにやつてんだ・・・、俺・・・。

俺の名は、焼（中略）好きなお菓子は、バームクーヘン。
なにやつてゐんだ・・、俺・・。

・・・・・・・・・・・・

第9話「もう泣かないで」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「逃げた、娘の行方は・・・」

中年の男が、高いビルの窓から夜景を眺めながら電話に向かって言った。

「フリーナイン」とかいう、チンピラの事務所です・・・
「わかっているなら、すぐ行動を取れ・・・」

プチン・・・。

電話は切れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「お前という娘は、自分の立場が解つていないのでーーー！」

「まつたく、あなたつて娘は・・・」

「あの家の子なのに、なんて出来が悪いんでしょうか・・・
将来、あの子がお家を継げるのでしょうかね・・・」

もつ嫌だ・・・。

そんなこと言われるの・・・。

だから逃げたんだ。。。

家から。。。

国から。。。

日本へ。。。

でも、追いかけてくる。。。

怖い。。。

怖い。。。

助けて。。。

「つーー！」

夏場で暑くて寝苦しかったので、タオルケットに変えて眠っていた
レビンが急に目を覚ました。

汗でダラダラだった。

時間は、日曜の朝の6時。

いつも、この時間で悪夢で目が覚めていた。

また、あの夢かと思いつつ、レビンはベッドから立ち上がった。
窓を見てみると、ちょうど朝日が昇っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

汗だらけで、気持ち悪かったのでシャワーを浴びた。
冷水の冷たさで、悪夢の後味が頭から離れて行つた。

フリーナインの事務所に来てから、3日 | 一回のペースで悪夢を見ていた。

そして、そのことを忘れようとして朝は、シャワーを浴びていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつ！」

事務所に行くと、九乃助が、朝6時にも関わらず起きて新聞を読んでいた。

片手には、わざわざ買い置きしてあるマックス・コーヒー。

「珍しいですね・・・」の時間帯に起きてるの・・・

「悪いかよ・・・」

と、返された。

よく見ると、どこか落ち着きのない様子の九乃助であった。

なにか、いいことがあったのだろうか・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1時間して、身支度を終えた九乃助は無言で外に出て行った。様子がおかしかった。

珍しく鼻歌を吹かしながら、上機嫌であった。
しかも、軽くステップをしながら。

未だに、レビンは九乃助のことを掴めてはいなかつた。
性格というか、キャラクターが解らなかつた。

ただ解つてゐるのは、女性不信であること・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらくして、曇すぎであつた。

ブォン！ブォン！！

と、しばらくして事務所の外で車のエンジンの音がした。
窓から覗くと、黒いベンツだつた。

そして、事務所の前で車が止まつた。

力チャヤツ・・

車のドアが開くと、そこから黒服の男が数人出てきた。

「はつーまさか、追つ手・・」

直感的にレビンは、自分の追つ手と気づいた。

そして、黒服数人は事務所の中へと来る。

レビンは、どこか隠れる場所を探した。
隠れても、無駄だと解つてはいた。

階段からは、数人の足音が迫つて来る。
連れ去られる・・。

と、レビンは覚悟した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ブロオオオオ――――――ン――――

と、ベンツはマフラーを鳴らした。

「・・・」

レビンは、ベンツの中にいた。

周りには、黒服数人。

ちょうど、首都高速に入った。

道路には、ベンツと後ろに白い車や、トラック軍団であった。

サングラスをかけた黒服一人が口を開いた。

「手間を掛けさせるのも、いいかげんにして下さい。お嬢様・・・

「よくも、こんな白昼堂々と・・・」

「焼野原 九乃助の様子を疑つたら、ちょうどいい頃合いだつたので・・・」

と、黒服とレビンは会話をした。

レビンは、うな垂れていた。

また、悪夢が現実になると思つていた。

そう考へると、涙がレビンの目から出でてきた。

頭には、九乃助の顔が浮かんだ。

九乃助（+純太）には、一応、家に泊めさせてもらつたり、優しくしてもらつた。

数日間だけだつたが、自分の辛い現実から逃げられた。

だから、彼女はせめて別れを言いたかった。

と後悔の念で一杯だつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

グオオオオオオオオ――ン――!

ベンツのスピードが上がった。

妙に、ドライバーが慌てていた。

「どうした?」

黒服の一人が言った。

「さつきから、白い車が後ろから離れないぞ・・・」

ドライバーがそう言ったので、後ろを見てみると白い車がいた。
首都高速に入る前から、引っ付いていたのだった。

加速して付いて行く。

しかも、白い車の方が早い。

なのに、引っ付いてくる。

妙だと思つたドライバーは、ベンツを一旦、休憩所に走らせた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

駐車場に置かれたベンツから、数人の黒服が出てきた。

レビンは、車の中に座られていた。

ヰヰイ
！！

と後ろに、さつきから付いて来る白い車も駐車場で止まつていた。

車に迷航の「スマート」

製造会社

ドアが開いた。

黒服は身構えた。

ポイ！！

「？」

人が出てくると思ったら、布袋3つ投げてきた。
それに、黒服が気をとれた瞬間。

パパパパア――ン！！！

布袋から、大量の口ケット花火、
更には、煙球。
ねずみ花火が飛び出してきた。

量かすをまじぐのR-Xとヘンツが煙で見えなくなつた。

「なんだ、これはーーー！」

「あの車の主をやれ！！！」

黒服の視界は遮られていた。

あつという間だった。

花火で視界を遮られCR-Xに氣をとられた瞬間に、ベンツにいたレビンは連れ去られた。

しかも、CR-Xは煙と共に消えていた。

犯人は、CR-Xのドライバーであるのは間違いなかつた。その証拠に、ベンツには置き手紙が残つていた。

『舐めるな　by フリーナイン』

黒服は、この置手紙を破り捨てた。

駐車場の周りには、さつきの騒ぎで警察が来ていたのでベンツもこの場から去つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

白いCR-Xが、首都高を戻つるように走つていた。

運転していたのと、レビンを連れ去つたのも、もちろん九乃助であつた。

中古だが車の納車があつたので、今日は機嫌が良かつたのであつた。そして、事務所に戻つたタイミングと、レビンがベンツに乗らされたタイミングが合つていた。

だから、追つて、レビンを奪い返せた。

「うう・・・

助手席には、レビンは泣きながら座っていた。

九乃助は、その様子を見てハンドルを握っていた。

「泣くな！――うるせえ！――あと、助けたのは依頼だからだぞ！――」

と、言つてやつた。

「助・・・、けて・・・、くれ、あり・・・、がとう・・・」

泣きながらだつたんでも、聞き取りづらい声だった。
精一杯の感謝だつた。

「だから、女は・・・」

がばつ！

レビンが歓喜あまつて、運転中の九乃助に抱きついてきた。
ハンドルがすごい乱れた。

「うああ！――バカ！――抱きつくな！――うら――あと、てめーには、
この車もう乗せねえからな！――！」

と、ハンドル体制を戻しながら事務所に帰つて行つた。
ちなみに、CR-Xはシビックの代打で購入したのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第10話「弱気な僕」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「どうした……お前ら……」

と、高校の教師、武田剛志は叫んだ。

夕方のグラウンドには、へばって倒れこんだ球児たちがいた。時期は、もうすぐ甲子園の予選。

だから、顧問の武田は指導に力を入れていた。

練習の内容は、過酷そのものだった。

それについて行けずに、生徒たちが反発した。

「先生の指導には、ついて行けません……！」

と、キャプテンが言った。

チームメイトも同じ気持ちだった。

武田は、彼らを甲子園に連れて行きたかった。だから、過酷な練習をしいらせた。

その気持ちは、生徒たちには伝わらなかつた。

「よくも、そんな軟弱なことが言える……俺の指導についていけないのなら……、甲子園に行きたくないのなら……！直ちに、出て行け！……！」

グラウンドに、その声が響き渡つた。

その響き渡つた声が、へたれこんだ球児たちを立ち上がらせた。

数秒後・・

「・・・」

グラソンドには武田しかいなくなつた。

野球部のメンバーは全員、去つて行つた。

武田を残して。

もつすぐ、甲子園の予選が始まる夏の香りだつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翌日

フリーナイン事務所に、武田がいた。

椅子に座つた九乃助は、前日の武田の出来事を聞いた。

「なつ！頼むよ！一緒に、スマッシュブラザーズやつた仲だろ！」

と、武田が九乃助の手を握つて頼み込んでいた。

この一人は、他校同士ではあつたが高校時代、地元で2大不良として言われていた仲だつた。

「関東圏の悪夢」と呼ばれた喧嘩術の天才、焼野原 九乃助。
「関東圏の彗星」と呼ばれた喧嘩術の秀才、武田 剛志。

地元でこの名を知らない者はいないかも、と言っていた。
そんな武田は、いつの間にか、高校教師となつた。

理由は、制服マニアだつたからだ。

「頼むよ！…焼野原！！野球部の代打をやつてくれ…！」

「やだよ、野球なんかやつたことねえよ・・・」

「野球漫画、「幕張」全巻読めば解るよ…！」

「解るかあ…！」

抜けた野球部員の穴埋めを頼まれていたが、嫌だった。

あまり運動が好きではなかつたのだ。

それに、武田は一方的な性格だったので、九乃助はあまり関わりたくなかった。

こないだ、武田の借金の保証人になつていたり、高校の時、他校なのに卒業の寄せ書きを書かされたりと、強引な男なので駄目だった。

ガチャツ・・・

事務所のドアが開いた。

開けたのは、レビン。

「あれ、お客様ですか？」

と、レビンは武田を見て言つた。

武田は、その声に振り返つた。

「…」

キュピーノン！

ガダムで、ニコータイプが反応したときに出るあの音が出てきた。

「お茶持つてきまーすねー」

と、事務所からキッチンに走って行った。
笑顔を振りまいて。

だいぶ、この接客(?)に慣れて来たようだった。

「・・・」

レビンを見てから、武田の目が肉食獣のよつた目になつた。

「焼野原君・・・」

「はい・・・」

「彼女は、君のアレか・・・」

「アレつてなんだよ・・・。ちげえよ・・・」

武田は改まって言った。

気のせいか、どこか紳士的になつた。

「だよなー、女不信だもんなー。それに、あんな18歳前後の身長、
160~155あたりの細身の娘が、お前なんか好きになるわけが
ない!ー」

「うるせーー(こいつ、ええーー)」

と、笑つた。

いつの間にか、チョックしながら。

武田は笑いながら、タバコを懐から出した。

「まだ、あの事件、気にしてんのか・・・」

急に真剣な顔つきで、武田はタバコを咥えた。

「あの事件だけは、語るな・・」

九乃助の顔つきが鋭くなつた。

嫌な思い出が、九乃助の脳裏に浮かんだ。

「いいかげん、忘れる・・」

タバコに火をつけた。

武田の脳裏にも、その時のこと�이思い出されていて。脳裏に浮かぶのは、血まみれになつて倒れこんでいる高校時代の九乃助の姿と、多くの不良と、一人の女性の姿が現れた。その頭の中での光景は、妙に生々しく鮮明な記憶であつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「レビンちゃんは、いくつー」

「18です・・」

「いやー、おいしい年頃だねー」

「(おいしい!!?)」

お茶を運んできたレビンの肩に手をかけて、馴れ馴れしく武田が話しかけていた。

そして、レビンの肩から手の位置が、少しづつ下の方に向かつていった。

紛れもないセクハラ行為だつた。

「つーか、てめー、野球の話はどうなつた!」

そのセクハラ行為を見て、九乃助が椅子から立ち上がって言った。
まるで、レビンが困つてゐるのを救つてやるよつた言い方だった。

「そうだつたな」

武田の手が、レビンから離れた。

それに、一安心したレビンは武田から距離を取つた。

「頼む！高校球児の代打をやつてくれ……！」

武田が、地面に手をつけて土下座した。

その熱意には、九乃助、レビンは驚いた。

武田は甲子園に行きたかった。

高校時代、彼は野球部だったが、1年生の時、先輩と揉め辞めた。
甲子園に行きたいと夢があつたが、その夢も野球を辞めてからの不良生活で消えて行つた。

だが高校生教師になり、熱心に野球をする球児たちを（TVの甲子園中継で）見て、あの頃の甲子園の夢が甦つた。

自分の夢である甲子園を目指したい。

その思いが、武田を土下座させた。

甲子園への憧れない球児たちは去つて行つたが、武田の夢は消えない。

その思いが、九乃助に伝わつた。

「いいよ……」

「本當か……」

土下座から、武田は顔を上げた。

九乃助には、断る事なんか出来なかつた。だが、ひとつだけ気になることがあつた。

「残りの8人は？」

「大丈夫だ！！かつての高校の仲間を呼んでいる……」

「本当か！」

「野火、スネ川、栄杉、藤間、マサオ、阿部、磯平、そして、俺だ

！…」

「これなら、野球が出来る……」

いつの間にか、九乃助も楽しそうだった。

二人の顔が、高校時代のように光り輝いていた。

あんなに、楽しそうな九乃助は、レビンの目には初めて映つた。よほど、その時の思い出が美しかつたのだろう…。と、レビンは思つた。

だが、もうひとつ思つた。

甲子園は、高校生じゃないと出れないと…。

予選の審査が通らなかつたという通知が来るまでの二人は、肝心なことを忘れながらも光り輝いていた。

第1-1話「朝が来るたび」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夏の日差しが、アスファルトを突き刺していた。
建物の多い東京近くのS県の気温は、上昇するばかりであった。
しかも、湿度も高い。

体の体温の調整もままならないこの頃。
最低でもエアコンで除湿しないと危険な口和に、フリーナイン事務所は最悪の事態が起きていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

事務所には、熱気と湿気が充満していた。
エアコンでの空調も除湿もされていなかつた。

「畜生……」

九乃助は、椅子に座つて机を叩いた。
全身からは、汗が滝のように流れていた。
彼は、パンツだけであった。

「あつづ……」

ソファーに横たわるレビンも、汗を流しながら団扇を必死に仰いでいた。

しかも、彼女は恥じらいもなく下着姿だった。
それを気にしないのは、九乃助が女性不信だからである。

だが、年頃の少女を下着姿までに至らせるのに理由があつた。

エアコンが壊れたのであつた。

どうやつても、始動しないし、冷房も出来ない。

電気屋さんに修理を頼んでも、最低でも2日ぐらいはかかると言わ
れた。

だから、今日、彼らは少しでも涼しい思いをする努力をしていたの
だつた。

だが、夏の日差しは手加減しなかつた。

窓を開けても、熱気が差し込んでくるだけ。

窓を閉めたら、蒸し焼きになつてしまふ状態である。

九乃助は、氷袋で頭を冷やした。

足には、バケツに大量の氷と冷水が入つていた。

「なんて・・・、気持ちがいいんだ・・・」

まさに、至福の時であつた。

・・・30分後・・

氷が解け、いつしか冷水がお湯になつていた。

「W R Y Y Y Y Y - - - ! ! !」

バケツを投げた。

お湯となつた水が、綺麗に飛び散つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

下着姿のレビンが立ち上がった。
立ち上がると、汗が落ちた。

「どこ行くんだ・・・てめ・・・」

「シャワー室です・・・あそこで、冷水浴びてきます・・・」

「なにっ！」

と、レビンはシャワールームに向かつた。

だが九乃助が、急に立ち上がってシャワー室の前まで走った。
そして、レビンがシャワー室に入るのを拒んだ。

「なにするんですか・・・シャワー浴びるだけです・・・」

「俺が、先に浴びる・・・」

「はあ！待つてください！だつたら、私の後でして下さい！それと、
なんで、私が立ち上がってからなんですか！！！」

と、九乃助はレビンのシャワーを横取りしようとしたし始めた。
暑さでイライラしてたせいか、レビンが珍しく怒り気味であつた。

「急に、冷水浴びたくなつたんだよ！――」

エゴ丸出しで、九乃助は論した。

その言葉に、レビンは反抗し始めた。

「エゴですよ、それは！――無理矢理でも、入ります！――」

と、九乃助の体を退けようとしたし始めた。

「うるせー！――俺の後に入れ！――」

その場を退かない様に、九乃助は力を入れた。
レビンの手には、更に力が入ったが、彼女の力では九乃助は退かせなかつた。

「貴様、俺のシビック壊したくせに偉そりだぞ！！」
「つー！」

レビンは、力を入れるのをやめた。

シビックのサイドブレーキを引かなかつたこと罪悪感が残つていたのだった。

彼女はシャワーを浴びるのを諦めた。

「俺の勝ちだ・・・」

と、シャワー室に九乃助は向かつた。
これで、やつと冷水を浴びられると思つた。
その時に、レビンが一言言い放つた。

「一緒に入つていいですか・・・？」

九乃助のドアノブを持つ手が止まつた。
まるで、漫画や深夜帯のアニメのような一言を言い放つた。
そんな恥ずかしいことを言つた彼女の顔は照れていた。

「いやだよ、バカ。シビック壊したくせに」

その一言で、レビンの照れた顔は青く染まつた。
シャワー室のドアが閉まつた。

半ば本気で言つてしまつた自分の痛さを、レビンは痛感した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夕方、少し涼しくなつた時間帯であった。
さすがに、一人は下着姿をやめていた。

窓を開ければ、夏の匂いがした。

窓の外は、街中ではあるが、どこか風景になつていた。

「明日には、ニアロンが戻つてくるといいですね」

と、レビンが窓から外を眺めて言つた。

そう言われて、九乃助は椅子から立ち上がつた。

「2日かかるんだぞ・・・。戻るわけあるか・・・。冷やし中華でも食
い行くか・・・」

と、しぶしぶ夕食にレビンを誘つた。

「はいー。」

それに対して、断るなど思わずレビンは窓を閉めた。

「九乃助さんが、誘うなんて珍しいー。女性不信のくせにー」

「じゃあ、来んな

「行きますー！」

そんなやり取りが、ありつつも一人は事務所を後にした。

九乃助はレビンに対して、どこか丸くなつていた。

あまり、女性のことになると思いつ出す血まみれの自分を思い出さな

くなっていた。

事務所に戻ると、熱氣にまみれていた。
涼しくなったと油断した隙に、サウナになっていた。

「…」

二人は、言葉が出なかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とある山中の道路で、九乃助のCR-Xが走っていた。

木々からは、木漏れ日が漏れ、夏らしい景色であつた。

ナイン

そして、車を走らせてから、ボロボロで誰も通らなくなつたトンネルが見えた。

トンネルの手前で、丸乃助は車を停車させた。

九乃助は車から降りて空気を吸つた。

そして、改めて依頼のメールを確認した。

トンネルの周囲で物を失くしたので、一緒に探して欲しい。そのトンネルの前で待つ。』

とのことであつた。

その依頼は、ファックスからであつた。

トンネルの前には、いつの間にか、依頼人らしき男がいた。

「どうだが」「どーもつすー、フリーナインの焼野原さんですよねー」

男は、リーゼントで学生服のいかにもヤンキーな姿であった。

地元に、「Jーいう奴いたなー」と、九乃助は思つた。
そして、思い出すに、あのファックスの字が汚かつたと氣づいた。

「あのつすね・・・Jーで落し物したんですよー」

と、男が言い始めた。

「なにを落としたんだよ」

「くまのぬいぐるみですよ」

隨分、可愛い物落としたな・・・と、九乃助は思つた。

「彼女の誕生日にプレゼントに買つたんですけど、Jーで落としちゃいまして。だから、Jーの森の中にあるんじゃないかと思つて」

「ああ・・・わかった」

「お願ひしますー」

こつして、二人での落し物探しが始まった。

だから、九乃助は着てたTシャツを肩まで捲くつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

森林の中では、蝉の声がうるさく響いていた。

木陰があるとはいえ、それでも日差しが暑かつた。

そんな状況の中、男一人が草を搔き分けてのぬいぐるみ探しをして
いた。

「いやー、彼女には迷惑ばつかけてるんで、明日の誕生日ぐらい
は祝つてやらないと、他の男と寝ても文句言えなくなりますしー」

と、男が話しかけてきた。

九乃助は地元にも、こーいう奴いたなと、また思った。

男の話によると、彼女とは、自分の一田惚れから土下座して頬み込んで付き合い始めたそうだ。

彼女は、面倒見が良くて、たびたび迷惑をかけていたそうだ。
男は見たとおりのヤンキーで、頭も良くなく、デートするにも常識不足から、彼女に気を使わせたり、物壊したりした時に弁償せたり、謝罪せりさせた。

しかも、街中で喧嘩した時の後始末も彼女がやつていた。
アイスクリームを奢つてやろうとしても、お金が足りなくて、結局、
彼女に払わせたりと、随分とほほ・・なことばかりやらかしていた。
その彼女の誕生日は明日のため、珍しくプレゼントをやろうと彼は
思つたが、そのプレゼントをこの森に落としちまつたりと、随分、
彼はへたれであった。

だが、彼は彼女のこと大切に思つてるのは、確かだと、九乃助は
思つた。

「あいつは、本当、俺が喧嘩してボコボコになつた時も、親から見
離された俺を、ずっと看病してくれて・・・とつても優しい奴で・・・
。本当に、結婚して、幸せにしてやりたいなと思つてゐんですよ・・・

」

男は、よほど彼女を愛しているようであった。
だが、女性不信の九乃助には、少し理解しづらかった。

「九乃助さんは、彼女はいないんですか・・・

「いない・・・」

「マジで！可哀想つすね！・・・」

と余計なこと言われて、ムツと来た。

「とりあえず、口より手動かせ！！」

九乃助は説教をしてやつた。
どこか、この男は自分の地元にいた頃の仲間を思い出させる雰囲気が
があつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

数時間経っていた。

未だに見つからないでいた。

汗だらけになりながらも、九乃助は探した。
草を搔き分け、木々の陰などを細かく黙認して探していた。
後ろを見ると、学生服を脱がないで男はぬいぐるみを捜していた。

「暑くないのかー」

と、九乃助が声を掛けてやつても、男は大丈夫だと答えた。
日差しが午後に入つて、更に厳しいのに大丈夫なのかと思った。
男は、必死に探していた。
彼女のために、一心不乱で探していた。
よつほど、彼は彼女を大切に思つていた。

・・・・・・・・・・・・・・

「あつた！！！」

と、夕日が沈んだ頃に、男が声を上げた。

その声を聞いて、九乃助は前屈みから立ち上がって、腰をひねった。

「本當か！！」

「ヒロにありましたよー。」

と、男の声がする方に、九乃助が走った。
だが、声はするが男の姿が見えなかつた。
すると、九乃助の足元にぬいぐみがあつた。
ぬいぐるみの脇には、メモ一枚が挟まっていた。
そのぬいぐるみ見つけた男の姿は見えない。

「おーい！…ヒロにいるんだ！…」

男の姿が消えていた。

せっかく、ぬいぐるみを見つけたのに、急に消える奴がいるかと思つた。

そして、メモを開いた。

『すいませんが、このぬいぐるみを、誕生日は明日ですが、この住所まで届けてください。一緒に探してくれて、ありがとうございます』

す

と書かれていた。

汚い字であった。

このメモは、いつの間に、書いたんだ。

更に、なんで男は姿を消したんだと思った。

いろんな疑問がありつつ、ぬいぐるみを持って車の方に向かつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メモに書かれた住所を宛てに、例の彼女の家に向かった。
この先の農家であった。

田んぼが多いだけに、農家が多くつた。

よく見ると、どこかで葬式をしているようだつた。

例の彼女の家に、九乃助は車を止めた。

そして、玄関を叩くと、例の彼女が出てきた。

「これ、あんたの彼氏からの誕生日プレゼントだそうだ。・。・。あい
つは、どつかに消えたけど・。・。」

と言つて、そのプレゼントを渡した。

「えつ・・・」

彼女は驚いた。

その様子は、変だつた。

九乃助は、ぬいぐるみに挟まれてたメモを渡した。

「この字は彼の・・・」

そのメモを、握った彼女の目から涙が出てきた。

九乃助には、なにがなんだか解らなかつた。

彼女は、ぬいぐるみを抱きしめて泣き崩れた。

声を出して、泣き始めた。

「なつ・・・、ビウした・・」

九乃助は、慌てた。

そして、さつき見つけた葬式をしている農家が目に入った。

「一」

その農家に向かつて、九乃助は走り出した。
何故かは、わからないが、急に走り始めた。
あの男は、もしかして・・。

「・・・」

その葬式中の農家の前で、九乃助の足が止まつた。
そして、田を疑つた。

葬式中の農家に、あのリーゼントの男の写真があつた。
そして、彼の名前があつた。

彼は、数日前に、あの森林の近くでバイクの事故を起こして帰らぬ人となつていた。

事故は、あのぬいぐるみを購入した帰りに起きた。

だが、今日、九乃助はあの男に会つていた。
そして、一緒にぬいぐるみを探した。
大切な彼女のために。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

線香を上げてから、九乃助は、この場所を去つた。
この幽霊話をして、誰が信じるだろうかと思つた。

第1-3話「大人の事情」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

やつー俺、上木純太だよ！

焼野原 九乃助のマネージャーだぜ！

今まで、悪性の痔で入院してたので、フリーナインの事務所には居られなかつたけど、今日はやつと、13話にして戻つて来れたぜーーー！

元気にしてるかな。。レビンちゃん。。。

着やせしてて、胸もあつて（省略させていただきます）

あー、元気にしてるかなー。

廃墟の事務所も懐かしいぜ。。。

ん、ドアに張り紙が。。。

『引越ししました』

えつ。。。

そのことを、純太は知らなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は、線路沿いの誰も住まなさそうな和式のアパートだった。
部屋は広かつたが、ボロかつた。

洗面所はあっても、風呂場がなかつた。
しかも、電車がうるさい。

そこに、焼野原といつ苗字の部屋があつた。

その部屋の隣に、レビンが住んでる部屋があつた。

これは、現在のフリーナイン事務所であつた。

黒服のレビンの追つ手を配慮して、いきなりだが住所を変えた。
もうひとつのは理由は、エアコンが来ても部屋が暑かつたからである
が……。

ついでに、看板の住所の公表もしなくなつた。
電話だけで受け付けるようになつっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「早く言えや・・・、焼野原あ・・・。てめのせいで、入院したんだぞ・
・、おい・・・」

「おんめえ、マネジヤで年下の癖に偉そうなんや、こりあ・・・」
「いつまでも、ガンダム見てんじゃねえぞ・・・、焼野原あ・・・」
「関係なやろ・・・、われえ・・・」

と、必死でアパート見つけた純太が、鬼気迫る顔で九乃助に睨み付けていた。

というか、アパートの前でメンチの切り合いだつた。
メンチの切り合いは、3時間かかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

純太は、レビンの部屋のドアを叩いた。
駆け足が聞こえて、ドアが開いた。

「はーい」

「お久しぶりー」

と、純太が挨拶をした。

レビンは、ポーカーンとしていた。

「元気にしてたー」

と、純太が笑顔で話しかけてきた。
それでも、ポーカーンとしていた。

「えっと・・・はい・・・」

堅い笑顔で、レビンは応答した。
実は言うと、純太の存在を忘れていた。
だけど、あんた誰？というのが、相手に悪くて適当に答えた。
しかも、純太は自分より年下に見えたので、その馴れ馴れしい態度
が鼻についた。

「じゃあ、お邪魔しますーーー！」

「はあ！」

勝手に、純太がレビンの部屋に入ってきた。

その行動は、純太の存在を忘了レビンにとっては通報レベルの行
動だった。

「ちょっとーー！」

止めに入つても、純太はもう部屋の中。
しかも、部屋が引っ越したばかりだったので散らかっていた。
純太は、部屋に散らばっている下着を見て興奮していた。

「勝手に部屋に入るなんて・・・、痴漢だ・・・」

レビンは、携帯を握った。

・・5分後・・

ピーポー、ピーポー

パトカーの音が、アパートから聞こえた。

そして、アパートの周りには野次馬がいっぱいだった。

純太の手に手錠が掛かっていた。

警官の前で、九乃助とレビンが50回くらい頭を上げ下げしていた。

「すいませんでした！！すいませんでした！！」

「すいませんでした！！私の勘違いでした！！」

レビンに存在を忘れられ、痴漢と勘違いされ、通報され手錠をかけられた純太は、今にでも泣きそつだつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第14話「君が辿り着ける時まで（前編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夜景が綺麗な超高層ビルの上階。

そこは、ビップルームといつ言葉では足りないくらいの豪華さであった。

市民プールより大きなプールがビルの頂上にあり、個室には多くの美女がいた。

その個室で、受話器を握る中年男性が部下と話していた。

「フリーナインとかいう、チンピラの事務所は引っ越していました。」

「なんだと・・」

「どうしましょう・・」

以前、レビンの捕獲を支持した中年の中年が、高いビルの窓から夜景を眺めながらいた。

電話を握る手は強かつた。

「そんな弱々しい部下の声が、受話器から聞こえた。
中年の男は、情けなく感じて仕方なかつた。

「・・・私が、以前、頼んだ私立探偵の篤元豪はどうした
「奴は、まったく動いていません・・
「動かせ！・！」

中年男性は、煮え切らない部下の態度に激怒して電話を切つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私立探偵、篤元 豪（19）の趣味は、アニメ鑑賞であった。
部屋には、アニメDVDと、フィギュア、ゲームソフトで一杯だつた。

申しわけない程度に、部屋には筋トレ器具があつた。
そして、本日も彼はアニメを見ようとしていた。

HDDで録画してあるのに、彼はリアルタイムで見るのであつた。

「よしー。」

M1：30に彼はリモコンを握つた。

その瞬間に携帯が鳴つた。

だが、無視してアニメを観賞した。

アニメが終わる30分間、ずっと携帯が鳴つていた。

・・30分後・・

やつと、豪は電話に出た。

電話は、非通知だつた。

アニメ見てる時間、ずっと雑音のよつてたので機嫌悪
そうに電話に出た。

「おい・・、篤元・・」

「あつーー。」

その声に、豪は背筋を立てた。

声の主は、以前、豪にレビンの捕獲を依頼した者、つまり、あの追

つ手の黒服の軍団からだつた。

近頃、レビン捕獲の依頼をしなかつたので、それを示唆する電話だつた

100万円もの大金を前払いされたので、豪は逆らえなかつた。そなことで、本日、豪はレビン捕獲することになつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その豪の電話があつた日の夕方。

いきなりだが、九乃助は市街の路地裏で、例の黒服に見つかつた。そして、九乃助は黒服に追いかけられていた。

黒服たちは、大人数で九乃助を捕獲しようとしていた。

九乃助を捕獲すれば、レビンの居所が解るからである。

しかも、自分たちの上司の怒りのピークが近かつたために必死だつた。

路地裏の廃墟に、九乃助を追い詰めた。

「観念するんだな・・・、焼野原・・・」

と、黒服の一人が廃墟の壁に背を付ける九乃助に迫つた。

九乃助の方は、タバコを咥えていた。

随分と、大人数を前にしては余裕の姿であつた。

「その人数だけで、この俺を相手にするつてことに観念するわ

と言つて、タバコを地面に落として火を踏み消した。

その瞬間に、黒服の大人数が迫つてきた。

九乃助は、迫ってきた黒服の一人の顔面に拳を入れた。

そして、1秒もしないうちに、次の黒服の腹に膝を入れ、その隣にいた者には裏拳を撃ち込めた。

たつた一人に、次々と黒服は倒れて行つた。

九乃助の方は、一呼吸のうちに、自分の体の一部を武器にして相手を地面に倒しつけた。

・・・・・・・・・・・・・・

10分もしないうちに、黒服全員が地面に倒れていた。

人数は明らかに多かつたが、九乃助は大した怪我もしないでいた。

「ペツ！」

口の中が途中で黒服に殴られたせいか、切れていた。
その血を、九乃助は吐いた。

「・・！」

急に、気配を感じた。

廃墟のビルの入り口から、足音が聞こえてきた。

その足音が、徐々に近づいてきた。

「へえ・・、さすが「関東圏の悪夢」さんだ・・」

その声が聞こえた。

近づいてくる足音が消えた時に、入り口に、篠元豪の姿が見えた。

九乃助は、豪を目視した。

豪の姿は、上半身裸のボクサーパンツで、手にはテープリングが施されていた。

見て解るほど、彼は本氣であった。

「何しに来た・・・」

「見て解るだろ・・・。こないだの仕返しだ・・・」

と、豪はメンチを切つた。

「こないだって、電車内（第8話）でのことか？」

「それは忘れろ・・・」

あまり触れて欲しくない過去だった。
だんだん、豪は距離を詰めて來た。

「俺と戦え・・・」

豪は、そう言つた。

目的は、もちろんレビンの捕獲と、自分が駅裏で、九乃助に圧倒されたことへの復讐であつた。

だから、今日は本気の姿であつた。

高校で、ボクシング部であつたが、全国大会の前で先輩と殴り合いの喧嘩を起こしてしまい退学された豪。

そんな彼は、そのことを晴らそと揉め事を暴力で解決させる仕事を始めた。

だが、九乃助だけが、自分に汚点をつけたのであった。
その汚点を晴らすのが、今だつた。

そして、彼は、今、九乃助に拳が届く距離まで間合いを詰めた。

九乃助は、無言で豪を睨みつけた。

「しゃつ！－」

豪の口から、息が吐き出された。
その瞬間、豪の左拳が飛んできた。

「……！（速い！）」

九乃助は、驚いたが、顔に来る左拳を首を右に傾けて避けた。
だが、今度は右拳が飛んできた。
その速さに、九乃助は対応が遅れた。

バゴッ！！

豪の拳が、九乃助の右頬に入った。

「ぶつ！」

九乃助は、その威力で口から血を吹いた。
しかも、体が拳の方向に傾いた。
その隙を突いて、豪は膝を九乃助の腹に入れた。

「ぐつ！」

もの凄い低い声が、喉から出た。
豪は、その音を聞いて微笑んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第15話「君が辿り着ける時まで（後編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バゴッ！！

豪の拳が、九乃助の右頬に入った。

「ぶつ！」

九乃助は、その威力で口から血を吹いた。
しかも、体が拳の方向に傾いた。

これで、調子付いた豪は、自分のリズムに乗つて拳を打ち込み始めた。

この勢いを持続させるように、拳を何回も、何回も九乃助の顔に打ち込んだ。

そして、こう思った。

いつもの必勝パターンだ。

この調子で、いつも相手をボコボコにしてきた。

九乃助は、反撃すらしなかつた。

豪は夢中になって、九乃助の顔を叩いた。

彼の頭の中には、原型が無くなっている九乃助の顔が見えた。

だが・・。

「・・・！」

豪は、不自然な感覚が拳の神経に走った。

その不愉快さに、拳を止めた。

拳を止めると、九乃助の顔が見えた。

九乃助の顔は、口と鼻から血が出ていただけだった。

顔はボコボコになど、なつていなかつた。

そのことに、豪はショックを受けた。

そして、体中に悪寒が走つた。

「ペッ！」

九乃助は、口から血を地面に飛ばした。

「拳が、俺の顔に当たった瞬間に・・・、顔をお前の拳の方向に合わせて動かしたら、衝撃が逃げるかなーと思ってやつて見たら、2, 3発当たつたけど成功した」

と、九乃助は言った。

それを聞いて、豪はショックを受けた。

拳が当たつたと思っていたのに、ギリギリで避けられていた事に、駅裏のこと以上にショックを受けた。

更には、当たつた分の拳が、まるで九乃助に効いていなかつた。

「結構、田を凝らせば、お前の拳なんか見えんだよ」

と、釘を刺された。

豪は、拳を怒りに任せて握つた。

血管が、多く浮き上がつてきた。

「つまおおおおおおー——————！」

その力を込めた右の拳を前に突き出した。

「ボン！－」という音がした。

拳が、九乃助の顔に向かつて行った。

だが・・。

「ぐお！－」

豪は自分の拳が届く前に、腹を蹴られた。
そして、勢いで後ろに吹っ飛んだ。

思いつきり、尻餅をついた。

「ぐつ・・・」

両腕で、上半身を立ち上げた。

蹴られた腹が痛んでいた。

それを、九乃助は眼光を鋭くして見ていた。

「お前さ・・・、車にぶつこまれたことがあるか？」

と、九乃助が聞いた。

豪は、やっと立ち上がった。

勢いに任せて拳を動かした疲労もあって、息を切らしていた。

「あれさ・・・、死ぬほど痛いんだぜ」

そう言いながら、九乃助は立ち上がった豪の前に足を進めた。

豪に迫つてくる九乃助の眼光は、まさに「悪夢」で見るような鋭さの眼光であった。

「・・・」

その眼光に、思わず恐怖した。

今までにない恐怖だつた。

探せば、どこにでもいるやサ男の兄ちゃんの眼光だけで、立ち上がつたはずの足が震えていた。

自然と、涙が恐怖で滲んでいた。

だが、その恐怖のあまり、豪は、また拳を力に任せて握つた。血管が、多く浮き上がってきた。

「うおおおおおおー————！」

右の拳を前に突き出した。

また、ブォン！—という音がした。

拳が、九乃助の顔に向かつて行つた。

しかし、拳が当たる前に九乃助の左の拳が、同じように豪の頸に迫つていた。

ガゴッ！！

豪の頸が、左に揺れた。

その瞬間、豪の意識は消えた。

意識が消える前に、自分の拳が九乃助の右の頸をかすつた感触が合つた。

その頸は、刃のようすに切り傷が出来ていた。豪は、かすつた感触を感じたまま倒れた。

「…………」

豪の目が開いた。

見えるのは、天井だけだった。

気づくと、自分の体は仰向けになっていた。
鼻には、タバコの匂いが来た。

タバコの匂いの方に、顔を向けた。

「ブハー」

九乃助が、廃墟の壁に背を付けて、タバコを吸っていた。
その姿を見て、豪は敗北を受け止めた。

悔しくて、涙が出ていた。

よく考えれば、自分は2発だけでダウンしていた。

完全に圧倒されていた。

しかし・・。

「お前さ・・、車にぶつこまれたことあるか?あれさ・・、死ぬほど痛いんだぜ」

という言葉を聞いて、自分の敗北にも納得していた。
本当に、車にぶつこまれたんだと解った。

そんな死にかけた奴に、勝てる訳があるのかと思つた。

焼野原 九乃助は自分の思つた以上だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらくして、豪と九乃助は一緒に廃墟から出た。
互いに無言だつた。

見た目は、明らかに九乃助の方がボロボロだった。
それでも、負けたのは豪である。

「飯食い行くか？」

九乃助が、そう口を開いた。

「あんたの奢りか？」

「てめーで払え」

「あんた、年上だろ？」

「はあ？」

二人は、仲良くなかった。

なのに、さつきまで殴り合つてたとは思えないくらいに打ち解けていた。

ボロボロの姿のまま、二人は街中を歩いた。

別に、九乃助は、あの喧嘩をなにも思っていなかつた。

ただ、腹が減つたと思つていただけだつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高層ビルの上階のビッグブルームの中年の男の元に、豪に支払つたはずの100万円が綺麗に返されていた。

そこには、置手紙もあつた。

『依頼はお断わりします。PS、女の子の拉致つて嫌だし。 b y

篤元豪』

男は、この手紙に火をつけた。

この行為は、豪に裏切られたとのことであつた。

「焼野原 九乃助め・・」

呪う様な声を吐いた。
手紙は、灰皿に置いた。
チリチリと灰が舞つてた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

真つ暗な午後8時。

アパートのドアの前に、九乃助は一人、ヨレヨレで帰つた。
殴られた顔は、今頃になつて痛み始めた。

「あつーどうしたんですか！？！」

そう言つて、レビンが部屋から出てきた。
九乃助の顔に痣があるのを見て、心配して出てきたのであつた。

「大丈夫ですか・・・？」

と、言つて顔の痣に触つた。
当然、痛かつた。

「いたつー！」

「あつーごめんなさいー！」

わざとなのか、天然なのか解らない少女だつた。
だけど、本当に心配してるのは伝わつていた。

「えーと、傷薬あつたつけ・・」

と、急いでレビンは自分の部屋に戻った。

ドタバタと足音を立てていた。

ガタガタと物が落ちる音がした。

たぶん、棚に置かれてた物を雪崩落としさせたのだろう。。。

「・・・」

しばらくして、息を切らしてレビンは傷薬を持って出てきた。その姿を見て、九乃助は無意識に笑っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第16話 「義兄弟の契り」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

九乃助は、依頼でとある豪邸の外の草むしりをしていた。
その豪邸の面積は広く、その庭も広かつた。

日差しが暑い中、九乃助は腰を痛めながら草むしりを終えた。

「(ノ)苦労様です」

と、豪邸の主が庭に来た。

九乃助は、日焼けした肌が痛くて仕方なかつた。
そして、主から依頼料を受け取つた。

「じゃあ、帰りますんで・・・」

「あっ、ちょっと待つて」

豪邸の主が、帰り足を止めた。

すると、執事らしき男が発泡スチロールの箱を持ってきた。

「これも受け取つてくださいな」

と、発泡スチロールを受け取つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

帰宅後、現在の事務所のアパートの九乃助の部屋に、純太とレビン、
旧友の武田、豪がいた。

発泡スチロールの中には、たくさんの蟹が入つてた。
テーブルの上に置かれてるのは、最高級のタラバガニであった。
それを見て、彼らは驚いた。

「うほっ！！」

「美味しそうー」

「これは、いい酒のつまみだな」

純太、レビン、武田は喜んでいた。

「これも、俺の仕事つぱりのおかげよ・・・」

と、九乃助は微笑んだ。

ちなみに、呼んでもいない武田がいるのが気になつた。

純太、レビンも思つた。

武田は、もう勝手にビールの缶を開けていた。

うわあ、しばらく、こいつ作中に出るなど3人は思つた。

豪の方は、不自然なく部屋にいた。

彼は、九乃助に呼ばれてきた。

レビンの方も来ていいと言つたので、来たのであつた。
ここに居ていいのかと思いつつ、彼は居た。

「どうぞ」

「あっ・・・どうせ」

と、豪はレビンからビールの缶を受け取つた。

こないだまで、捕獲しようと思っていた女の子が近くに居るのだから、少し複雑な気持ちであつた。

だが、それ以上に写真で見るより可愛かつたので、視線がいろいろな方向に指していた。

「よし、今日は飲むぞ！…」

と、武田が叫んだ。

セツヒテ、武田はさり気なくレビンのコップにビールを注いだ。

「あつ、私、未成年なんで」

と言つて、レビンは自分のコップを退けた。

「いいよ、大丈夫だよー。」「よい子のみなさんは、真似しないで下さい」と書いておけば、大丈夫だよー」「なに言つてるんですか・・」

よい子のみなさんは、真似しないで下さい。お酒は二十歳から。一応、書いておいた。

そして、武田の席の隣は、右はレビン、左は純太であつた。武田は、ツンツン！と左の純太の足を突付いた。

純太は、突付かれた足元を見ると、メモの切れ端が置かれてあつた。メモを足元で開いた。

そこには・・。

『レビンちゃんを酔わせるぞ・・。手伝ってくれ・・』

と書かれてあつた。

純太は、武田の耳元に顔を近づけた。

九乃助、豪、レビンはもうカニを食べていた。

「（武田さん・・、酔わすつて・・）」

「（決まってるだろ・・・）」

と、二人でボソボソ話をし始めた。

「（まさか、あんた・・・）」

「（手伝ってくれるな？上木 純太君・・・）」

「（もちろんです・・・入院生活と、しばらくの出番なし具合で・・・
、ストレス溜まつてたんで・・・）」

ここに、義兄弟の契りが結ばれた。

一人の欲望丸出しの作戦が、密かに実行されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

レビンは、コップに注がれたビールを少しだけ口に含んだ。
そして、苦い顔をした。

「駄目だ・・・飲めないです・・・」

「無理して、飲まなくてもいいぞ」

と、カニをくわえながら九乃助が言った。
これを聞いた純太は、焦った。

そして、また耳元でのボソボソ話が始まった。

「（やばいっすよー武田さん！ー）」

だが、武田は冷静だった。
目も落ち着いていた。

「（まあ、見ておれ・・・）」

と言つて、武田はテーブルの上に、ジュークボックスに近い味付けのチュウハイを出した。

そして、チュウハイをレビンの前に置いた。

「レビンちゃん、これは飲みやすいよー」

「はあ・・・」

と、チュウハイを受け取つた。

それを見て、武田、純太は微笑を浮かべていた。

「レビン、酒飲めねーって言つてるだろ？が。無理に飲ませんなや」

と、両手にカーニの足を持つた九乃助が釘を刺した。

余計なこと言いやがつて！…と、武田と純太は顔に青筋を立てた。そう言われたレビンは、チュウハイを置いた。

これを見て、武田、純太はテレパシーに近い状態でコンタクトを取つた。

「（あの九乃助のやるう！…）」

「（武田さん、どうします！…）」

「（畜生、ピンチだ！…）」

と、思つてたその時。

「別に、チュウハイなら飲みやすいし、キツくないから大丈夫じゃないですか？」

まるで、フォローを入れるように豪が言つた。

九乃助は、力一の甲羅を啜っていた。

「合わなかつたら、飲まなきやいいでしょう」

「そつか・・」

九乃助は、飲ませないという意見を丸めた。
レビンも、そう言われて、チュウハイを一口だけ口に含んだ。

「あつ、美味しいです」

と言つて、一口田も口に入れた。
どひやら、口に合つたみたいであつた。

「（なんとー）」

「（武田さん！..やりましたよー）」

「（まるで、一流、セリAの選手のよつなフオロードーだー！..）」

それを見た武田、純太は、あまりのナイス・フオローブりに、豪に感謝した。

純太の隣は、豪だったので耳元に声を掛けた。

「（すまない・・）」

彼の方も、ボソボソ声で返事を返した。

「（気にするな・..。俺も、あなた方と同じ考え方だ・..）」

なんと、豪も同じ考え方を持っていた。

それを聞いた武田と純太は、心強い味方を得たと喜んだ。
こうして、3人は義兄弟の契りを再び、交わした。

豪というアキバ趣味の男を味方につけて。

こうして、3人は、どんどんチュウハイをレビンに進めた。
九乃助の方は、カニに夢中になつていた。

レビンは、あまり酒に馴れてなかつたせいで、チュウハイ一缶で赤くなつてきた。

これを見て、3人はあまりの計画の順調さに喜んだ。

力万頭の方は、力二の甲羅は日本酒をノリで食んだせいで酔し演じて眠り込んでいた。

まさしく、この3人には、今までに類を見ない完璧な状況であつた。

「うへ」

とうとうレビンは、赤くなつて眠り込んだ。置の床に、横になつてしまつた。

「（…）たお（…）」

武田と、純太は心の中で踊り狂つて喜んでいた。

起こさないようにするために、小声で一人は喜びを分かち合つた。

味だつた。

それをよそに、武田と純太は盛り上がった。

「（武田さん……）」
「（なんだね……、純太君）」
「（）これからを、なにを……）」
「（道徳と、）の作品は非R指定上のために、触るだけで終わる（）」
「（きやー、武田さん、ストレートすわーーー）」
「（ん・・ー）」

武田は、豪のテーショーンの底面に『』をいた。

「（えうした、篤元殿……）」
「（あのせ……、なんか、空じゃないですか……）」
「……」
「……」

それを聞いた瞬間、二人は黙り込んだ。
これは、いや欲しい物を買おうとした時に、本当に買つていいのか
な……？と思いつ心理である。
基本的に小心者の豪には、こんなことしていいのか？とこの現実へ
の帰還が起きて来た。
その態度に、武田は切れた。

「馬鹿ヤロウ………」
「ひつ……」

大声で、武田は叫んだ。

そして、一人の田の前に、急に立ち上がりて演説を始めた。

「（）まで来て、なにを弱気になつてるんだーーー」
「いやだつて……」

その気迫に、豪は足が震えた。

更には、純太まで素に戻り始めていた。

「貴様ら！！それでも、日本人か！！俺は一人でも揉むからな！！！いいな！！」

いつの間にか、触るから、揉むに変わっていた。

もう田が据わっていた。

しかし、武田ほんでもない誤算をした。

「なにを、揉むつて・・?

「それは、決まってるだろ……おつ・・・、つ・・・!?

高校時代から、聞き慣れた声が背中の方から聞こえた。その声は、純太でも、豪でも、レビンでもない。

ざ
わ

武田の背中に、今までにない悪寒が走った。

さつきの大聲が、酔いつぶれていた主人公・九乃助の目が覚めさせたのだった。

見る見る血の気が引いていた。

バゴッ！！

「――」

まるで、なにかが凹む鈍い音がしてから、市内に響くほどいの武田の絶叫が聞こえた。

その絶叫が気にならずに、レビンは、すやすやと眠り込んでいた。彼女が眠っている部屋は、地獄絵図と化していた。だけど、それに気づかずに眠っていた。

その寝顔は、汚れを知らない無邪氣な寝顔だった。

・・・・・・・・・・・・・・

第17話「銀色の夢、紡ぐ繩の調べ（前編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おー、姉ちゃんーー。」

ここは、フリーナイン事務所のある都心近くの県の某市内。深夜には治安が悪くなることで有名であった。

不良などの高校生やチンピラがうろついていて危険であった。今日も、午前12時頃に、街中の不良が街中を牛耳っていた。この不良の3人のターゲットになったのは、夏らしいミニスカートと、長めのコートを着た綺麗な金髪の長髪を後ろに二つ編みにしてる綺麗な少女であった。

化粧のこなモデルのよう、ビニカ、気品の高さと美しさだった。

「おー、ちょっと遊ばないか・・
「へへ・・」

欲望だけの彼らは、道を歩く彼女を建物の壁際に近づけた。だが、その彼女の目は怯えるどころか、据わっていた。

そして、どこか冷たかった。

そして、彼女はコートの内ポケットに手をやった。

「おい、警察でも呼ぶつか?
「無駄だぜ」

彼女の行動を見て、不良がそう言った。
携帯を取るように見えたらしい。

彼らは、だんだんと彼女に近づいて行った。

その時。

「ぐはっ！！」

不良の一人が、激痛の声を上げた。

その声を聞いて、他の二人が後ろを振り返った。
声を上げた不良は、前かがみに倒れていた。

「なにやつてんだ、ガキが」

振り返った先には、九乃助が居た。

不良一人は、仲間をやられたので殴りかかってきた。
九乃助は、両腕をポケットから出した。

「おらーーー！」

九乃助の拳が前に出て、一人を吹っ飛ばした。
そして、その隣にいた者には裏拳を撃ち込めた。
一気に、3人の不良は倒れた。

「・・・」

その鮮やかな屠り方を見ても、被害者の彼女は眉ひとつ動かさなかつた。
まったく持つて、リアクションを取らなかつた。

「大丈夫か・・」

女性が苦手な九乃助だが、声をかけた。

だが、まったく声を出さなかつたし、額きもしなかつた。

「……危険だからな、さっさと帰りな……」

そう言つて、九乃助は去つた。

「……」

彼女は九乃助が去つた後、コートに再び、手をやつた。コートの内ポケットから、写真を一枚取り出した。その写真には、九乃助の顔写真が出てきた。

「焼野原 九乃助……フリーナイン代表……別名「関東圏の悪夢」……噂通りの喧嘩っぷり……」

そして、その写真を切り裂いて手から離した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここは、高速道の橋の下。

夜なだけあつて、車のマフラー音が響いていた。

そんな場所の近くを、九乃助は歩いていた。

ここは、アパートの帰り道には入らないのだが歩いていた。

「……」

そして、さつきから、後ろに違和感を感じていた。ムズムズすると言つか、なんと言つか。

「おい、じら・・、俺のストーカーか・・

と言つて、九乃助は歩を止めた。

だが、辺りはマフラーの音しか聞こえない。
そして、九乃助は振り返った。

「！！」

グサツ！！

九乃助が振り返った瞬間、飛んできた何かを手を開いて止めた。
だが、その飛んでくる何かはナイフであった。
それが、手のひらに突き刺さつた。

「ぐつ！！」

予想だにしないナイフで、九乃助は動搖した。
手からは、血が出てきた。

「なんの真似だ！－！じら－！」

ナイフが、飛んできた方向に向かつて叫んだ。
すると、そこから足音が聞こえてきた。

さつきから、背中に感じていた感覚が近づいてくるのが解つた。

「・・・！」

橋の影から出てきたのは、さつきのコートを着た少女であった。
手には、小さなナイフを持っていた。
ナイフを投げたのは、彼女であった。

そして、彼女の目は、また据わっていた。

「おめー、映画か、漫画の見すぎでねえーかー！」

九乃助は、彼女に向かつて叫んだ。
すると、彼女は少し反応した。

「レビン・ハチコの捕獲で雇われた・・・
はあ！..」

いきなり、そんなことを彼女は言い始めた。

篤元豪と同じように、彼女もあの黒服の集団に雇われていると見た。

「フリーナイン、焼野原 九乃助が邪魔だから殺さない程度に居場所を吐かせろと言われた・・・
「また、レビンの捕獲かい・・・しかも、本格的にヤバイ女だな・・・
」

今まで、武器を使って來るのはいなかつたので、向こうも本気になつてきたと思つた。

「居場所を言え・・・」

そう言つて、彼女はナイフをまた構えた。
ナイフを向けられた九乃助の目は冷静だつた。
そして、手からナイフを抜いた。
ナイフが小さいのと、刺さつたのが中指と人差し指の付け根の間だつたので、大したことは無かつた。

「その前に、名を名乗れ。無礼だぞ・・・」

と言いながら、刺さったナイフを地面に落とした。

「私は、依頼者と親交のある「信代会」の…」「！」

「信代会」と単語を聞いて、九乃助は背筋に冷たいものを感じた。急に、体中に電気が走った。

「キエラ・カトリだ・・・

と自己紹介をした彼女は、ナイフをまた投げてきた。

「信代会」という単語を聞いて驚いてたが、九乃助は体を横に倒して、飛んできたナイフを避けた。ナイフは、橋の柱にぶつかつた。

「信代会だと・・・

その言葉に、九乃助は驚ききっていた。

キエラのコートの裏側には、小型のナイフが多く収納されていた。そして、そのコートからナイフを抜き取つて投げつけてきた。これを見て、九乃助は、また飛んできたナイフを飛び込み前転するよにかわして行つた。

「だから、映画や漫画の見過ぎだって！（ジョジョのディオみてーに、ナイフ投げやがって！）

彼女のコートを見て、そう言った。

とりあえず、彼女のナイフが尽くるまで避けるしかないと思つた。

……………

夜景が綺麗な超高層ビルの上階。そこは、ビップルームといふ言葉では足りないくらいの豪華さであった。

その個室で、受話器を握る中年男性が部下と話していた。

「「信代会」の協力を得ました・・・」

受話器から、そう聞こえた。

「そりか・・・、あのヤクザ組の代表には借りを作つてやつたしな・・・」

それを聞いた男性は、ワイングラスを揺らした。
うれしそうに、ワインを口に運んだ。

「キエラとかいう小娘が、焼野原に接近しているそりです」

受話器から、また声がした。

「ほつ・・・、確か、あの組の代表、香取の娘ではないか・・・」

それを聞いた男は、さらに笑みを浮かべた。
だが、もうひとつ不安があつた。
九乃助は喋られない位、痛めつけられていないかと・・・。

……………

「馬鹿か！－てめー－！」

キエラとかいうヤクザの娘は、まだ九乃助にナイフを投げつけていた。

それを、九乃助は避け続けていた。
大きく九乃助は、後ろに飛んだ。
だが、その時。

サツ－！

「なつ－！」

飛んできたナイフが浅くだが、右足のふくらはぎを切った。
それによって、九乃助はバランスを失った。

シユツ－！！

バランスが崩れた瞬間に、ナイフが飛んできた。

「つまつ－」

体制が崩れたせいで、ナイフは、九乃助の顔面に接近してきた。
避けられそうになかった。

「ぐつ－」

ナイフは、九乃助の顔面に届いた。
そして、九乃助は倒れた。

ナイフが顔面に突き刺さつたらしい。

「一。」

それに、彼女は少し動搖した。

ナイフを投げた本人だが、そこまでやるのは想定外だつたようだ。

だが、九乃助の顔にはナイフが・・。

「しまつた・・」

そして、キエラは倒れた九乃助の方に向かつた。
だが・・。

「あふねーにや、てめーー」

「なつ！！」

なにやら、気の抜けた声が聞こえた。
そして、九乃助は上体を両腕で起こした。

顔面に刺さつたと思ったナイフは、九乃助が歯で噛まれていた。
飛んできた瞬間、口を開けて、歯でナイフを止めていた。
ナイフの勢いは、わざと倒れて、勢いを封じたのだった。
そして、ナイフを手で取った。

「バカな・・。歯で止めるなんて・・」

これには、彼女は大きく動搖した。

「動搖するくらいなら、ナイフなんぞ投げてんじゃねえ！－！ガキ
が！－！」

そう一喝して、九乃助は立ち上がった。

口から取ったナイフは、右手に握られていた。

そして、親指で、手品のスプーンのように円弧に曲げられていた。

キエラという少女は、動搖しはじめた。

・・・・・

• •

九乃助は立ち上がった。
口から取つたナイフは、右手に握られていた。

そして、親指で、手品のスプーンのように田弧に曲がっていた。

時間は、真っ暗なAM1時。

レビンは九乃助の部屋の電気を点けた。

—
Z
Z
Z
•
•
—

九乃助は、部屋にはいなかつた。なのに、いびきが聞こえるのは、武田が勝手に上がり込んでいたからであつた。

部屋は、ものすごくアルコール臭い。

最近、この二人は仲が良かつた。

我が物顔で眠つてゐる武田は、以前のセクハラまがいの行動といふ、レビンには印象が最悪だつた。

「はあ・・・

レビンは一人に毛布をかけた。

そして、自分の部屋に入つていった。

「九乃助さん、遅いな・・・」

と、時計を見つめて言つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ワン！ワン！

どこからか、犬の鳴き声がしていた。
だが、泣き声よりもマフラー音の響く橋の下では、九乃助が追い詰めていた。

「何百本・・・投げつけたつて無駄無駄・・・

キエラは、少し焦り始めた。

もうかなりナイフは投げ付けていた。

シユツ！！

またナイフが飛んできた。

九乃助は、右の片手を突き出した。

人差し指と、親指で挟んで、飛んできたナイフをキャッチした。

そして、また、そのナイフを地面に捨てた。

「芸の無い女だな・・

と、九乃助は罵った。

この一言で、彼女はキレた。

「確かに・・、ナイフ投げは得意だけど・・

そう言って、彼女はコートを脱いだ。

コートを脱ぐと、タンクトップと細めの白い肌の両腕が見えた。
その白い肌の手が、ミニスカートのポケットに入った。

「（）のコートを・・、固形の火薬入り・・」

「・・」

ミニスカートのポケットからライターが出てきた。

九乃助は、血の気が引いた。

この後の彼女のやることがわかつっていた。

「馬鹿！・・」

そう言って、九乃助は橋の下の川原の元に全力疾走した。
無様だが、必死に走った。

「もう遅い！・・」

シユボツ！

コートに火がついた。

そして、九乃助の走った方向にコートを投げた。

コートに火が走り始めた。

7

全力疾走していた九乃助の足が止まつた。
橋の川原で、なにかを発見した。

「コートが、宙に浮いていた。

もう少しで、火薬に着火しそうであつた。

「なに？」

キエラは、九乃助が足を止めて、川原にあるなにかを拾つて抱えたのを見た。

彼女は、自分の後方に火薬の安全圏まで下がった。

火薬の量は大した量ではないが、力助の居る距離には無事で済むことない。

爆発寸前なのに、九乃助はなにかを抱えていた。
そして、また走り出しが遅かつた。

コードが九乃助の後方100m弱で、火薬に着火した。

バアアアアアアア――ン！――！――！

「ぐれつーーーー！」

とてつもない爆音と、爆風が吹いた。

火薬が爆発した

それによつて、九乃助は背中に爆風と爆風を受けた。爆破の衝撃で、九乃助はなにかを抱えたまま数10m吹っ飛んだ。

体が宙に浮いていた。

火炎が、九乃助の半袖のコートを燃やした。

「ぐつーーー。」

吹っ飛んだ後、わざと背中を擦るようにして着地して燃え移った炎を消した。

両腕には、なにかをまだ抱えていた。

「ぐおああああああーーー！」

九乃助は、激痛に耐えていた。

背中に受けた衝撃と、火傷は致命傷ではなかつたが、激痛だつた。

「・・・」

キエラは、その姿を見て、心境が不安定だつた。
上から言われたとおりに、死なない程度の目には合わせてやつた。
だが、九乃助の逃げる途中での物を拾うような行動が不可解だつた。
実は言ひうと、彼女はこのような命令を受けたのは初めてだつた。
加減が解らなかつたとはいへ、激痛に苦しむ九乃助を見て、罪悪感
が襲つてきた。

ナイフの時には、九乃助は苦しんでいなかつたが、今の様子には、
罪悪感が襲つてきた。

「なんでーーーなんで、逃げなかつたーーーなに、拾つたんだよー！
！川原でーーー！」

罪悪感を消そうとするため、彼女は叫び散らして、九乃助に近づいた。

九乃助は、激痛から少し落ち着いていた。
だが両腕には、まだなにかを抱えていた。

「・・・！」

仰向けて倒れる九乃助の両腕を見た。
その手は、黒いすすぐらけだった。
そして、その中には・・・。

「ワンワン！」

キエラは、尻餅をついた。

一気に力が抜けたのだった。

「痛つてーぞ・・・、コラア・・・隨分、でかい花火だな・・・」

九乃助は、そう言って両腕を開いた。
小さな子犬が、九乃助の懷にいた。
そして、子犬は無傷で走り回った。

九乃助は、コート爆弾から逃げる際に、この無責任な飼い主から捨てられた子犬を川原で見つけた。

爆発の及ぶ距離は解らなかつたが、この犬も巻き込まれると思って、
九乃助は懐に抱えていた。
そして、爆発から子犬を守つた。

「・・・」

キエラは、前かがみにへたれ込んだ。
すると、急に目から涙が出てきた。
もしも、あの時、この子犬を巻き込んだら・・・。
そう思うと、キエラという少女は、ずっと苦しんでいただろう。
ヤクザに育てられた彼女は、痛みなんか解らなかつた。

今までだつて、父から教わつたことを実行していただけだつた。
下手したら、血の悲惨さすら解らなかつたかもしれない。

「うう・・

彼女の目から、大粒の涙がこぼれていた。

「ワンワンー！」

それを、見た子犬はキエラの顔を舐めに行つた。
その子犬を、キエラは抱きしめた。

「・・」

九乃助は、立ち上がつた。
そして、ポケットからタバコを出した。
だが、消し炭になつていた。

「敵に説教する気はねえが、体の傷なんざ明日で直るわ。だが、治療と保険が効かないのは、くつだらねえ花火に巻き込まれる無関係な人間（この場合、犬だけど）の悲しみと、罪悪感だからな」

消し炭になつたタバコを捨てた。

キエラは、頬に涙を流しながら、九乃助の姿を見上げた。

涙を流しながら、何度も何度もキエラは謝つた。
敵であつたはずの九乃助に、何回も謝罪した。

子犬は、未だにキエラの両腕から離れないでいた。

「ごめん・・、なさい・・。本当に、ごめん・・な・・

「花火は、人と動物に向けるなよ・・・」

そう言って、九乃助は真っ暗な夜空を見上げた。
綺麗に星が見えていた。

「・・・」

だが、九乃助は、いつもなら振り向いて去る所だが去れなかつた。
さつきの爆破で、背中あたりの服が燃え、穴が開いていた。

それで、ズボンの尻にまで火が広がつたせいで、尻の部分が燃えて
しまつっていた。

パンツまで燃えてしまつた。

だから、振り向けない。

振り向いたら、自分の尻が・・。

「（畜生！－ファッキン・作者！－）」

心の中で、九乃助は泣いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第1-9話「銀色の夢、紡ぐ繭の調べ（後編）」

いつもマフラー音の響く橋の下では、今度はサイレンの音がしていた。

パトカーが、橋の下に5台くらい集まっていた。
集まった理由は、あの爆発があったからであった。
しかし、この場所には、九乃助とキエラはいなかつた。
ついでに、あの子犬も。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

九乃助は、アパートに戻った。
腰には、焦げたコートを巻いていた。
尻が見えないようだ。

「・・（あー、ケツが涼しいー）」

後ろには、キエラが子犬を抱えて歩いていた。
九乃助は、依頼が失敗した彼女は帰りにくいだらうと思ったから、
アパートに連れてきた。

ついて行くのを、キエラは最初は断つたが・・。

・・数分前・・

「任務の失敗につるさい」「信代会」のメンバーだろ・・。いいから、

ついて来いよ

と、九乃助はコートを腰に巻きながら行つた。
ゴルゴ13のように、後ろは見せないようになっていた。

「知ってるのか・・」

両腕に子犬を抱いたキエラが、そう言つた。

「知ってるも何も・・」

ここから、先のことは、九乃助はなにも言わなかつた。
というよりは、「信代会」という単語を聞くのも嫌な感じであつた。

そんな感じで、キエラはついて行くことにした。

どつちにしろ、彼女には「信代会」は似合わなくなると、九乃助は思つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

九乃助とキエラは、自分の部屋の前に着いた。
だが、武田のいびきが聞こえていた。

なんで勝手に入つてきてんだと、九乃助は怒つた。

たぶん、純太が入れたんだなと思った（九乃助と、純太は相部屋）
キエラは、このアパートに住ませるとして、その手続きは夜が明けてからにしようと思っていた。

なので、朝まで、（純太を外に出して）この部屋に彼女を居させようと思っていた。

こうなれば、武田も外に出すしかないなと思って、ドアノブを握つた。

「あつ、九乃助さん、おかえりなさい」「さあやーーー！」

レビンが、自分の部屋から出てきていた。
それに、九乃助は驚いた。

時間は、夜の2時であつたのに。

「なんで、こんな遅くに起きてんだーー！」

「昨日、借りたガンダム（あどがき）のビデオ見てました」

「昼間に見ろーーー寝ろーーー！」

と、九乃助は焦っていた。

キエラを見られたら、レビンに誤解されると思ったのであつた。
女性不信のはずなのに、部屋に女の子を連れ込んだと。
だが、キエラは九乃助のすぐ後ろにいた。

「どうしたんですか、汗まみれですよーーー！」

その様子のおかしさに、ツッコんだ。

「坊やだからさーーー！」

「えーーー！」

我ながら、変な返答を九乃助はした。

そんなやり取りの中、キエラは、レビンの方に顔を出した。

「ーーー！」

キエラの存在にレビンは、気づいた。

「誰だ、この女・・」

と、子犬を抱えたキエラは言った。
ちなみに、任務はレビンの捕獲だったが、レビンの顔は知らなかつた。

「・・」

キエラを見たレビンの顔は固まっていた。
九乃助の後ろに、綺麗な女の子が居たからだ。
当然、勘違いはする。
九乃助も固まつた。

「九乃助さん・・、その娘は、誰なんですか・・。まさか、九乃助さんのお恋人・・」

と、レビンはキエラに指をさした。
その指は震えていた。表情も。
必死に、自分を抑えていた。

九乃助も、誤解されないような言い訳を考えた。

「俺の・・」

いとこだよー、と言おうとした瞬間。

「私は、キエラだ」

勝手に、キエラは自己紹介を始めた。
結構、空気の読めない少女だった。

「そりそり、俺のいとこの妹ー」

と、九乃助はキエラの口を手で押さえた。
随分、無理のあるいい訳だつた。

なんで、いとこをこんな遅くに連れて来るんだと、ツッコまれても仕方なかつた。

九乃助は、このあとの言い訳を考えた。

「なんだー、そうですよねー」

レビンは、すんなり納得した。

肩透かしを喰らつた。

「あー、可愛いワンちゃんですねー！あたしは、レビンって言つてますー

「ああ・・・、よろしく（）の女が、捕獲しろと命令の対象か・・・」

と、キエラに近づいてきた。

九乃助は、レビンがアホで良かつたと、ほつとした。

キエラは、レビンの存在を黙認した。

随分、頭が軽い女だなーと思つていた。

「レビン悪いが、一晩、キエラを泊めてやつてくれ・・・

九乃助が、部屋には武田、純太が居るので、キエラをレビンの部屋に預けようとした。

「いいですよー、ちよつと待つててくださいー」

と言つて、レビンは部屋に戻つた。

それを見届けた九乃助は、キエラに声をかけた。

「いいか・・・ijiでは、俺のいとこで・・・」

「なんで、私の正体を言わない・・・」

「・・・」

キエラは、自分の正体を明かさない九乃助の配慮について聞いた。レビンを捕獲しようと命令されたヤクザのメンバーで、しかも、組の長の娘であることを。

それを言わなのは、少し、キエラの心が痛むことであった。レビンにとつては、自分を襲おつとした女と一緒にいると言つ事になる。

それを、聞いた九乃助は髪の毛をかいた。

「そんなこと言つたら、レビンも、お前も辛くなるだろ」

そう答えた。

「しかし、嘘つくなのか・・・」

と、彼女はうつむいて言つた。

子犬は、くうーんと鳴いていた。

「世の中には、嘘を通した方がいいことだつてあるんだよ」

「そうなのか・・・？」

「バレたつて、そん時はそん時だ」

と、九乃助は言つた。

それを聞いたキエラは、うつむいていた首を上げた。

「深く考えるな」

そう言って、九乃助は振り返った。

「じゃあ、おやすみ」

焦げたコードを背中に巻いた九乃助は、自分の部屋のドアノブを握った。

その後姿を、キエラは子犬を抱えて見つめていた。

さっきまで、ナイフを投げ付けていた相手とは思えなかつた。しかも、ここまで優しくしてくれなんてと、思つてもいなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キエラは、レビンの部屋に入った。

あと、子犬も。

そして、用意してくれた着替えに着替えていた。

キエラは、自分のすすで汚れたタンクトップを脱いだ。

キエラは肌が白くて綺麗でスタイルが良くて、レビンは苦笑いしていた。

子犬は、レビンの足元に居た。

「あんたさ・・」

と、着替え中のキエラは、レビンに話しかけた。

「はい」

「あの・・、（九乃助）兄さんと、どんな関係・・？」

「えつ……」

そう聞かれて、レビンは照れた。
顔が、一気に赤くなつた。

「いや、その・・・、九乃助さんは・・・、その・・・、恋人たちとか・・・、星の鼓動は愛とか・・・、そんなんじやないから・・・」

と、アタフタとレビンは答えた。

「別に、そんな意味じゃない・・・」
「ああ・・・、そうですか・・・」

釘を刺すよつたキエラの一言で、レビンは一気にヒートダウンした。
また、自分の痛さに苦しんだ。
この女、どこか変だと、キエラは着替えながら思つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キエラ、レビンの二人は、それぞれの布団に入つた。
布団に入つてから、レビンは自分がフリーナイン事務所に来てから
のことを語つていた。

純太のことも話には出てきたが、九乃助のことについての話が多かつた。

ちなみに、武田のことは話していない。

そして、九乃助のことを語つてゐときのレビンの表情は、どこか楽
しそうだつた。

九乃助のことについて、キエラは、あの爆発でのことで十分解つて
いた。

だが、それよりも、レビンが九乃助のことをどう想つてるかが伝わっていた。

「あれ・・・

レビンは、いつの間にか、キエラが眠っているのに気づいた。

「寝ちゃったか・・・

そう言って、レビンは、部屋の電気を消した。
キエラの布団には、あの子犬も一緒にいた。
すやすやと、安心しきった顔で眠りについていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いじから、いなくなれえええええ――――――――!

「ぐああああああああ――――――!」

「九乃助さん、やめてくれ――――!」

九乃助は、部屋で武田にキャメル・クラッチをしていた。
背骨が軋んでいた。

大事に取つていた高級なワインを武田が飲みきつていたので、殺意
を込めたキャメル・クラッチが発動した。

その絶叫は、市内に響いた。

涙ながらに、純太は叫んでも九乃助の怒りは消えなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第1-9話「銀色の夢、紡ぐ繭の贈へ贈（後編）」「後書き」

作中の会話に出てこないトーレ・アニメ「機動戦士ガンダム」のプライ
ト役、鈴置洋考さんが、8月10日未明にお亡くなりになりました。
この場を借りて、ご冥福をお祈りします。。。

第20話「人は一人では生きていけない（前編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

アパートに、キエラという苗字の部屋が出来ていた。
彼女は、九乃助らのいるアパートに引っ越しした。

「信代会」のメンバーから、所在を隠すためである。

「ワンワンー！」

午後の曇下がりに、キエラは子犬の散歩をしていた。
その光景が、九乃助の部屋の窓から見えた。

純太は、彼女が九乃助のいとこだと信じられなかつた。
もちろん、それは嘘であるが・・・。

「本当に、いとこなんすか？」

と扇風機の前にいる、タンクトップのジーンズでダレる九乃助に聞いた。

「そうだよ・・」

「嘘だ！..あんたみたいな遺伝子を、彼女からは感じられない！！」

それは、そうである。

「それより、依頼は？」

「ああ・・、そうでした」

純太は、依頼のメモを渡した。

九乃助は、尻をかきつつメモを受け取った。

「・・・『午後6時のカラオケ大会にて、審査員をお願いしたい。

by 居酒屋の店主』・・・」

と読みながら、横になりながら缶コーヒーをすすつた。
当然、ちょっととこぼれた。

この場所は、ちょうど、今は縁日中であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

このカラオケ大会とは・・・。

市内が縁日で行うメインイベントのひとつ。

このカラオケ大会は、市内が総力を上げて特選のカラオケスタジオを用意し、そこで、プロアマ関係なく自由参加で歌を歌つてもらうという企画。

大会と称してただけあって、審査員の評価によつて優勝者が決まる。そして、その優勝者は、この一年間S県でもつとも歌の上手い者として讃えられるのだ。

例年によると、出場者のレベルが上がっており、しかも、芸能界からのスカウトもあるなど、この大会での優勝はステータスとなつていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、午後の6時。

市内は、縁日だけあつて人が大賑わいしていた。

道路は歩行者天国となつており、出店などが多く並んでいた。
だが、中でも市内が総力を上げたカラオケスタジオには、出場者、観客で溢れ返つていた。

その審査員席に、九乃助と行きつけの居酒屋の店主と、ほか数名の審査員が居た。

ちなみに、主催者は、行きつけの居酒屋の店主であった。その店主から、九乃助は審査員役を頼まれたのであった。

「悪いね、九ちゃん」

と、マスターが隣の席の九乃助に話しかけた。

「いや、別に気にせんでいいよ・・・しかし、俺の審査は厳しいぜ・・・」

と、九乃助は微笑を浮かべた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやー、一人とも、よく似合つよー。」「本当ー?」「・・・」

とTシャツ、半ズボンでシルバーを身につけた純太が、キエラとレビンの着物姿を褒めていた。

レンタルで借りてきたのであつた。

この3人も、縁日の道路を歩いていた。

ちなみに、キエラの子犬はお留守番。

「でも、キエラちゃん、スタイルいいねー」

「そつ、そつかな・・・」

と、レビンはキエラに言った。

それには、ちょっととキエラは恥ずかしそうだった。

「いや、レビンちゃんもスタイルいいよ」

と、純太が話しに入ってきた。

「もー、純太君つたらー」

「そりや、キエラちゃんは体のラインが綺麗で、ウエストもいいし、でも、レビンちゃんはラインはともかく、その分、胸や尻で補つて・」

バゴッ！！

余計なことを言つた純太の顔に、レビンの鉄拳がめり込んだ。純太は地面に倒れた。

「さあ、カラオケ会場に行きましょう・・・」

「うつ・・・、うん・・・」

「あたしも、出場するんだから・・・」

レビンは、キエラの手を引いて会場に向かつた。
どうやら、彼女らも出場するのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、カラオケ大会はスタートした。

まさに、スタジオの観客席の興奮は、早くも最高潮であった。

今、スタジオには、今回の大会の司会を務めている男が立っていた。

「よつこやーー！みなさんーー！市内総出を上げての夏の祭典が始まりましたーー！」

彼のMCに合わせて、観客は盛り上がっていた。

「司会は、この私ー借金が返せないのに、こんな場所に居る阿部健七でお送りいたしますーー！」

と司会は、観客を盛り上げた。

そして、彼は審査員席に手を振った。

「彼らが審査員だーー！彼の耳を聴らせるのは、果たして誰だーー！」

と、審査員席の九乃助らにスポットが当たった。

そして、審査員が手を振ると、観客も盛り上がり上がっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

こうして、参加者のカラオケがスタートした。

と、スタジオに純太が出現した。

審査員席の九乃助は渋い顔をした。

「なんで、出てんだよーー！」

そう愚痴っていた。

スタジオでは、司会者が純太にマイクを向けた。

「自信のほどはーー！」

「今日の俺はーー！」

純太は、渋く声を出した。

「では、歌つてもらいましょうーー！」
「おいーー！」

喋りの途中で、司会はマイクを自分の向きに戻した。
カラオケのイントロが流れた。

そして、純太は歌い始めた。

別に面白くないので、歌つてる状況はカットさせてもいい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

純太は歌いつゝて、息を切らしていた。
でも、何故か、歌つた気がしなかつた。
司会者は、マイクを握った。

「審査員の評価は果たしてーー！」

と、審査員は歌の採点を手持ちの札に書かれた数字で評価する。
審査員は5人で、一人の持ち点が20点で合計100点が最高点であつた。

そうして、純太の歌に採点が下さつた。

審査員1

5点

感想：暗黒の世界へ戻れ。

審査員2

1点

感想：ここから、いなくなれ。

審査員3

1点

感想：遊びでやつてんじゃないんだよ。

店主

5点

感想：音程が酷い。

九乃助

0点

感想：ジゴクニ、オチロ。

合計：12点

その評価を見て、純太はキレた。

「なんだ！－てめーら！－この扱いはなんだ！－なんで、一人だけ、片言だ！－」

だが、彼は警備員につまみ出されていた。

それでも、納得できない彼は叫び続けていた。
どうやら、とても審査の目が厳しいと見られた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その状況を、観客席から見つめる男が居た。

その男は、篤元豪であった。

「甘いな・・・、純太・・・」

そう言って、微笑んでいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第21話「人は一人では生きていけない（後編）」

それから、15人くらいが歌つていたが、どれもパッとした者は居なかつた。

会場のテーションは下がつていた。

司会者が、またリストを持つて16人目を読み上げた。

「えーと、続いては・・・、恐怖のボクサー体型！－篤元豪－－－！」

と、スタジオに豪の姿が現れた。
それに九乃助は驚いた。

「あいつも出るのか・・・」

司会者が、豪にマイクを向けた。

「自信のほどは・・・」

「聞いて驚くなよ・・・」

ものすごい気迫を出して、司会の質問に答えた。

これには、観客も盛り上がった。

「あいつ本気だな・・・」

と、審査員席の九乃助は汗を流した。

そして、イントロが流れた。

「・・・」

イントロが流れた瞬間、観客のテーションは下がった。
豪の方は、ノリノリだった。

ちなみに、この曲は、深夜帯で放送してゐる萌え系のアニメの主題歌
であった。

審査員席の人々は、顔が凍りついていた。

観客は、誰一人として騒いでいなかつた。

豪は、本当に楽しそうに歌い始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

歌いきつた豪の顔は華やかだつた。
だが、観客は引いていた。

ドン引きだつた。

司会者は、マイクを握つた。

「審査員の評価は果たして・・・」

と、審査員は歌の採点を手持ちの札に書かれた数字で評価する。

審査員は5人で、一人の持ち点が20点で合計100点が最高点で
あつた。

そうして、豪の歌に採点が下さつた。

審査員1

0点

感想：ノーロメント

審査員2

0点

感想：ノー・コメント

審査員3

0点

感想：ノー・コメント

店主

0点

感想：ノー・モア・クライ

九乃助

-100点

感想：ノムラ・サチヨ

合計：-100点

その評価を見て、豪はキレた。

「なんだ！！てめーら！！一所懸命、歌つたらうが！！！」

豪は、警備員につまみ出されていた。

それでも、納得できない彼は叫び続けていた。

審査員の一人が、頭痛薬を飲んだ。

ちなみに史上初の -100点であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何十人が、歌つたが審査と盛り上がりは酷い物だった。

観客のテーションは、下がり切っていた。

ついには、審査員の内の3人が眠り込むという異例の事態が起きていた。

この驚愕の事態と、審査員の評価の厳しさに、出場者の半分が逃げ出していった。

ある者は、後に「あの厳しさは、原付大国・ベトナムをカブで縦断するに等しい」と言っていた。

例年にないカラオケ大会の審査の厳しさと、出場者の空回りぐらいであった。

「うわあ・・・」

この状況のため、レビンとキエラの「テュエット」での出場が早まり、二人の出番が近くなっていた。

しかも、観客のテーションと審査員の厳しさで、二人の緊張は凄かつた。

この状況を、控え場所になつているスタジオ裏で見ていた。これには、キエラは怯えていた。

「ねえ・・・」
「うん・・?」

キエラの弱々しい声が聞こえた。

「やめよ!・・・」

あまりの緊張から、キエラはそう呟いた。

それを聞いたレビンは、キエラの肩に手をやつた。

「大丈夫だよ・・・」

そうレビンは言った。

「審査員席にはさ、九乃助さんが居るのよ・・・」

「・・・」

キエラは、スタジオ裏から見える九乃助の顔を見た。レビンにそう言われたせいか、キエラの緊張は少し和らいだ気がする。

レビンは、九乃助が審査員で座っていても安心できる。そのくらいに、九乃助のことを想つていた。

「やめようなんて・・・、言わないで・・・」

レビンのその声は、気のせいか、震えていた。

「それに、やめるにしても・・・、もう出番だから逃げられないし・・・」

「えつ・・・」

「えつ・・・」

気づいたら、二人はもうスタジオに連れ出されていた。あのやり取り中に、スタッフが彼女らをスタジオまで引っ張つていた。

そのくらいに、出場者は減つていた。
結局、緊張ほぐすもなにも、出来なかつた。

司会者が、またリストを持つて数十人目を読み上げた。

「えーと、続いては・・・、まるで、ドタキャンで有名なタトゥーを思い起させれるレビン・ハチコと、キエラ・カトリー・・・・・」

「古川・・・」

と、まだ余裕のあるレビンはツッコんだ。
だが、キエラの緊張は続いていた。

司会者が、一人にマイクを向けた。

「自信のほどは・・・」

「九乃助さん！」

「・・・！」

と、レビンはマイクを持つて、九乃助の方向に向いた。

「頑張りますんで・・・、聞いてください・・・」

と、言った。

これを聞いたキエラは、急に緊張が消えた。
何故だか、解らなかつたが・・・。

「おひ・・・」

審査員席の九乃助は、静かに頷いた。
マイクは、また司会の方に戻つた。
レビンは、キエラの手を握つた。

「頑張るわー！」

「うんー！」

そう、レビンは小さく呟いた。
それには、キエラは頷いた。

そうして、イントロが流れた。

曲に合わせて、二人は歌い始めた。

緊張はしなくなっていた。

その一人の息の合い方と、澄んだ声で会場が盛り上がり始めた。いつの間には、とても楽しそうに一人は歌っていた。

観客も思わず、聞き入っていた。

九乃助も、二人が楽しそうなので微笑んで聞いていた。

審査員も、ノリノリだった。

あれだけ、冷え切っていた会場は大きく盛り上がっていた。

レビンと、キエラは歌詞を噛み締めるように楽しく歌っていた。

いつの間にか、歌は終わっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

歌い切った一人は、とても達成感のある笑顔であった。
そして、会場からは惜しみない拍手が起こっていた。

今までにない盛り上がりだつた。

司会者は、マイクを握った。

「素晴らしい歌でしたーーーそして、審査員の評価は果たして・・・」

と、審査員は歌の採点を手持ちの札に書かれた数字で評価する。
審査員は5人で、一人の持ち点が20点で合計100点が最高点であつた。

そうして、レビンとキエラの歌に採点が下さった。

審査員1

20点

感想：胸に来た。

審査員2

20点

感想：エクセレンツッ…！…！

審査員3

20点

感想：田舎が恋しくなつた。

店主

20点

感想：とても綺麗だつた。

九乃助

20点

感想：ノーコメント

合計：100点

という、最高の評価が下された。
これには、一人は大喜びだつた。

「やつたーー！」

と、レビンはキエラに抱きついた。

キエラは、まだよく事態が解らなかつたが、とても楽しかつたのは、
彼女は解つていた。

スタジオにいる二人は、とても楽しそうであった。

これを、九乃助は審査員席から見ていた。

「ふつ・・・

と、タバコを咥えて火をつけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

これにより、会場と出場は盛り上がりを取り戻した。
まるで、祭りのようだつた。

そして、惜しむように最後のヒントリーが現れた。

司会者が、またリストを持つて読み上げた。

「えーと、最後となりました！！最後を勤めるのは・・・セクハラ
王！！武田剛志――――――！」

と、スタジオに武田の姿が現れた。
司会者が、武田にマイクを向けた。

「自信のほどは・・・

「みんな・・・最後は決めてやるぜ・・・

と武田は司会の質問に答えた。

これには、観客も盛り上がつた。

だが、九乃助は青い顔をして騒いでいた。

「やめろ――――――！そいつを歌わせるなあアアアア――

――――」

と、審査員席の九乃助は狂ったように叫び散らしていた。

警備員に九乃助は取り押さえられていた。

尋常じやない叫びっぷりであった。

そして、九乃助の意思とは無縁にイントロが流れた。

「ようし……いぐぜ——! —!

と、武田と観客は盛り上がった。

九乃助は、もう発狂しそうだった。

武田は、マイクに第一声を出した。

「ぼえ～」

武田が、歌いだした瞬間、スピーカーから黒板を引っ掻いたような振動音が発した。

人間の声とは思えない音だった。

武田は、ひどい音痴だったのだ。

かつて空想科学という本で、「キ 肉マンのステ セ・キングの音の振動で地球を原子レベルに分解できる」という一説があった。その音の科学的根拠を、実際に証明するかのごとく、武田は歌つていた。

その声に、会場の人間、審査員、周辺の人々は氣絶し始めた。

このことを、九乃助は知っていた。

だから、彼は必死だった。

だが、むなしに、九乃助も氣絶していた。

そして、後にこのことは、市内カラオケ大会の「失われた時間 ロスト・メモリー～」という都市伝説になった。

こうして、夏の風物詩のカラオケ大会は優勝者の居ない結果に終わった。

なぜなら、武田の歌で、カラオケ大会どころでは無くなっていた。

じりじりして、また夏は終わりに近づいた。・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第22話「ゴー・トウ・ヘル」

とてもなく高い高層ビルの上階の個室に、レビンの捕獲を命じている中年男性がいた。

そして、手元の資料3枚を眺めていた。
資料を握る手は、血管が浮き出ている。

「キエラという・・・」「信代会」の小娘まで・・・消えた・・・
と、男は近くの側近の黒服を睨みつける様に言った。
その眼光に、黒服は怯えている。

資料には、キエラの情報が書かれてある。

もう一枚には、豪の顔写真のある情報。

そして、最後の一枚は九乃助の情報のある資料。
レビン捕獲を失敗して、姿を消した二人の資料を顔つきを鋭くして、
男は目を通していた。

「おい・・・」

「はっ、はい!!!」

中年男性は、黒服に電話を持つてこさせた。
「どちらに、お掛けになるのですか・・・？」
と、黒服は聞いた。

「「信代会」に、娘の仕事放棄の責任を取つてもう・・・」
中年の男は、受話器を握る。

そして、「信代会」の電話番号を押した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガタンゴトン・・・と、電車の音が聞こえる。

午後3時の夏の日差しは、一層に強くなっていた。

こないだ悲惨なカラオケ大会になつた市内の隣の駅は、帰省ラッシュも収まつて、利用する人は多くは無い。

その駅の改札口で、竹刀入れを肩にかけた剣道着を着た長髪の男が居た。

男は切符を自動改札機に入れ、ホームに入った。

駅の階段を降りるその姿は、剣道の練習か、試合の帰りに見えた。

・・・・・・・・・・・・・

男の目の前に、電車が停止した。

ドアが開くと、男は電車に入った。

「・・」

車両内は、空調が効いている。

時間帯のせいか、人は居なかつた。

あたりは、シーンとしている。

そして、剣道着の男は、竹刀入れを肩から下ろした。

竹刀入れからは、男は木刀を出した。

その木刀は、色が黒く、特殊な物であった。

そして、キラリと光つた。

「へえ・・、本当に、そのカツコで来るんだ・・」

と、剣道着の男の左側から足音が近づいてきた。

「ナイフの次は、木刀ですか」

と、近づいてきた足音の方から声がした。

すると、紙飛行機が飛んできた。

紙飛行機は、剣道着の男の足元に落ちた。

「・・」

「その紙飛行機は、お前さんの字だろ」と、剣道着の男に近づいた者は言った。

静かに、男はその紙飛行機を拾つ。

そして、紙飛行機を元の紙に戻した。

紙は、ファックス用紙。

そして、その紙には、達筆でこう書かれた。

『明日、午後3時、線の電車に来い。レビン・ハチコの居場所を吐いてもらう。私は袴を着て待つ』

この文を書いたのは、剣道着の男であった。

そして、このファックスを受け取り、今、男の近くに居るのは九乃助。

「・・・」

剣道着の男は、九乃助の方を向いた。

男は、左手に木刀を構えていた。

「電車ん中で、やろうてのか・・」

と言いながら、九乃助は右手を吊り革に置いた。

「もちろん・・」

と言つて、男は言つた。

それを聞いて、九乃助はこの車両に人が乗つてないか再確認した。

「貴様・・、信代会か・・」

「・・・」

と、九乃助は聞いた。

「もちろんだ・・」

「・・・」

男は、信代会だと答え時に、九乃助の顔は曇つた。

その瞬間、剣道着の男は左手の木刀を動かした。

ブン！－

左手に握られた木刀は、右手で鞘から抜くように弧を描いて左手から出現した。

その左手から抜いた木刀の速さは、半端ではなかつた。

木刀は、吊り革を握った右腕でがら空きの右腹に目掛けて放たれた。

男は、剣道経験者。

そのせいあっての木刀の速さは、肉眼では見えなかつた。

それに、木刀は竹刀より空気の抵抗がない。

だから、振りやすかつた。

以上のことがあつて、九乃助のがら空きの右腹に木刀が迫る。

「・・！」

男は、木刀に手ごたえを感じた。

妙だ。

木刀が動かせない。

しかも、感触が違う。

木刀は、九乃助の右腹に・・。

「俺の中学の先生の方が、早かつたぞ・・」

男は、目を疑つた。

九乃助の右腕は、吊り革に。

だが、左手は振った木刀を握っていた。
あの早さでの木刀をキヤッチされた。

当然、右腹には当たつていない。

「くつ！」

男は動じた。

だが、木刀は動かない。

「ちなみに、俺、中学時代・・、剣道部・・」

九乃助は、そんなことを言いながら、木刀を握る手に力を込めた。

メキメキと、木刀から音がする。

まるで、枯れ枝を折るようにして、九乃助の左手に力が入つた。

「ふん！」

ベキ！と音を立てて、木刀が折れた。

「貴様あああ！！！」

剣道着の男が、激昂して木刀を手から離した。

そして、九乃助に殴りかかっていた。

だが・・。

「ぐお！・」

男は自分の拳が届く前に、腹を蹴られた。その蹴りは、いつもより勢いがある。

そして、勢いで後ろに吹っ飛んだ。

車両のドアに背中を激突。

「くう・・」

男は、ドアにもたれた。

蹴られた腹の激痛が凄かつた。

もうまともには、戦えないのは目に見えていた。

九乃助は、男の近くに迫った。

「おい・・、他にも信代会は攻めて来るのか・・？」

と、九乃助は男に聞いた。

眼光を鋭くして。

男は腹を蹴られて、呼吸が乱れていた。

「ああ・・、貴様だけじゃなく・・、裏切り者にもな・・」

それは、キエラか、豪のことであつた。

男は、弱々しい。

ガタンゴトンと、電車はまだ動いている。そろそろ駅に近づく。

「焼野原・・」

男は、言葉切れ切れに声を出した。

電車にブレーキが掛けた。

慣性の力が、一人の体にのしかかる。

「レビンという小娘を明け渡した方が、楽だぞ・・」

その男は言った。

電車が駅に到着。

そして、ドアが開いた。

九乃助は、男に背を向けてドアの方に歩み寄った。

「レビンを渡すくらいなら、信代会やら、黒服やら、追つてくる奴らをブツ潰した方が楽だ・・」

顔だけ、振り返って男を九乃助は睨みつけた。

その眼光の鋭さと、気迫が男を襲う。

「ひつ・・・」

その顔つきに、男は恐怖した。

ガタン・・!

電車のドアが閉まった。

閉まつたと同時に、九乃助の姿は消えた。

ガタンゴトン・・・と、電車の音が聞こえる。

また、電車は時間通りに動き始めた。

時間通りに動いてるだけあつて、乗っている人間のことは考えていなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・

第22話「ロー・トウ・ヘル」（後書き）

作者ページのメッセージの返信の機能が、ちょっと出来ないため、この場を借りて、私的な返信です。

このような使い方ではないでしょうがお許しを・・・。

・・・・・・・・・・・・・

8月10日メッセージの返信

「どうも、自分の作品をここまで評価していただき、本当にありがとうございます。

作品を書くに当たって、とても励みになっています。

「フリーナイン」は、他の作家様の作品に比べると、特徴が薄く、自分の文章力と発想の未熟さで際立たない作品です。しかし、このように支持されて、本当に嬉しく思います。

期待を裏切らぬよつに、作品共々、精進していきますので、今後ともよろしくお願いします。

では、長くなりましたが、以上です。

本当に、ありがとうございました。

第23話「後悔しないで、ちょうだい（前編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「信代会が攻めてくると・・・」

と、午後の昼下がりに、キエラは子犬を抱えて座っていた。
彼女は、九乃助の部屋にいる。

部屋には、純太は居なく、さつき剣道着の男をやつた九乃助が扇風機の前に、パンツ姿で横になっていた。

「ああ・・・、確かに、そう言つた」

と言いながら、扇風機の前で漫画を読んでいた。

キエラの腕から、子犬が離れた。

「信代会は、危険だ・・・、レビンだけじゃなく・・・、他に危害を加える場合がある・・・」

と、彼女はうつむいた。

危険であると彼女は伝えたかった。

「・・・」

そう聞いた九乃助の顔も、少しだけ曇る。

ガブッ・・・

子犬が、九乃助の右足のつま先を噛んだ。
思いつき歯を立てて。

「ぐはっ！」

痛さで、九乃助は上半身を反らした。

「あつ！こら！駄目、ジダン！」

と、キエラは子犬を両手で捕まえた。

「ジダン？」

それは、キエラが付けた子犬の名前であった。

ジリリリリリリ・・・

と、いきなり電話が鳴った。

九乃助がジダンに足を噛まれていて、キエラは受話器を握った。
「もしもし・・・」

「勝手に出るな！！」

それでも、もうキエラは電話の相手の依頼を聞き始めた。
まだ、ジダンは足を噛んでいる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時間は、夜の7時。

ここは、いつもの高速道の橋の下。

夜なだけあって、車のマフラー音が響いていた。
こないだの爆破後が残っている。

そんな場所に、学生服を肩に掛け、太めの腹にさらしを巻いたリーゼントの男と、細めの学生服を着た少年の二人がいた。

「本当に来るのか・・・」

と細めの少年、池田が言った。

「大丈夫だ！！九乃助さんは来てくれる！..」

と、太目の大田が答えた。
この「人は、以前、九乃助に喧嘩の代打を頼んだ」一人組（第7話）
であった。

さつきの電話をかけたのも、彼らであった。

・・・・・・・・・・・・・・

「で、なんの用だ・・・」

しばらくして、九乃助がCR-Xに乗つて現れた。いつものように、タバコを吸つている。

「・・・

大田と池田は、どこか言いにくそうであった。

「はよ、言え・・・」

と、九乃助が急かした。

「500万貸してください・・・」

声をそろえて言った。

九乃助の口からタバコが落ちた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれは・・、先日・・。

二人の通う高校の校門には庭があり、そこには校長の銅像があつた。放課後、二人はこの銅像の前に居た。

「なあ・・・」

「どうした・・・」

と、池田が話しかけた。

「この銅像つてよ、意味あんのかな・・・」

「ないだろ」

「大体、こういうのつて自己満足だよな・・・」

「てめーの学校に、てめーの銅像作つて、どうすんだつて感じー」

そう言つて、二人は銅像に落書きを書いた。

当然、それが校長にバレ、校長室に呼ばれた。

そして、校長は一人に請求書を渡した。

「弁償しろ・・・じゃないと、退学」

校長が、その一言を言った。

請求書には、500万と表記されていた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「僕、帰る・・・」

事情を聞いた九乃助は、立ち上がった。

だが、大田と池田が九乃助の体を抑えていた。

「そんなこと言わずに！500万でいいんですよ！――」

池田が、そう言った。

「どこの世界に、500万も貸す、なんでも屋がいるか！！！それに、レッカーだの、車購入だの、引越ししたり（キエラの分とか）生活費で、金が無いんだ！！」

二人の手を払おうと、九乃助は必死にもがいた。だが、二人の手は一向に離れようとはしなかった。

「じゃあ、せめて、500万稼ぐのに協力してください！――それで、500万より余ったお金を、九乃助さんに全額上げます」

と大田が言ったので、九乃助は帰るを止めた。

しかし、この500万という課題は大きい。しかも、期限が明日までであった。

とりあえず、3人の今の所持金を合わせても、2万だけであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここは、私立探偵、豪の住むマンション。

この田舎圏では、比較的に豪華な設備であり、なにより部屋が広い。彼の実家は、お金持ちであったため、貯金が多くある彼は気兼ねなくマンション暮らしをしていた。

そして、今日も、夜のお楽しみのアニメ観賞を始めよつとしていた。

だが・・。

「篤元いるか！！」

と部屋のドアを、いきなり開けて、九乃助が現れた。

豪は、急いでテレビを消して、ドアの方の走つて行つた。

ドアの向こうには、九乃助と大田、池田がいた。

「なんですか・・」

と、自分のプライベートタイムを邪魔されて、豪は気が立つていた。

早く帰つてもらいたかった。

それと、趣味だらけの部屋には入つてほしくない。

「とりあえず、部屋に入つていいか

と、豪のそんな気持ちを解らずに、九乃助が言つた。

「駄目だ！！！」

豪は、ドアを体すべてを使って塞いだ。
すごい必死である。

しまいには、汗が出てきた。

「いいじやん、入れてよ・・」

ズカズカと、九乃助は豪の体を押し付けて入ろうとしていた。

「いやーーー！入らないで！」

「うるさい！入れろ！..」

豪は泣き叫ぶ。

それを、無視して九乃助は入ろうとする。

「お金、上げるから入らないで！..！」

と、豪は泣き叫んだ。

「解つた」

そういうと、九乃助は部屋に入るのを止めた。

豪は、呼吸が乱れていた。

「とりあえず、500万くれ」

「ふざけるなあ——！」

豪は、なんで、僕はこんな男に金を渡さなければならんだと泣いた。

だが、500万も渡せないので、交渉の末、10万渡した。

「つして、合計金額、12万。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

トントン！

と、九乃助は大田に池田を連れて、レビンの部屋のドアを叩いた。そして、3人はレビンの部屋に入り、事情を話した。

「すいませんけど・・・そんなお金ありませんよ・・・」

と、レビンは言った。

当然である。

「いや、やうじやない・・・

と言いつつ、九乃助は、ポケットから写真を出した。

その写真は、武田の顔写真であった。

「これ、武田さんの写真ですが・・・」

レビンは写真を手渡した。

「こいつから、500万巻き上げろ・・・

「はあ・・・」

巻き上げると、九乃助は言った。

しかも500万と。

これは、豪の10万を九乃助の取り分にしようとする考えであった。

「どうやって・・・」

と、レビンは引きつづいた。

「つして、九乃助はレビンにやつてもらひにとを説明した。

「あのセクハラ教師から、ふんだくってやれ……
と、九乃助はニヤけた。

ばかばかしいと、レビンはため息をついた。

…………

そして、作戦は実行された。

ピロコロワー

と高校の職員室で、残業中の武田の携帯が鳴った。
そして、仕事中であるうが、無視して電話に出た。
「もしもししー、レビンちゃんー、何の用ー？」
と、陽気にレビンからの電話に答えた。

「武田さん・・」

電話から聞こえるのは、どこか、悲しげな声だった。

「あれ、どうたの？」「

様子がおかしいと、武田は気づいた。
すると・・。

「逢いたい・・」

と、レビンの声が電話から聞こえた。

「・・・

武田は、電話を切った。

そして、瞬く間に職員室から出て行った。

…………

レビンの部屋。

電話が切れたことを、レビンは伝えた。

それを聞いて、九乃助は笑った。

「計画通り・・」

そつと、次のプランへと段階を進めるのであつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第24話「後悔しないで、ちゅうだい（後編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

武田は、職場から街をスース姿で走り抜けた。

その速度は、尋常ではない。

しかも、呼吸が乱れるどころか、武田は微笑みすら浮かべていた。

「逢いたい・・・」

そのレビンの声が、脳内で数十回、リピートされていた。
その単語は、武田には誘つているとしか思えなかつた。

だから、武田は走つてゐる。

でも、それは九乃助の手中で踊らされてゐるとは、気がついてはいなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

武田が向かつてゐるレビンのアパートでは、着々と準備が始まつていた。
アパートの外では、レビンは女子高生の制服を着ていた。

そして、武田を待つてゐた。

「・・・」

凄い不本意な感じであつた。

・・・レビンが、自分の部屋から武田に電話してからの数分前・・

「で、どうするればいいんですか・・・、私・・・」

そういうと、九乃助が紙袋を渡した。

すると、中には女子高生の制服と台本が入っていた。

「これを着て、この脚本通りの台詞を言え」

「はあ！！！」

九乃助のその指示に、レビンは驚いた。

ちなみに、制服は、その手の店から借りて來たのであった。
「なんですか！！いやですよ！！」

と、レビンは制服を拒んだ。

そして、その紙袋を九乃助に返した。

「うるさい！！依頼のためだ！！武田は、私服には萌えないんだよ
！！あいつは制服があれば、生きてゆける男なんだよ！！」

九乃助は、紙袋を押し返した。

「依頼は解つてますが！！絶対に、制服は嫌です！！！！」

「・・・」

レビンの押しに、九乃助はちょっと止まった。

氣迫負けしてしまったのだ。

「ああ・・・、解つたよ・・・」

九乃助は、紙袋を引き取つた。

「やつた！！」

と、レビンが喜んだ。

しかし・・・。

ズサツ・・

「えつ・・・」

机の上に、もうひとつ紙袋を置いた。

袋の中には、スクール水着が見える。

「・・・」

レビンは、表情が凍つた。

九乃助は、タバコを咥えた。

制服がいやなら、これを着ろと言わんばかりの態度であった。

「これ着る？」

と言いながら、悪魔のような表情でタバコに火をつけた。

「制服でお願いします」

レビンは土下座した。

とうとう彼女は言い包められた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さすが、スクール水着は着れないとレビンは思つた。

そう思うレビンは、アパートの前で待機。

そして、九乃助、池田、大田はアパートの隅に隠れて現場の状況を眺めていた。

「大丈夫ですかね・・・」

と、池田が心配そうに言つ。

だが、九乃助は余裕の表情であった。

しばらくすると、まるで馬の駆け足のような足音が聞こえてきた。
これは、武田の足音である。

奴が来た・・・と九乃助は解つた。

「来たか・・・プレッシャー・・・」

レビンは、強烈なプレッシャーを感じた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあはあ・・・」

武田が、レビンの目の前に現れた。

彼は、全力疾走で來たが疲れてなどいない。

何故なら、アドレナリンが分泌しているから。

息だつて、本当は切らしていない。

だが、呼吸が乱れているのは演技である。必死で来たという演技である。

「・・・」

レビンの方は、脚本どおりの演技を始めていた。
わざと、目を潤させていた。

一方で、自分が制服なのに、そのことに、一切ツツツコまない武田に
疑問を感じていた。

九乃助は、隅っこで笑っている。

「うひょーーー！始まりおったでーーー！」

どこか、楽しそうだった。

それを見て、池田と大田は引いていた。

「どうしたんだい・・・」

と、武田が、レビンに少し顔を凜として近づいてくる。
目を潤ませた制服のレビンは、武田には、たまらなかつた。
どれくらい、たまらないかと言つと、吉野家の牛丼に卵と味噌汁を
付ける位である（作者談）

「あたし・・・」

レビンが、涙を流した。

演技であるが。

それで、武田の心臓の鼓動が早くなつた。

「武田先生のことが好き・・・（棒読み）

と、レビンが心にもないことを言つた。
刻が止まつた。

武田は、心中で万歳した。

明らかに、おかしいところが多くあるのに、疑問にも感じなかつた。

今までに無いくらいの量の脳内物質が分泌された。

例えると、生まれて初めて、焼き肉屋で上カルビを食べたくらいで

ある（作者談）

九乃助は、腹がよじれるほど笑っていた。

「だははは！なんじゃ、あの武田の表情は……」

「…」

「…」

他の二人は、表情が硬かつた。

武田は、ものすごい嬉しそうな表情をした。

女子高生との禁じられた恋愛を夢見てなつた高校教師生活2年では、味わえない感動である。

（レビンは、女子高生じゃないが）夢が叶つた瞬間であつた。

「ゴホッ……ゴホッ……」

「…」

レビンが、わざと急に咳き込んだ。

そして、わざと武田に背中を向けるように振つ返つた。

「どうした……」

と、武田が声をかけていた。

その隙に、ポケットにある血のりを手につけた。

血のりをつけた手で、口を押さえる。

「大丈夫か……」

と、武田が目の前に出てきた。

「はっ……」

武田が前に出た瞬間、その手につけた血のりを見せた。ものすごいベタな展開が始まった。

血のりに、武田は驚いていた。

その引っ掛けかりぶりに、九乃助は大爆笑。

「！」これは・・

「・・（血のり・・）実は、私・・」

と、レビンは演技を始めた。

「あと、余命1ヶ月なの・・」

と、レビンは台詞を言つた。

その瞬間。

武田に降つても居ない雷が鳴つた。

「なんだてえええええ――――――――――」

大声で、武田は叫んだ。

世界の中心で叫んだ。

「ぎやははははは！？」

と、九乃助は転げまわっていた。

こんなに笑つたのは、ダウンタウンの「うつええ感じの名作コント
「キャシー塚本」以来であると語つた。

「嘘だろーーーレビンーーー嘘だろ、こんなのがーーー」

「本当よ・・」

武田は、信じられないくらい騒いだ。

この世の終わりくらいに叫んだ。

夢が叶つた瞬間に、そのような悲劇に泣き叫んでいた。
こんなに引っかかる物かと、レビンは引いていた。

「どうすれば、治るんだーーー」

と、武田がレビンの手を握った。

「実は、世界的に有名な無免許医、ハザマ・クロオなら治せる病気

だけど、法外な治療費をかけられて・・・」

と、レビンは脚本を思い出しつつ言い始めた。

明らかに、ベタな急展開である。

「法外な治療費だと！！」

と、涙を流しながら叫ぶ武田。

それに、引くレビン。

それを笑う九乃助。

「500万なんだけど・・・」

例の金額を、ついに言った。

さすがに、無理だと思っていた。

だが・・・。

武田は、その場から街をスース姿で走り去った。
その速度は、尋常ではない。

さすがに、レビンはバレたと思つていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

数時間後、武田が500万を持って現れた。

マジかよ・・・。

と、誰もが思つていた。

九乃助も、本当に持つてくるとは思わなかつたと驚いた。

こうして、ついに500万が手に入った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翌日の昼下がり・・・。

九乃助の部屋に、レビンがいた。

相変わらず九乃助は扇風機の前に、パンツ姿で横になつている。

「ちゃんと、返せて良かつたですね、あの一人・・・

と、レビンが言つた。

「ああ・・・、確かに・・・」

と言いながら、扇風機の前で漫画を読んでいた。

「それにしても、私、武田さんを少し見直しました・・・

「へつ！？」

そう言つたレビンに、九乃助は驚いた。

「あんな嘘を信じて、本当にお金持つてきてくれるなんて・・・

と、レビンの方向を見ると、彼女は頬を赤らめていた。

九乃助の顔は固まつていた。

「なんか、武田さんに悪い」としちゃつたな・・・

と、うつむいていた。

「・・・」

九乃助は、ちょっと驚いていた。
嘘だろと・・・。

「九乃助さんは、もし、私にあんなこと言われたら、500万持つ
てきてくれますか？」「

と、レビンは冗談っぽく言つた。

それを聞いた九乃助は、また漫画本の方に向ぐ。

「ふん・・・」

と言つて、九乃助は尻をかいた。

ピンポーン！

いきなり、部屋のチャイムが鳴つた。
郵便物が来たのである。

『「みんなのサラ金」

貸し

500万円

武田剛志

保証人

焼野原九乃助』

消費者金融から、このような紙が来た。
それを受け取った九乃助は、固まつた。
なつた覚えの無い保証人になつてゐる。
ちなみに、武田は九乃助の判子を複製していた。

昨日の500万は、九乃助を担保にした借金であった。
こうして、九乃助はまた500万の呪縛を抱えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

第25話「誰かのために生きるなり（前編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

真夏の蒸し暑い夜・・。

レビンは眠つている最中に、よくうなされていく。それは、嫌な記憶が悪夢として襲つてくるからだ。未だに、その悪夢は忘れた頃に襲つてくる。だから、彼女は苦しかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

夢の内容は、親の姿であった。

「お前という娘は、自分の立場が解つていないので…」

「まったく、あなたつて娘は…」

それが、彼女の親の口癖らしい。

いつも英才教育の日々である。

幼稚園の頃から、レベルの高い学校への受験ばかりであった。スケジュールばかりこなす日々であった。

学校には、辛いことを分け合える友達は居た。

思春期の初恋はない。

気になる男の子だって居たのに。

辛い思い出のひとつに、風邪を引いた時があった。

だが、父親は心配する一言も言わなかつた。

それが、彼女の今までの現実であつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その寝苦しい夜から、昼に変わっていた。

関東圏に入る高速道路。

昼間の平日なだけあって、そんなには車は通つていなかつた。

そして、その高速道路のサービスエリアに白いCR-Xがあつた。この車は、もちろん九乃助の愛車である。

一方の九乃助はサービスエリアの食堂で、ラーメンを食べながら携帯を握つていた。

「レビンが、夏風邪を？」

と言ひながら、右手は麺をすくつている。

「そりなんだよ」

と電話の向こうは、キエラ。

九乃助は、仕事のため、朝早くから高速道路に居た。ちょうど、その仕事も終わり昼間だったのサービスエリアにいた。その際に、電話が鳴つたのだ。

「とりあえず、安静にさせろ・・・。風邪薬か、なんか買つてくるわ」と携帯に言いつつ、どんぶりを持ってスープを飲み始めた。

「純太の奴は？」

と、純太について聞いた。

「見舞いに来たと思つたら、レビンが具合悪いことをいいことに、勝手に部屋のタンス開けてたから、殴つておいた」

キエラは、そう答えた。

「よくやつた。あと、武田が来たら、有無を言わさずに病院に送れ」九乃助は、容赦なく言つた。

「あとを・・・」

「なんだよ・・・」

急に、キエラの声が暗くなつた。

「レビン、なんか様子がおかしいんだ・・・

「・・・」

九乃助の受話器の向いのキヒラは、レビンの部屋にいた。
そして、ベッドで横たわるレビンの額にタオルを当てている。

「ぐう・・・

熱は大した事ないのだが、眠っているレビンは、うなされていた。
苦しそうに。兀

まるで、悪夢にでも、うなされている様であった。

「なんか、苦しかつなんだ・・・。たまに、よく聞こえないけど、苦
しそうに寝言も・・・」

そのことを、キヒラは伝えた。

九乃助は、それを聞いて顔つきが変わった。

どこか、心配そう表情である。

「そつか・・・、なんか、あつたら連絡くれ・・・」

「わかった」

それを言つて、携帯の電源は切れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

サービスエリアから、九乃助は出た。

そして、愛車のある駐車場へと足を向かわせる。
風邪薬のことを、念頭に置いていた。

だが・・・。

「・・・!」

九乃助の足が、CR-Xの途中で止まつた。
なにかに、気づいた。

「けつ・・

唾を吐き捨てた。

そして、周りを見渡す。

駐車場の周りには、追っ手の黒服の男たちが見えた。

多数の足音が聞こえてくる。

その足音は、九乃助に向かっている。

「焼野原・・、見つけたぞ・・」

黒服の男たちが、大勢で現れた。

駐車場にだ。

その光景に、一般人は怯えていた。

男たちは、いつものようにレビンの捕獲に現れた。

九乃助を倒さないと、レビンの捕獲は成功しないと思つていてるからだ。

「お前ら・・、今は急いでるんだよ・・」

そう九乃助は言った。

「やれ！・・

黒服のリーダー格が言つた瞬間に、黒服の大人数が迫ってきた。

「急いでるつて、言つてんだろうが！・！そんなに、救急車に乗りてえか！・！」

そう咆哮する九乃助は、走りながら黒服の一人の顔面に拳を入れた。黒服の腹に膝を入れる。

その隣にいた者の腹部には裏拳を撃ち込む。

次に襲つてくる黒服の顔には、頭突きをした。

その血が、九乃助の額についた。

足を、後ろの者に目掛けて蹴りを放つた。

たつた一人に、次々と黒服は倒れて行つた。

九乃助の方は、いつもより攻撃に激が入つていた。

レビンが苦しんでると聞いてからの黒服の登場であつたからだ。

アパートでは、風邪で寝込んでいるレビンが、未だに、うなされて
いる。

熱と悪夢で苦しんでいた。

それを、心配そうに部屋にいるキエラと純太が見つめていた。
たまに、レビンの目から涙が出ていた。
しかも、体温計で測るたびに体温が上がっている。
呼吸も、普通ではなかつた。

顔が、どんどん青ざめていた。

「医者に連れて行かないと・・・、やばいんじゃないかな・・・」
指示通りに縄で縛られた純太が、そう言つ。

さすがの彼でも、心配していた。

「そうだよね・・・」

キエラが、携帯を握つた。

救急車は、呼べない。

呼んだ救急車から、追つ手にバレる可能性があるからだ。
だから、キエラは豪の電話番号にかけた。

・・・・・・・・・・・・・・

バゴッ！！

九乃助の拳が、黒服の最後の一人の顔面に入った。

血を吹いて、黒服が倒れた。

サービスエリアの駐車場に、黒服全員が地面に倒れている。

九乃助が全員、ぶちのめした。

人数は明らかに多かつたが、九乃助は大した怪我もしないでいた。

全員倒れたのを確認して、九乃助は黒服らに背を向けた。

やつと、車に戻れると思つていた。

「へえー、すゞーーー」

九乃助の背後から声が聞こえた。

声が高めの少年のような声であった。

その声で、九乃助の目つきが鋭くなる。

「誰だ・・・」

そう言つて、振り返つた。

「へへへ・・・」

振り返ると、田の細い茶髪の長髪の細い線の体の男であった。

服装は、黒のズボンと黒のコート。

どこか、女性に見えなくもない容姿。

そして、笑つてゐる。

無邪氣そうに。

「さすが、関東圏の悪夢だねー。他の信代会も、苦戦するわけだーーー」

男は、優しげに言つた。

だが、九乃助の眼光は鋭い。

どこか、いつもと違う余裕のない表情であった。

早くアパートの方に戻りたかったのだ。

「怖いよー。表情が怖いーーー」

と、細めの男は無邪氣に言つた。

「中学生は、家に帰れ」

そう九乃助は、言い捨てる。

男の容姿が、中学生に見えたから、そう皮肉つた。

このようなことを言つても、男は笑つてゐる。

どこか、男には掴み所がなかつた。

それが一向に、九乃助のイライラを増幅させた。

「失せろ・・・」

また、そう言い捨てた。

「ふふつ・・」

笑いながら男が、近づいてきた。
男の両手はポケットに突っ込んでいる。
九乃助も、両腕を構えて男に近づく。
そうして、二人は間合いは縮めた。
まさに、一触即発である。

「・・・！」

男の右腕が動いた。

その瞬間、九乃助は警戒をした。
ナイフか？

武器が出ると、そう思っていた。

だが・・・。

男の手からは、携帯用のスプレーが出てきた。

「！」

それに、九乃助は反応が遅れた。

スプレーは、九乃助の顔に目掛けている。

シユツ・・！

男は、スプレーを放った。

「うぐつ・・！」

目に激痛が来た。

九乃助の目に、液体がかかつた。
目が開けられないほどに、液体が目を痛めつける。
液体は、柑橘系であった。

そのせいで、九乃助は目を閉じた。

「ばーか・・・

男は、そう言った。

九乃助が目を閉じた瞬間に合わせて、自分の足を蹴り上がった。当然、九乃助は蹴りが迫っているのが解つてはいない。

バゴッ！

「うつ！・・・

九乃助の腹部に当たつた。

激痛が腹を貫く。

だが、その蹴りは普通の蹴りではない。

男の靴のつま先部に、金属のプレートが仕込まれている。腹に当たつた感触で、九乃助は解つた。

「あははは！・・・

男は笑つてゐる。

「・・・

九乃助は思つた。

こいつは、自分が死ぬほど好かないタイプの人間だと。

・・・・・・・・・・・・・・

ブオオオオーーーン！

アパートの近くに、車のマフラーの音が聞こえた。駐車場から青いカラーのインプレッサが出てきた。運転席には、豪が居た。

後部座席には、目は覚ましたが病で呼吸が乱れているレビンと、純太、キエラがいた。

助手席には、レビンの様子を聞いて現れた武田が、未だに、レビンは熱でうなされている。それを、心配そうに4人は思っていた。

「レモンちゃん、まだ俺たち結婚しないだろ！！元気になれよ！」

と助手席から、振り返つて武田が叫んだ。

純太が、そつそつとんだ。

運転しながら、豪は叫んだ。

キエラは携帯を、九乃助にかけていたが繋がらない。

「お前、お前がやつたんだよ。」
と、さすがに、腰を切った。

レビンは、この4人の姿を見て、自分が悪夢で苦しんでいるのを忘れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

九乃助は電話に出られる状況ではない。

男の靴のつま先部に、金属のプレートが仕込まれている。腹に当たった感触で、九乃助は解つた。

「あははは！」

男は笑っている。

「・・・」

目には、柑橘類の液体。

そのせいで、目が開けない。

これをいいことに、男は一撃、背中に拳を入れた。

「ぐつ！」

骨に激痛が来た。

これは、素拳での痛みでない。

男は、両手にメリケンを付けていた。

メリケンがもう一撃、腹部に来た。

それに、九乃助は血を吹いた。

「ペッ・・・」

今度は、どこに来るんだ・・・

そう九乃助は、頭を巡らせた。

「うひひ・・・」

男の笑い声は、未だにしている。

そのことが、九乃助の怒りに油を注いだ。

目潰しという卑怯に、小細工。

一方的に、人をぶん殴って喜んでいるということが、物凄く許せなかつた。

しかも、こいつは素手で殴っていない。

人を殴った拳には、感触がある。

自分の拳だつて痛む。

だが、メリケンには、それを感じさせない。
殴るとはいえ、相手に触れない。
人を、なんとも思っていない。

段々、九乃助の血液が沸騰していく。

「おい・・・

「ん・・・」

九乃助が、殴られつつも口を開いた。

「俺が・・・、目が開いた瞬間・・・」

喋つてゐる途中に男の右のメリケン拳が、九乃助の顔に迫つた。

男は、容赦などしない。

だが・・・。

「！？」

男はゾッとした。

さつきの右の拳を、九乃助の右手がキャッチした。
目は開いていないのに。

九乃助は、音と拳からの風圧でメリケンを捕まえた。
それほど、喧嘩慣れしていた。

または、怒つていた。

メキメキ・・・

そして、メリケン拳には握力からの圧力が来た。

九乃助の握力は、万力のように徐々に強くなつてきた。

「ひつ・・！」

それに男は怯えた。

九乃助が、また血が垂れた口を開いた。

「俺の目が開くまで・・・」

そして、握っていた右手を離した。

男は、すぐに後方に退いた。

「覚悟しとけ・・・」

そう言つた瞬間、九乃助の目が開いた。

眼球が血走つていた。

まるで、鬼のように。

「ひつ・・・」

男は怯えた。

九乃助の怒りが感じ取れる気迫に。

血管が、額と拳に浮かんでいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「痛つ・・・」

病院に着いたレビンは、ベッドに横になつて点滴と栄養剤の注射を打たれていた。

そのせいか、彼女は少し楽になつてきたようである。

そして、他の4人は、そのベッドから離れた場所で、医者から話を聞いていた。

「彼女は、ただの夏風邪ですね・・・」

と、眼鏡をかけた中年の男性の医師が言つ。

それを聞いて、4人は安心した。

「しかし・・・」

医者が、もう一言を言い始めた。

「精神から来る不調というものが、あるんですが・・・

と、語り出した医者の言葉を4人は聞き始めた。

人は大した病氣でなくとも、深刻な病氣だと思い込めば悪化する。

更に、それを治す方法がないと思い込めば、更に悪化。

要するに、精神が追い詰められれば、追い詰められるほど逃げられ

なくなる病の悪化。

それと同じように、レビンは風邪を引くこと自体に嫌な思い出がつて、そのトラウマが、ただの夏風邪を悪化させた。悪夢と、過去に風邪を引いた時の父親の姿を思い出して、精神が不安定になつたのであつた。

だが、彼女は時間とともに治まつた。

要するに、時間が彼女の精神を、少し癒した。

以上のことと、医者は語つた。

それを聞いて、キエラ、純太、豪の表情が固まつた。
まるで、彼女の過去に触れてしまうようで。
だが、4人はレビンの過去は知らない。
いつかは、知らなければならないと思うが。

武田は話を聞いてから、徐に喫煙所に足を向かわせた。

「あの娘も・・・、九乃助と一緒に・・・」

そう、歩きつつ言つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

目が血走つた九乃助は、徐々に男に向かつていつた。

「ごめんなさい！許してください！！！」

急に男が、土下座をした。

「すいませんでした！！勘弁してください！！！」

と、何度も頭を地面にぶつけて謝罪をしていた。

「けつ・・・」

土下座を見た九乃助は、足を止めた。

そして、口から垂れる血を吐いた。

「一度と、顔を見せるな・・・。つたぐ・・・」

そう言つて、男に背中を向けた。

九乃助は、また足を進めた。

「ばーか・・」

男は、土下座の体制で、左手をコートに潜り込ませた。そして、ナイフを取り出した。

取り出した瞬間、男は立ち上がった。

足早に、九乃助の背中に目掛けて走った。

男は、フェイクの土下座をしたのであった。

卑怯にも、背中を向けた者に対してナイフを・・。

「やつぱりな・・」

ため息ながらに、背を向けた九乃助は言う。

足音がしなくとも、九乃助は男の行動に気づいていた。こういう奴は、何度も出会ったのだ。

そして、あしらつた。

だから、不意打ちへの対応なんかは慣れている。

「焼野原――――！」

狂気になつた男は、叫んだ。

足音が近づいてくる。

男の体は、徐々に迫つてくる。

それに対して九乃助は、首だけ振り向いた。

「ペッ！――」

九乃助は、口から血を水鉄砲のように飛ばした。
ベチョツ！

男の顔に血が、かかつた。

そして、目に入った。

「うわあ！！」

血の目漬しであった。

それによつて、男の行動は止まつた。

「この！！」

目に入った血を拭こうと、男はナイフを地面に捨てた。

「俺の血は、柑橘より目になぐくぜ・・・」

九乃助は、低い声で言った。

体の向きは、そのまで、足を後ろに田掛け大きく蹴つた。

バゴツ！！

男の顔面に入った。

感触で、九乃助は解つた。

そして、男が気絶したか振り向いて確認せず、自分の愛車の方に向かう。

もう、この男の顔は見たくなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

時間は、午前の3時になつた。

レビンの症状は良くなり、4人は安心していた。

インフレッサで送り出した豪は、見舞い品を置いて去つた。

武田は、キエラに追い出され氣味で帰る。

純太、キエラは随分、心配してたせいか、看病しながらレビンの部屋でそのまま眠り込んだ。

よつほど、疲れていたようだつた。

しかし、アパートに戻つたレビンにまた悪夢が襲う。

具合は、良くなつたが精神的な面が、まだ良くなかった。

悪夢への恐怖が、悪夢を生んだ。

「うひ・・・」

ベッドの上で、麺をされている。

また、彼女は苦しんでいる。

夢の内容も、また同じ。

どうしようもない不安が、彼女を襲う。

一人での葛藤が始まっていた。

しかし、そんな時・・・。

「おわっ！キヒラ、こんなとこで寝るな！踏んじまつた
ぞ！－！」

悪夢の途中で、声が聞こえた。

この声は・・・。

「純太も居たのか。踏んじまつた・・・まあ、いいか・・・
九乃助の声である。

「九乃助さん・・！」

そう言つて、レビンは田を覚ました。
悪夢から、田を覚ましたのだ。

ベッドから、レビンが起き上がった。

「あつ・・・」

起こしてしまつたかと、九乃助は焦つた。

「悪い、悪い・・、今、帰つて来たんですよ・・。ちょっと様子見に・

・

と、笑つて謝罪した。

それを見ると、さつきまでの悪夢が、彼女にはじりでも良くなつて
きた。

見舞い品のリングを、九乃助は食べやすいように切っている。

皿に置いて、フォークに刺した。

「こいつら、遅くまで看病してたみたいだな・・・

と、九乃助は、眠っているキエラ、純太を見て言った。

「本当に、嬉しいです・・・」

と、レビンは言う。

「あたしのために・・・」

キエラ、純太、豪、武田が、こいつして自分のこと心配してくれるのが、堪らなく嬉しかった。

みんなが、ここまで、心配してくれるのが。

今までのことと、このことを考えると、彼女には自然と涙が出て来る。

過去と比べられないくらいの優しさ。

「おいつ・・・」

急に、レビンは泣き始めた。

それに、九乃助は驚いた。

これで、彼女が泣き出す目に合つのは2回目。

「泣くなっつの！！泣くな！！こらーーー！」

自分が泣かせたみたいで、九乃助は困った。

それでも、泣いている。

「つたく・・・」

とりあえず、九乃助は泣き止むまで、彼女の傍に居た。傍に居ながら、泣きじゃくる彼女の肩に手を掛けた。その状態を、ずっと続けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

泣き出してから、だいぶ時間が経つていた。
しばらくすると、彼女は泣き止んだ。

パジャマの袖が、濡れていた。

泣き止んだ彼女に九乃助は、ティッシュペーパーを3枚渡した。

「ありがと・・」

それを受け取つて、レビンは礼を言いつつ鼻をかんだ。
鼻が赤くなっている。

物凄く泣いたせいか、だいぶ、彼女は落ち着いていた。
窓を見ると、明け方の空模様であった。
まるで、彼女の心のようであった。

薄暗い夜空に、太陽が出ている。

「ごめんなさい・・、こんな遅くまで・・」

と冷静になつたレビンが謝つた。

さつきまで、取り乱れて泣いた姿を見られたせいか、彼女は気恥ず
かしい気分である。

彼女の様子を見届けた九乃助は、立ち上がつた。

「また悪夢見るようだつたら、何度でも呼べ。何時でも、何処に居
ても、アフリカに居ても、宇宙に居ても、地獄に居ても悪夢を覚ま
してやるよ

」

そう言つて、レビンに背中を向けた。

九乃助の背中を、レビンはやけに大きく感じた。
まるで、自分の本当の父親のようであった。
もしくは、それ以上の存在に感じた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第27話「夏の思い出」

• •

九乃助は、午後の昼下がりに八百屋で足が止まつた。
「大玉スイカが半額だと・・」

八百屋の店先には、普段よりも格安で並べられていたスイカがある。スイカ好きの九乃助には、たまらなかつた。

そして、おもわす、2個購入したのであるが、悲劇の始まりだった…。

アパートに戻った九乃助は、純太にスイカを切らせていた。台所で、純太は愚痴つている。

「個食へられるんですか……」

「大丈夫じゃ！『スイカは別腹』、『ボールは友達！』って言うだろーー！」俺の最高記録は、4つだしよ

訳のわからないことを言うほど、九乃助は上機嫌であつた。

トン！ トン！

ドアのノックがなつた。

—お邪魔します—

と、レビンがドアを開けて部屋に入ってきた。

レビンにもスイカを食べさせようとする老婆心からであつた。

「あつ、レビンちゃんー」

と、純太はスイカを切り分けながら、軽く手を振った。

「おおー、来たかー」

と、九乃助は上機嫌に、レビンをテーブルに手招き。

それに合わせて、レビンは部屋に入る。

九乃助の機嫌の良さに、レビンはちょっと珍しいと思つていた。

「機嫌よさそうですねー。今日は、どうしたんですか?」

「今日は、スイカが半額ですよー」

と、意気揚々に九乃助は言う。

「ああ、近くの八百屋が安かつたんでしょう?」

「そうだ・・、なんで、解つた?」

レビンは半額の店が、どこだか一発で当てた。
なぜ、一発で解つたのか・・。

理由は、数分後にわかつた・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・
・・
・・」

3人は、言葉が出なくなつていた。
まさに、金縛り状態。

九乃助の部屋に、2個スイカが追加された。

そのスイカは、誇らしげにテーブルにそびえる。

この2個は、レビンが呼ばれる前に、例の半額の店で買つてきたスイカであった。

彼女も、九乃助たちと食べようと思つての購入である。

「増えちまつたな・・」

とスイカ好きの九乃助も、ちょっと困つていた。

「まあ、キエラも、遅れて来るから大丈夫だー!ー」

九乃助は、キエラも呼んでいたのであつた。
キエラは、そろそろ来るはずである。

・・・・・・・・・・・・・・

「・・・

「・・・

「・・・

まさに、金縛り状態。

九乃助の部屋に、また2個スイカが追加された。
切り分けた分も含めた6個のスイカは、誇らしげにテーブルにそびえる。

キエラも、さつき購入していたのであつた。

「どうすんだよ・・・」

さすがの九乃助も困っていた。

「しかも、全部、大玉じゃないですか・・・」

と、レビンがスイカのサイズにツッコミを入れる。

「・・・！そうだ！！」

と、九乃助が声を上げた。

そして、部屋から飛び出して行った。

・・・・・・・・・・・・・・

私立探偵、豪の住むマンションには、青いインプレッサがあつた。
その隣に、九乃助のC R - Xが駐車された。

そして、豪の部屋では・・・

「篤元いるか！――

と部屋のドアを、いきなり開けて、九乃助が現れた。

「いや、お裾分けするよりであった。」

「ああ、ナニ跟さんいしと」は……？」

そう言つて豪が、用件を聞かずに、また部屋に戻つて行つた。
まるで、なにかを取りに行くようだ。・。

• •

—	—	—	—	—
•	•	•	•	•
•	•	•	•	•
—	—	—	—	—

九乃助がアパートに戻ると、5人は言葉が出なくなつた。まさに、金縛り状態。

九万助の部屋には、豪が居た。

九乃助の部屋に、また2個スイカが追加された。

えふ。

減るどころか、増えた。

分けしようつと思つていた。

だが、また九乃助たちの首を絞める羽目になつた。

と、純太がキレた。

「うのせでなーー。」つなるとほ、思わなかつたんだよーー。」

九乃助は、逆ギレで返した。

レビンは、この状況の不可抗力さに泣きそうだった。

「みんな、落ち着いて！」

と、キエラが言った。

すると、その場の騒ぎは納まつた。

まさに、鶴の一聲。

彼女は、なにかの策があるようであった。

「キエラちゃん、急にどうしたの・・」

とキエラの冷静な様子に、レビンは反応した

すると、キエラは策有利氣に口を開いた。

「この5人でスイカ8個を、一人一個で食べれば3個残る」

すつゝい、当たり前のことを言った。

「なんことじやねえ――――！」

「なんことじやねえ――――！」

「なんことじやねえ――――！」

「なんことじやねえ――――！」

奇跡の4人同時ツツコミニが破裂。

しかも、ハモつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

午後11時・・

ここは、某市内の駅裏。

深夜には治安が悪くなることで有名であった。

不良などの高校生やチンピラがつらついていて危険である。

今日も、街中の不良が街中を牛耳っている。

「うーっ、トイレ！トイレ！」

今、トイレを探して走り回ってる、いかにもなラッパースタイルの不良少年、正井中広は強いて言つとスイカが好きな男の子であった。そんなわけで、彼は駅裏に居た。

「！」

すると、駅裏のベンチで座つてゐる男がいる。

半袖のコートの茶髪の青年（九乃助です）であった。

「うほ・・、普通の男・・」

と、正井少年は思つていた。

そう彼が、思つた瞬間。

九乃助は、少年を見つめながら足元から、多く貰つたスイカを出した。

「はっ！」

少年の目は、スイカに釘付けである。

そして、九乃助はスイカを出して言つた。

「食べないか？」

「いや、結構です・・」

少年は、断つた。

こうして、焼野原九乃助（23）好きなお菓子は、バームクーヘンの青年は、武田のせいで請け負つた借金500万と、スイカ8個（しかも、全部大玉）を背負つた。

・・・・・・・・・・・・・・

第28話「ボーカル・ラボ（前編）」

武田剛志（25）独身。好きな焼肉のメニューは、タン塩。
彼は高校教師。

授業も終わり、昼休み中、高校のトイレの便座に座り用を足していった。

「ふー」

スッキリした武田は、水を流した。
そして、ドアに手をかけた。

「あれ・・・」

なんと、ドアが押しても、引いても開かない。
鍵部分が壊れているようだ。

何度も、工夫したがドアは開かない。
他には誰も居ないようである。

これでは、外側から開けて貰うことも出来ない。
しかも、下手したら外に出られなくなるかもしちゃない・・・
そういう不安が、武田によぎつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ジリリリリリ・・

と、いきなり九乃助の部屋の電話が鳴った。
九乃助は受話器を握った。

「もしもし・・」

「おおー、九乃・・」

受話器から、トイレから電話をかけている武田の声がした。

ガシャン！

その声を聞いた瞬間。

有無を言わず、九乃助は受話器を置いた。

ジリリリリリ・・・

と、また九乃助の部屋の電話が鳴った。
嫌な顔をして、九乃助は受話器を握った。

「もしもし・・・」

「なんで切るんだよ！・・・」

受話器の声はもちろん、トイレから電話をかけている武田。
「お前の声聞くと、食事中のトイレ洗浄剤のCM見てる気分になる
の・・・」

「なんじや、その例え！・・・」

と訳のわからない例えを、ドス黒い声で九乃助は言った。

九乃助が、機嫌悪いのは以下のことがあったからである・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

数週間前・・・

『「みんなのサラ金』

貸し

500万円

武田剛志

保証人

焼野原九乃助』

消費者金融から、このような紙が来た。
それを受け取った九乃助は、固まつた。

なつた覚えの無い保証人になつていてる。

この500万は、九乃助を担保にした借金であつた。

こうして、九乃助は500万の呪縛を抱えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれから、収入が全部、消費者金融に・・・
と、九乃助は怨念を込めて言つた。

それに対して、武田は・・・

「元は、貴様が俺をだしにして500万取ろうとしたからだろうが
！」

逆ギレした。

正論では、あるが。

「くつ・・・」

そのため、九乃助は怯んだ。

実際に、そうだったんで文句は言えなかつた。

「解つたよ・・・助けてやるよ・・・」

九乃助は、折れることにした。

「さすがー、九ちゃんー」

と、武田は喜んでいる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それから、数分後・・・

高校の駐車場に、C R - Xが駐車した。

九乃助が現れたのである。

そして、例の武田が閉じ込められているトイレに居た。

「本当に開かないな・・・」

いろいろ、外側から試してみたが開かない。
いつそ壊そうと思ったが、弁償されるとマズイのでやめた。
しかも、授業の時間は迫つて来ている。

武田は焦った。

「早くしろ！！俺の授業があるんだよーー！」

「うるせえな！！待つてろ！！」

と外側から、九乃助は思いつきドアノブを握つた。

ボキッ！

「あつ・・・」

ドアノブが外れた。

思いつき握つたせいで・・・

二人の血の気が引いた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

二人は沈黙した。

「接着剤・・・持つてる？」

と、九乃助は聞いた。

「持つてねえよーーー！」

武田は、叫んだ。

ここから、出れる可能性が低くなつた・・・

「さうば……」

「待て、コラア……！」

九乃助は、この場から去つて行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

このことにより、武田はトイレの中で念仏を唱えるように独り言を言つていた。

それは、そろそろ始業の時間になる苟立ちからである。

「畜生……、九乃助め……」

この苟立ちを、なにかで癒そつと武田は考えた。

すると、なにか閃いた。

そして、再び、携帯を握った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「だからって、私に電話かけないで下さい……」

と、武田の携帯から、レビンの声がした。

トイレから、レビンの携帯に電話をしたのである。

「いいじゃない。それにしても、九乃助の野郎は最悪だよねー」と、武田は笑つて言つ。

「確かに、九乃助さんもヒドイんですけど……」

話題がトイレなのが嫌なので、レビンは話題を変えようと考えを巡らせた。

「大体、なんで、お一人は友人なんですか……」

と、何気なくレビンは言つた。

「……」

その言葉を聞いて、武田は口^ノもつた。

「えつ・・・

電話とはいえ、急に武田が沈黙したのに気づいた。まことに質問をしてしまったかと、焦った。

「それは・・・」

数秒の沈黙を止め、武田は口を開いた。

高校時代のことを思い出していた。

そして、レビンに高校時代のことを語り始める。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その武田の記憶を遡る事に、数年前。

時代は、ノストラダムスの大予言やら、なんやらで無駄な大騒ぎのあつた世相である。

だが、実際は、みな平然と夏を過ごしていた。

とあるローカル線。

その線の電車の中で、もたれるように椅子に座る少年がいた。彼は喧嘩での傷が目立つ、見るからに解る不良少年。さつきも喧嘩してきたような生傷と、青痣があつた。その少年こそ、高校1年生時代の焼野原九乃助自身。どこか、苛立ちのある田つき。

他人を近づけない生傷の数々。

見る人を怯えさせていた。

「けつ・・・

どこか不機嫌な感じであった。

別に、腹の立つ出来事にあつたわけでもない。

それでも、彼は意味もなく苛立つている。

たぶん、彼は寂しかったのだろう。

ガタン・・

各駅停車のため、電車は九乃助の家がある駅の3つ前の駅に止まつた。

九乃助の目の前の電車のドアが開くと、学ランの男が電車に入った。その学ランは、九乃助とは別の高校である。

その男は、筋肉質でガタイがいい。

「・・」

九乃助は、その男に目を向けた。

同じ不良の匂いを感じたのだ。

男は、九乃助の隣の席に座つた。

この男こそ、高校3年生であり、自分の高校の番長であつた不良界を牛耳つていた若き日の武田剛志である・・。

こうして、二人は出会つた。

第29話「ボーアズ・ブランボー（中編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

武田の記憶を遡る事に、数年前。

時代は、ノストラダムスの大予言やら、なんやりで無駄な大騒ぎのあつた世相である。

だが、実際は、みな平然と夏を過ごしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「武田さん！」

と、残暑ある高校の体育館裏にリーザントの生徒が走ってきた。体育館裏の跳び箱入れで、タバコを吸ってる武田がその声に反応した。

自分の舍弟が、尋常ではない様子だ。

「どうした・・・」

吸っていたタバコを床に押し付け、火を消した。

「マサオが、やられた・・・」

息を切らしながら、舍弟がそう言つ。

「なんだと・・・」

武田は立ち上がった。

マサオは、武田を慕つてゐる舍弟の少年。

彼は、その当時の新入生。

だが、彼は凶暴な性格であり、中学時代、自分の言つことを聞かなかつた奴は居なかつたと自慢話している。

実際に、そつであるかを証明するかのように、校内での振り舞い方

が最悪であった。

暴力沙汰も、一方的でいじめに近いやり方であり、自分の舍弟でありながらも、武田は彼を危惧していた。

だが、そんな彼が、今は病院にいる。

その理由を、マサオ本人から聞いた舍弟が話し始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ドン！

道端を歩いていたマサオの肩が、小柄な少年にぶつかった。

「痛あ・・・、おい、コラー！」

ぶつかった奴が、自分の高校と敵対してゐる他校であると思い、わざと、喧嘩を吹っかけた。

ちょうど、マサオはイラついていたのであった。

少年の襟首を掴んだ瞬間。

少年は、有無を言わずに拳をマサオの顔面に入れた。

そして、ここから先は、マサオは思い出したくなくなっていた。
それほどまでに、ぶちのめされた。

少年の特徴は、小柄な身長。

まるで、誰も受け入れようとしない表情。

そして、無数の傷と青あざ。

最後に、冷たすぎる田つき。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

以上のことを見た武田は、その男は捜した。
だが、それしき高校生を見ても、武田はピンと来なかつた。

その少年だったとしても、武田を見た瞬間、彼らは逃げて行つた。

日も暮れ、武田は駅に向かつた。

武田は定期を自動改札機に入れ、ホームに入つた。
ちょうどよく、電車が停止した。

ドアが開くと、武田は電車に入った。

ガタン!!

電車のドアが閉まつた。

「・・・！」

武田は、強烈に冷たい視線を感じた。
その電車のドアの目の前の席に、もたれるように椅子に座る少年が
いた。

さつき、喧嘩してきたような他人を近づけない生傷の数々。
そして、冷たすぎる目つき。

間違いない・・・。

こいつだ・・・。

と、武田は感じ取つた。

その少年こそ、焼野原九乃助。
マサオを、病院送りにした少年。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガタンゴトン・・・と、電車の音が聞こえる。

また、電車は時間通りに動き始めた。

車両内は、もう夏が終わる時期だったとはいえ空調が効いている。
二人の思い雰囲気のせいか、人は居なかつた。
あたりは、シーンとしている。

九乃助の他人を近づけない生傷の数々が、人を怯えさせていた。だが、武田は、なにも言わずに九乃助の近くに座っている。マサオをやつた犯人だと、黙認しながらも。

「…」

この一人には、緊張感が走っている。
隙を出したら、やられる。
そんな感じである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ガタン！

電車が駅に到着した。

この駅に着くまでの一人は、無言であった。
しかし、この二人の醸し出す空気の張り詰め感は異常である。

ドアが開いた。

「…」

二人同時に、開いたドアに向かつて歩いた。

九乃助も、武田もこの駅で降りるつもりなどない。
申し受けたように、二人は同時に駅から降りたのだ。

そして、電車のドアが閉まつた。

閉まつたと同時に、車内には二人の姿は消えた。

しばらくして、ガタンゴトン・・と、電車は時間通りに動き始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

無言で、二人は同じ場所に着いた。

そこは、降りた駅のトイレ。

用を足すつもりで、双方とも入ったのではない。

二人は喧嘩するつもりで、この落書きのひどいトイレに入った。
誰もいないトイレで、二人は向かい合つた。

無言状態であるのに、彼らは無意識で、この場所で向かい合つている。

それも、互いに拳の届く距離で。

「おい・・・」

その切羽詰った状況で、九乃助が口を開いた。

「高校の武田だな・・・」

「・・・」

九乃助は、武田のことを知っていた。

電車に入った瞬間から。

そのことに、武田は少し驚きがあった。

だから、武田は。

「俺も有名人なんだな・・・」

と、微笑を浮かべて言う。

九乃助の目つきは、凍りついたように武田を凝視していた。
その迫力に、武田一步も引かずに余裕を吹いている。
また、九乃助の口が開いた。

「貴様のところの舎弟を、ボコボコにした報復か？」
マサオのことである。

武田の目的は、仕返しであるのを九乃助は感じ取っていた。
だが、その一言は武田には説明の手間が省けたに過ぎない。
「わかつてゐるなら・・・、話が早いな・・・」
と、言った瞬間。

「！」

九乃助の左拳が、武田に向かつて飛んだ。
その左拳の不意打ちに近い、速さに武田は対応できなかつた。
だから、驚いている間に、その拳を腹部に受けた。
その衝撃音が、武田の腹部から鳴つた。

「なつー！」

だが、本当に驚いているのは、九乃助の方であつた。
拳には、今までにない感触が走る。

武田の腹筋が、異常に硬い。

それで、効いていないのが九乃助には解つた。

「ぐつー！」

思わず、打ち抜いた拳を構えなおした。
案の定、不意打ちが武田には効いてなどいない。

武田の方は。

「へつ・・・」

と、唾を吐いた。

並みの者だつたら氣絶する拳を喰らつて、さすがに痛みが来ない訳

はなかつた。

しかし、彼の内臓には、九乃助の拳の振動など響いてはない。

「中々・・・、痛いじゃないの・・・」

と、余裕はかました。

武田の筋肉の硬度は、尋常ではない。

夥しい喧嘩の数と、自らの肉体鍛錬により鍛えられた肉体である。
受けた拳、蹴り、木刀などの打撃が筋肉を強力に発達させていた。
すべて、武田の気迫から生まれた。

その気迫から、喧嘩では勝ち星を掴み、幾多の不良たちから支持を得ていた。

そして、筋肉が強烈に硬度を持った。

「・・・」

九乃助の冷たい目が、急に熱に帯びてきた。

彼の体中の血が巡ってきたのだ。

噂通りに強い武田の凄みに。

そして、両手に強力に力を込める。

武田も、それを感じ取った。

「そういうや、お前、名前は・・・」

と、急に武田は名前を聞いた。

「・・・」

それで、九乃助の警戒が薄れた。

バゴツ！

「うつ！！」

そこを突いて武田は、九乃助の腹を蹴った。

そして、勢いで後ろに吹っ飛んだ。

思いつきり、壁に背中をついた。

「ぐお・・・」

不意打ちを返されたのだ。

それで、少し呼吸が苦しくなっていた。

「ぐつ・・・、俺の・・・」

九乃助は、立ち上がり始めた。

呼吸が困難ながらに、喋っている。

武田は、壁に背をつけた九乃助の方に歩み寄る。

「俺の名前は・・・、焼野原九乃助・・・」

「！？」

あつという間に、呼吸を整えた九乃助は、自分の名前を名乗った。

九乃助も伊達ではない。

まさかの回復力に、武田も少し驚いた。

「・・」

「・・」

また、互いに睨み合う。

そして、互いに右手に力を込めた。

二人の考えは同じ。

こいつの顔に、右手をぶち込む。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時間は、一旦、また武田がトイレに閉じ籠つた所に戻る。

「凄いですね・・」

と、以上のことを、携帯から聞いたレビンは驚いていた。

武田の番長時代（多少、信じがたいが）のこと。

そして、九乃助の高校生時代が、そんな感じだったことに。

「九乃助は、あの頃・・」

武田は便座に座りつつ、また話し始めた。

「喧嘩で、寂しさ隠してたのかもな・・」

・・・・・・・・・・・・・・

第30話「ボーアズ・ブランボー（後編）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

武田の記憶を遡る事に、数年前。
時代は、ノストラダムスの大予言やら、なんやうで無駄な大騒ぎの
あつた世相である。

だが、実際は、みな平然と夏を過ごしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

誰もいないトイレで、九乃助と武田は向かい合つた。
それも、互いに拳の届く距離で。

「・・・」

また、互いに睨み合つ。

そして、互いに右手に力を込めた。

二人の考えは同じ。

こいつの顔に、右手をぶち込む。

だから、一人のやることは同じだった。

バコッ！――！

同時に、二人は互いの顔面に拳を入れた。

同時に、体制を崩して鼻血を噴き出す。

「ぐつ――武田あ――！」

後ろ足で踏みとどまつた九乃助が咆哮する。

「焼野原――！」

武田は姿勢を崩したが、互いに、また体をつんのめさせた。

一手動くのが早かつた九乃助は、武田の左膝を蹴る。

メリ・・と音がした。

「ベニス」

それによつて、武田の姿勢が崩れた。

左の足が踏ん張れない

更に崩れた体勢を力助に狙う

右の拳を
顔面に打せ込んた

バゴツ！！

〔二〇一〕

武田の口から血が吹いた。

効いている。

そして武田の体が街には

倒れようとした武田の両手が、九乃助の顔をキヤツチした。

八九

九乃助の体をキヤツチした武田は・・。

叫んだと、同時に自分の頭を大きく反らした。

九乃助は、両手から頭を離そうとしたが、両手の力が強くて離れら

れない。

武田の頭が、大きく腹筋運動して九乃助の顔面に目掛けてくる。

11

メキヨ・・

九乃助の顔面に、武田の頭突きがめり込んだ。鼻血が、噴水のように噴出した。

顔面にめり込んだ頭突きの痛みが、顔中に走る。しかも、その衝撃で意識が飛びそうだ。

「が・・」

頭突きが効いたせいで、後ろにフラフラとよろめいて、武田から体が離れた。

額を赤く染めた武田の目が血走っている。

その武田は、左拳を大きく振りかぶっている。

今の中止で意識が朦朧としている九乃助に目掛けて、左拳が飛んだ。

「うつ！・！」

対応が遅れた九乃助に避ける術はない。

バゴツ！・・・

左の拳が、九乃助の腹部に命中した。

「うぐお・・・」

内臓に衝撃が響いた。

口から、また血が出てきた。

駄目押しに、また武田の拳が九乃助の頬に目掛けて飛んできた。

「けつ！・！」

腹部と、顔面の痛みに耐えて、九乃助は大きく横にかわした。大きく武田の拳が空を切った。

「つ！・！」

拳の空振りで、武田の姿勢が崩れた。

その瞬間・・。

「ああああああああ！…………！」

九乃助が大きく咆哮する。

右拳に大きく力が籠る。

そして、前につんのめつた武田の顎を両掛けで、下に大きく振った。

ブン！――

空気が裂けるようにして鳴った。

拳が大きく上昇した。

「うつ――」

武田の顎に、拳が接近した。

ガゴッ――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そこから先は、武田は覚えてはいなかつた。

気づいたら、病院のベッドである。

確かに残るのは、顎の痛みと、九乃助を殴つたという感触。

そして、敗北感。

屈辱を受けた武田は、憎しみに体を支配された。

こうして、二人は出会つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時間は、武田がトイレに閉じ籠つた所に戻る。

「・・・」

と、以上のことを、携帯から聞いたレビンは黙り込んだ。

この話の段階では、現在の二人の関係にリンクさせられない。

「・・・」

武田は、黙り込んだ。
そして、脳裏には・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぐおおお・・・」

まるで、地獄の底から聞こえるような潰れきった声が聞こえる。
血まみれになつて倒れこんでいる高校時代の九乃助が、多くの不良
に囲まれている。

そして、長身の男と、一人の女の子の姿。
どこかの道路には、多くの血が流れている。
その光景を、震えてみている武田剛志本人。
そして、血のついた車・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おーい！」

脳裏に過去の映像が蘇つていた武田の耳に、九乃助の声が聞こえた。
携帯のレビンにも、そこ声が聞こえる。

「九乃助さんが、來たみたいですね」

「ああ・・・、すまないな・・・。こんな話して・・・」

回想するをやめた武田は、そう言った。

いつもとは、違う雰囲気である。

「いいえ・・・、話振つたのは、あたしですから・・・」

と、レビンは聞いてはいけないことを聞いた氣分で、罪悪感があつた。

「昔は、あいつも俺も殴り合つだけの・・・、バカつことだよ・・・」

「・・・」

昔の嫌な過去が蘇つたせいか、少し武田は暗くなっていた。

更にもう一聲、レビンは言つ。

「昔は、どうだつたか解りませんけど・・・私は、昔の」と含めても、今みたいな喧嘩してゐる武田さんと、九乃助さんが大好きです・・・」

携帯から、レビンの声が響いた。

「ああ・・・、そうだな・・・」

頭のてつぺんから、冷水をかけられたようだつた。

自分が可愛いと思つてゐる氣弱だつた少女の言葉に、急激に現実に戻つてこれたような気分だ。

昔の嫌な記憶よりも、明らかにトイレに閉じ込められでいると言つ情けない現実の方が美しく思つ。

武田は、内に籠りすぎた。

「やつぱ、レビンちゃんは、俺の嫁にしたいよ・・・

「それは、困ります・・・」

氣分を、外に向けるように武田は言つた。

バキーーーーン！――！

トイレのドアを、丸太が貫いて現れた。

「ぐあああああ――――――！」

丸太が、武田の腹に突つ込んだ。

「よつしゃーードアが開いた！！」

と丸太を突つ込んだ九乃助が、ガツッポーズをした。わざわざ、どこから丸太を持ってきたのである。それで、ドアと武田を貫いた。

「あいつのいうことが、嫌いだ・・・」

「否定しません・・・」

腹に丸太が突きつけられた武田が、そう言つた。
レビンも同意した。

ちなみに、武田は授業に間に合つた。

怪我を負いながら。

九乃助の借金は、ドアの弁償費で増えた。

・・・・・・・・・・・・・

第31話「フライ・ティー・ライオン」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

秋だと言つのに、未だに暑い。

残暑と言つものであるのだろうか。

九乃助の住むアパートも、この大方の残暑が襲つていて、しかし、九乃助は違うことで悩まされていた。

「金がない・・・」

増える借金の膨張で、困っている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

このアパートには、風呂がついていないので銭湯通いであった。

近くの古びた銭湯の女湯には、キエラとレビンがいた。人いなき銭湯の女湯からは、一人の声が聞こえていた。

「やめなよ・・・くすぐつたいから・・・」

と、レビンに背中を洗つてもらつてるキエラが言つ。

「いいじやないー」

「やめて・・・」

レビンは、構わずにキエラの細く色白に背中を泡立てていた。

「ひやっ！――」

首筋を触られたキエラが、声を出した。

くすぐつた過ぎて、思わず。

そのことに、レビンは笑つた。

「キエラちゃん、首筋弱いー」

また、わざとレビンは首筋を狙つた。

当然、キエラにはくすぐつたい。

「やめ・・・つて・・・

キエラの顔は赤くなつた。

「金がない・・・」

正座しながら、九乃助は貯金通帳を眺めている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

体が洗い終わったキエラは、シャワーで泡を洗い流した。

「そろそろ、上がるうか」

と、レビンは脱衣場に戻つた。

体には、バスタオルが巻いていた。

「・・・」

キエラは、急に、じつとレビンを眺め始めた。
凝視と言つていいほど、見つめている。

「・・・・・どうしたの・・・」

そのキエラの様子に、レビンは気づいた。

あまりにも、凝視するから。

「ど、どうしたの・・・」

さつきので、キエラは変な趣味に走つてしまつたかと、一瞬思った。
すると、キエラは口を開いた。

「太つたか?」

あつせりと、言つ。

レビンのバスタオルが落ちた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

レビン・ハチ公（一八）の二の一週間。

月

自宅のアパートにて。

「このケーキ、美味しいー」

とチヨコレートケーキを手づかみで、ミルクティーと一緒に頂く。

火

自宅のアパートの前にて。

「九乃助さん、げつそりしてますね・・」

アパートの前で鉢合わせした九乃助に言つ。

「ちゃんと、食べた方がいいですよー」

と、片手にアイスクリームの三段重ねを食べながら言つ。あの時の九乃助の目は、「言葉が出ない」を表現していた。

水

自宅のアパートにて。

煎餅をかじりながら、TVを眺める。

木

キエラ、豪、純太のメンバーでカラオケ。

その際、お菓子類の袋を開けまくる。

「青く眠るー、水の星にそつと・・
と、マイクを握る。

金

自宅のアパートにて、借りてきたビデオを見る。片手には、キャラメル・ポップコーンの大盛り。

「ク トロ大尉、渋いなあー」

土

九乃助、純太とボーリング場で、焼肉を賭けた激しいスコア争いを行う。

九乃助は、ガタ連発。

大きくスイングを取つた瞬間、ボールが手から離れなかつたために、純太は利き腕を捻挫。

レビンの一人勝ちで、焼肉をご馳走になる。

日

現在に至る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

銭湯から戻つたレビンは、過去のことを回想した。

この日々の過ごし方に、レビンは自宅で体育すわりになつてゐる。これは、追われてゐる身とはいえ、無職丸出しの日々ではないか。明らかに、自業自得である。

「いかん！ いかん！ これでは、太る一方じゃない！！」

と言つて、タンスからジャージを取り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、その翌日の夕方・・・

ジャージを着て、アパートから出た。

どうやら、ジョギングをするつもりのようである。
さすがに、これではマズイと彼女は感じたのであった。
ただでさえ、キホラに負けてるのだから。。。

「あつ、九乃助さん」

準備体操中に、アパートの前で、九乃助と鉢合せした。

「どこ行くんだよ・・・」

と、九乃助は言った。

さつき、いつもの居酒屋にシケで食べてきたので、やつれてはいなかつた。

「ジョギングですよ」

と言つて、レビンはアキレス腱を伸ばしている。

そいや、連載始まって以来だ。

レビンが走るのは。

「そういうわけで、レビン・ハチコ、行きますーー！」

と、レビンは言つて走り出した。

「黒服に、見つかるなよー」

九乃助は、そう言つておいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「見つかれました・・・」

と、アパートに横たわる九乃助の携帯から、レビンの声がした。

「アホか！－キサマア！－！」

携帯越しに、九乃助は叫んだ。

注意を破られた怒りで・・。

話を聞くに、いつも通らない裏道を走っていた。

そして、帰り道を探して途中で、黒服に見つかる。追いかかれられ、どこかの廃墟の2階に追い詰められ、今隠れている。

「助けてください・・

と、廃墟の隅っこでレビンは携帯を握っている。

「つたく・・、場所は？」

九乃助は携帯を握って、アパートのドアを開けた。だが、レビンが見つかるのは時間の問題であった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「観念するんですね・・。お嬢様・・

「・・」

と、黒服の一人が言づ。

黒服たちは、レビンを見つけた。

そして、捕獲するために壁際にレビンを向かわせた。

黒服の一人が、廃墟の壁に背を付けるレビンに迫る。

「・・」

しかし、彼女は落ち着いていた。
怯えては居ない。

むしろ、余裕さえあつた。

その様子に、黒服は違和感を感じている。

ブオオオオオ――――――――!

「――」

強烈なマフラー音が、聞こえた。

地面に響き渡るくらいの。

しかも、音が近い。

迫つてくる。

「なんだ！！」

黒服の一人が、その音がする方向を向いた。
その瞬間。

ブオオオオオ――――ン――――！

「うわあ！」

振り向くと、すぐそこに大型のバイクが現れた。

黒いオンロード・ボディのCBRの姿が、黒服たちの目の前に出現した。

ここは、2階である。

2階とはいえ、階段をバイクで駆け上がってきたのは、もちろん…。

「女一人に、てめーら、何人だ！シャバ憎が――！」

「九乃助さん――！」

焼野原九乃助である。

バイクで、突進するように黒服たちに走った。

容赦ないバイクの突撃が、有無を言わさずに黒服たちを散らせた。

随分、あっさりとした散り具合である。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「つたぐ・・・、気をつけろと言つたろが・・・」

そう言つて、レビンを後ろに乗せて、九乃助は廃墟から出た。

日が落ちて暗くなつた道路を、黒いCBRが走つている。
レビンは、両腕一杯に九乃助の背中を掴んでいる。

「だつて・・・

と、レビンは見た目によらず大きな九乃助の背中を感じつつ言った。
その背中は、温かく感じる。

「・・・」

九乃助の方は、背中に柔らかい物を感じた。
妙に、レビンが背中に抱きつくからだ。

それが、氣を散させていた。

「もう少し、俺から体離せ・・・」

氣が散るので、そう言った。

「？」

その意味を、レビンは気づいていない。
こうして、一人はアパートに帰つて行く。

・・・・・・・・・・・・・・・

第32話「ミサワ・ラブ」

・・・・・・・・・・・・

秋にはなり、残暑は去りつつある。

九乃助の住むアパートには、この夕方の涼しさがある。
しかし、九乃助は悩んでいた。

「金がない・・

増える借金の膨張で、困っている。

そういう咳きを、キエラ座つて聞いていた。

彼女は、九乃助の部屋にいる。

正座しながら、九乃助は貯金通帳を眺めている。

「だから、もう少し、お前もバイトかなんかで家計を助けてくれ・・

と、九乃助は言った。

もう数話前から経済的にピンチなので、キエラはバイトをやってみようと思う。

しかし、彼女は本当にバイト経験がない。

それは、ヤクザの娘と言つ生い立ちであるからだ。

・・・・・・・・・・

数日後・・

再び、九乃助の部屋にキエラがいる。

そして、茶の間で膝をついて座つていた。

「バイト先が、見つかた?」

と、横になつていた体を起こして、九乃助は驚いていた。

「うん」

なんと、キエラはバイト先を確保した。
バイトの経験がないのに。

「喫茶店のバイト」

と、キエラは言う。

「おおー、今度、「コーヒー飲みに行つて見るぜ」

九乃助は、家計が苦しいのを解つてバイトしてくれた彼女に感謝の念が耐えなかつた。

さすが、自分の（偽りの）いとこの妹である。

純太のような、パチンコ通いとは違うと頷いていた。

・・・・・・・・・

翌日の午後・・。

キエラのバイト先の住所を辿つて、九乃助、レビン、純太の3人が道を歩いている。

どうやら、この3人が歩いている道は隣町の商店街。2つの列を作つて、ずらりと飲食店、衣服店、本屋、ゲームセンターなどの店が立ち並んでいた。

「キエラちゃんが、バイトつて凄いですね」

と、レビンは商店街を目で眺めながら言った。

「ああ・・、どつかのパチンコ野郎と大違いだ」

と、九乃助は純太を睨んで言う。

純太の顔は、気まずそうだ。

「ああ、ここみたいですよ
と、急にレビンが指を示した。

指の先は、「メイド・イン・カフエ」と書かれている看板がある店だ。

かなり変わつてゐる名前の店名だ。

客層も、個性的な人々が多い。
特に、男性が多い感じである。

「変わった感じの店だの」

と、九乃助は店先を眺めて言つ。
店から出て行く客の男が、ジロジロとレビンを見ている。
その視線が、レビンには、なんだか解らない。

九乃助が、店のドアの前に立つた。

「よし、入るか」

そう言って、歩を進めた。

自動ドアが開く。

開いた瞬間・・。

九乃助の顔が凍つた。

「はあ？ なにしに来・・・た・・・」

ドアが開いた瞬間、メイド服のキエラが出てきた。

そのキエラは、九乃助の姿が見えた瞬間、言葉が詰まっていた。

店内は、メイド服の店員がたくさん。

しかも、店内には、どこかの電気街でみるような絵ばかりがある。

肝心のメイド服の店員の対応は・・。

「早く、決めなさいよー忙しいんだから」

「はい、どうぞ！」

など、とても接客に見えない態度が見受けられた。
なのに、客は嬉しそうである。

そう、ここは、今流行のメイド喫茶。

しかも、ただの喫茶ではない。

店員が、ツンツン、デレデレして喫茶。

そこが、キエラのバイト先・・。

状況を、理解した時の九乃助の顔には精気がなかつた。

キエラも、対応に困つていた。

バイト先に、身内が来ると困る物である。

急に、九乃助はキエラの手を握つた。

「ちょっと、表出ろ・・・」

そう言って、彼女を外に連れ出した。

・・・・・・・・・・・・

「　商店街だ・・・、そこに、お嬢さんと焼野原が居る・・・。あと、裏切り者一人・・・」

九乃助らの居る商店街の街路裏で、携帯を握つて、そつ語つている黒服の男が居た。

もちろん、その黒服は、例のレビンの追つ手。どうやら、見つかってしまったようだ。

・・・・・・・・・・・・

メイド服のキエラ、九乃助、レビン、純太の4人が店の外に居た。九乃助の表情は凍つっている。

純太は、食い入るように見ている。

レビンは、どこか悔しそうに眺めている。

「お前、今年で何歳・・・」

と、九乃助が呆れ気味で聞いた。

「20です・・・」

キエラは答えた。

実は、レビンより年上だった。

「このバイト始めたのは・・・、この道歩いてたら・・・、ここで働くかないか・・・。って言われて・・・」

と、この状況の説明をキエラは始めた。

どこか、必死そうである。

腕を組んでいる九乃助は、ため息をついた。

バイトについたきつかけが、一步間違えば、危ない道に入るような感じであるのが辛酸だと感じている。

別に、このバイト先自体を否定しているわけではない。

ただ、少し引いただけ・。

「わーったよ。とりあえず、コーヒー飲んでくか」と、九乃助は言った。

「ありがとう」

キエラは、笑顔で例を言つ。

純太の目線は、キエラのメイド姿に釘付けである。レビンも・。

・・・・・・・・・

店内に入ると、キエラは営業モードに入った。

とりあえず、3人は一つのテーブルに落ち着いた。

そして、メニュー表を眺めていた。

キエラが、この席の注文を承っている。

「早く決めよ・」

と、営業中のキエラは言つている。

「じゃあ、コーヒー・

「私も・」

「俺も」

と、3人はコーヒーを頼んだ。

あくまで、こうこう店の方針なので、3人はこの態度に口答え出来ない。

だが、純太はどこか嬉しそうであつた。

「えーっ、3人して、コーヒー? ばつかじやないー」

と言つて、キエラは注文を受けた。

「・・・」

九乃助の顔に、青筋が走つてゐる。

これが、接客業だと言うのかといふ顔である。レビンの方は、メイド服ばかり見てゐる。何故か、憧れでいる。

タツタツタツタツタツ！

急に、大人数の足音が聞こえた。
「！」

九乃助は、気配を感じた。
それは、店の外からである。
急に、立ち上がつた。

「！九乃助さん・・・」

立ち上がりつた九乃助に、レビンは驚いた。

「純太！レビンは、かくまつて逃げろ！！！」
そう叫び散らして、店の外まで走り出した。
レビン、純太は、なにがなんだか解らない。
だが、言われたとおりに動いた。

「九乃助、どうした？走り回んないでくんない？」
と、キエラが自動ドアの前に立つ九乃助に言つた。

「黒服どもが来た・・・」

自動ドアが、開いた。

「えつ！」

キエラは、驚いた。

自動ドアが開いた瞬間、九乃助は短距離走のように飛び出していつた。

・・・・・・・・・・・・

「やつぱりな・・」

と、飛び出した瞬間、九乃助はにやけた。

自動ドアの向こうには、黒服の追っ手の大人数が待っていた。

「焼野原だ！！やれ！！！」

そう黒服の一人が叫ぶ。

九乃助が飛び出した瞬間に、黒服の大人数が迫ってきた。
「こんなとこまで来るな！！」

九乃助は、走りながら黒服の一人の顔面に拳を入れた。
黒服の腹に膝を入れる。

その隣にいた者の腹部には裏拳を撃ち込む。
次々と黒服は倒れて行つた。

だが、人数が多い。

「つたあああ！！！」

九乃助は大きく空気を吸い込んで、右足をサッカーボールを蹴るようにして、黒服の腹部に目掛けた。

・・・・・・・・・・・・

その状況に、店内は大騒ぎになつていていた。

商店街の人々は、その騒ぎから離れるようにしている。
店には、レビン、純太は居なくなつていた。
裏口から、逃げたのである。

キエラは、店前の状況を見て動いた。

そして、自動ドアの方に向かっていた。

「黒服め・・」

キエラは、自分のスカートをめくつた。

彼女のスカートの下の太ももには、ホルダーが巻かれている。

ホルダーには、小型のナイフが・・・。

そして、彼女は店の前に出た。

・・・・・・・・・

バゴッ！！

九乃助の拳が、黒服の一人の顔面に入った。
血を吹いて、黒服が倒れた。

だが、まだ人数はいる。

「焼野原あああ！！！！！」

九乃助の後ろに、黒服が殴りかかるうとしている。
それに、気づいて振り向こうとした瞬間。

サクツ！！

黒服の殴りかかる右手から、血が吹いている。

「ぐあああ！！！！」

九乃助が、振り向いた瞬間に後ろの黒服が叫んだ。
その黒服の手には、アーミーナイフが。

目線をえると、キエラが手にナイフを携えている。

そして、さつきの黒服に目掛けて投げた。

「営業妨害だから・・・、消えてくんない・・・？」

と、キエラが黒服に向かって言つ。

「さすが、俺の妹分・・・」

九乃助は笑つて、そう言つた。

「裏切り者が！！！」

今度は、黒服たちはキエラの方に向かつて行く。

向かつてくる黒服を、九乃助は蹴り飛ばした。

キエラは、迫つてくる黒服から逃げながらナイフを投げつけた。照準は、手のひら。

次々と、キエラはナイフを投げつける。

九乃助は、黒服は次々と素手でほふつて行く。

そうしている内に、黒服たちは退いて行つた。

こうして、二人は黒服たちを退いた。

・・・・・・・・・・

翌日・・

キエラは、九乃助の部屋で泣いていた。

九乃助、純太は気まずそうな顔をしている。

彼女は、先日の件でバイトをクビになつたのだ。

あの件は、一応、正当防衛ではあるが・・。

メイド服での暴力行為が不味かつた・・。

運が悪かつたのだ・・。

九乃助は、ため息をついた。

・・・・・・・・・・

一方、レビンはパソコンのオーディションを見ている。

「うわっ、高い・・」

スクリーンには、メイド服が映っている。

あの件で、メイドに興味を持つてしまつたのだ・・。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

第33話「ディバック」

・・・・・・・・・・・・

S県K市の駅裏の夜は、荒れている。

深夜は、不良などの高校生やチンピラがつらついていて危険であった。

警察も投げやりになつていて、治安は安定しない。

だが、本当に投げやりになつていてる理由は、この街を牛耳る大きな組の存在があるからだ。

その組は、人數自体は多くはない。

だが、その組の人間は特殊技能を持っている。

その特殊技能とは、とても残忍な技能。

だから、恐怖して警察も抵抗できない。

今は、組は落ち着いているはずであつたが、一つの騒ぎが、彼らを動かし始めた。

その彼らとは、「信代会」と言つた・。

・・・・・・・・・・

商店街から、離れた場所に大きな庭園のある和式の木造築の屋敷がある。

その屋敷は、とても大きく竹垣で囲まれている。

しそとしが、音を鳴らしていた。

そう、ここは「信代会」の本拠地である。

そのしそとしが、響く距離の座敷に数人の人影が見えた。

彼は、信代会の者であるのだろうか。

その数人は、座敷の置の上に、各自自由な姿勢でいる。

座敷の中で、一人だけ正座で座っている者が居た。

正座で居るのは、袴姿の男。

どこか、気品漂う雰囲気がある。

そして、彼は口を開いた。

「たつた一人に、二人も・・・」

と、言つた。

彼は、写真を眺めている。

写真を眺めている眼光は、激しく鋭い。

「だから、その写真の野郎をぶちのめせばいいんだろ・・・

と、座敷に横たわる一人が言つた。

その声の方向に、袴の男が目を向ける。

「小物探偵と、裏切り者のお嬢さんもね・・・

と、口元に笑みを浮かべて話した。

それを、聞いて他のメンバーもにやけた。

男が握っている写真には、九乃助の顔が写っている・・・

「ふあああ・・・

と、大きくあくびして、その座敷から立ち上がる者がいる。
そして、背伸びをした。

座敷から立ち上がった者は、スーツでネクタイをしている。
長い黒髪の男であった。

「ねえ、その写真くれない・・・

と、袴の男の方に指を指した。

そして、その黒髪の男の口元はにやけている。

・・・・・・・・・・・・

日は照つている。

秋という感じにはなつていた。

公園の木々も変化を見せている。

キエラは、公園のベンチに腰をかけている。求人誌を眺めながら、ため息をついていた。先日の失敗を反省しつつ、新しいバイト先を探している。

コシコシコシ・・

すると、足音が聞こえてきた。

その足音の方に、目を向けてみた。

「！！」

視線の先には、座敷にいたネクタイをしている長い黒髪の男であった。

キエラは、悪寒を感じた。
自分のスカートをめくつた。

太ももには、ホルダーが巻かれている。

ホルダーには、小型のナイフを視線の方に投げつけた。

ツター！

だが、男を外れ、ナイフは地面に突き刺さった。
いや、外れたのではなく、男が避けた。

そして、キエラは眼光鋭くして、男を睨みつけた。

「桐谷秀一・・

と、睨んで言つ。

それが、この男の名前らしい。

「キエラお嬢様・・、お久しぶりです・・

と、桐谷が言葉を返した。

「人は、顔見知りらしい。」

「裏切りなどして・・・、どういづ心境でしょつか・・・、お嬢さん・・・」

「裏切るも何も、私は、元々あの家の空気が嫌いだった！！」

桐谷が見下しつつ言つたことに、キエラが、そう言い返す。

「ああー、はいはい、そうですか・・。お嬢さん、警告しておきま
すが・・・」

また、桐谷が話出した。

「私の目の前から、消えるか、失せろ！！」

ホルダーから、ナイフを抜き取つて投げつけてきた。

桐谷は、また飛んできたナイフを後ろに跳ねて避けた。

「焼野原の命は、ない物と思つてください。本格的に、信代会は動
き出しました・・・」

そう桐谷は言つた。

キエラの背筋が凍る。

「黙れ――――――！」

また、咆哮してナイフを投げつけた。

「ふん・・・」

ナイフは地面に突き刺さつた。

次の瞬間、桐谷の姿は消えていた。
まるで、幽霊のように。

キエラの手は震えている。

「桐谷が動いた・・・」

そう呟いた。

木々から、葉が落ちた。

・・・・・

その頃、九乃助は・・。

「バームクーヘン、うめー」

自宅のアパートで、バームクーヘンを食べていた。

・・・・・

第34話「この夜が終わる前に・・・（前編）」

桐谷秀一が、キエラの田の前に現れてから、そんなに時間は過ぎてはいない。

桐谷の姿を見たキエラは、恐怖していた。

そして、自分の住むアパートの方に走っていく。

彼の言った「焼野原の命はない物と憑つて下さい」の一言が、とても恐怖でしかなかった。

・・・・・・・・・・・・

ジャラジャラ・・

と、銀色の玉が流れるように音を出していた。

この室内は、タバコ臭く、中年男性が多く見受けられる。

そう、ここはパチンコ屋である。

「きたーー！」

そこに、年齢を詐称して、パチンコ台に座る少年がいた。パチンコのスロットは、リーチを示している。

彼の持ち玉は、ないに等しいくらいだ。

「あーーー！」

リーチが掛かっていたのに、結局、ならなかつた。

「くそーー！」

持ち玉が、全部消えてしまつて、彼は席から立つた。

その彼の名前は、九乃助の助手の上木純太である・・。

最近、パチンコにハマってしまったという駄目な少年・・。

そんな彼を、見ている男がいた。

パチンコ屋のガラス越しにである。

男は、いつもの追っ手である黒いスーツの男たち数人を連れていた。

その者は、スーツでネクタイをしている。

長い黒髪の男。

そう、桐谷秀一であつた。

・・・・・

「はあ・・・はあ・・・」

大きく呼吸を乱して、キエラがアパートに着いた。

キエラの心配する九乃助は、アパートの前で洗車をしていた。

「ん・・・どないした・・・」

その尋常ではない様子に、九乃助は気づきながら、洗車を行つている。

銃刀法違反で、警察にでも追われたかと、九乃助は思つた。

キエラは呼吸を戻そと、大きく空気を吸つてゐる。

「レビンー、水持つてこーい！！」

と、九乃助は、部屋にいるレビンに指示をした。

「はーい」

それに答えるように、レビンの声が返つてきた。

「九乃助！！」

急に、キエラが呼吸を戻して、洗車用のブラシを持った九乃助に迫つた。

いきなり、息を切らして來たかと思えば、急にアップになつて迫つてきたりと大忙しだ。

「なんだ・・・いきなり・・・」

九乃助は、手に持つていたブラシを置いた。

再び、キエラは呼吸を落ち着かせたる。

そして、口を開いた。

「信代会が、本格的に動いた・・・」

その一言を聞いた瞬間、九乃助の眼光が鋭くなつた。同時に、全身の血液が沸騰した。

レビンは、駆け足でアパートの階段を降りてくる。

「・・?」

言われたとおりに、水を持ってきたレビンは、今の状況は理解しにくかつた。

・・・・・・・・・

「あー！だいぶ・・、使つちまつたよ・・」

と、パチンコ屋から出て、自分の財布を眺めていた。この所、九乃助が借金返済に必死なのにも関わらずに、パチンコに貢いでいたのだ。

「九乃助さんになんて、言い訳しようか・・そななことを、考えていた時。

「上木純太君だね・・」

純太の前方から、爽やかな声が聞こえた。

「・・」

その方向に、純太は顔を向けた。

顔を向けた方向には、スーツでネクタイをしている長い黒髪の男。

桐谷秀一が、純太の目の前に居た。

「・・?」

純太には、彼が誰だか解らない。

だが、桐谷には、純太の正体を知っている。

桐谷の信代会の情報網で、純太は、九乃助の仲間であるのが解つて

いる。

だから、桐谷は純太の目の前に居た。
そして、目の前に現れた理由は・・。

バゴッ！！

純太の後頭部に、衝撃が走った。

殴られたような痛みが、頭脳に走る。

「ぐつ！！」

桐谷の方を向いていた純太の首筋を後ろから、さっきから、桐谷に纏わりついていた黒服の男の一人が殴った。

その衝撃で、純太は気を失う。
体が、前方へと倒れこんだ。

「ふつ・・」

桐谷が、それを見て口元がにやけた。

そして、地面に倒れこむ純太の体を黒服たちが、荷物を運ぶように持ち上げた。

パチンコ屋の前で、白昼堂々と純太に暴行を加えた桐谷の目的は・・。

・・・・・

再び、場所はアパートに戻る。

洗車を、途中で止めて、九乃助は自分の部屋に戻った。

部屋には、レビン、キエラがいた。

しかし、レビンは信代会を知らない。

同時に、キエラが信代会のボスの娘であることも・・。

「信代会が・・、俺の命をね・・」

声のトーンを低くして、九乃助が言つ。

そして、片手には、バームクーヘン。

「ああ・・

戸惑いつつ、キエラが返事をした。

「信代会が、九乃助さんの命を・・

キエラの正体以外の信代会のことを聞いたレビンは、信代会が、「九乃助の命を狙う」ということを言って不安になっていた。

キエラ本人の正体については、九乃助がキエラに口止めしていた。今更になつて、キエラが信代会の娘だの、どうでも良くなっている。

「九乃助さん・・、ごめんなさい・・」

と、レビンは謝った。

彼女を捕獲するのが、信代会の真の目的であり、彼女が九乃助の元に逃げ込んだことが発端だからだ。

そういう彼女を、九乃助は片手、バームクーヘンで見つめた。

「あたしのせいで・・」

謝るレビンの目から、涙が出てきた。

しかし、彼女には、どうすることも出来ない。

自分の身内を話すことも、彼女にとつては難しかつた。

それに、自分が捕まると、また悪夢に出てくるような日々が襲つてきるのが怖かつた。

しかし、だからって、九乃助の命を危険に晒すのは、もっと、彼女には怖いことだ。

「気にするな・・。どちらにしろ、俺は「信代会」の恨みを買ったんだ・・

そう九乃助が言った。

「でも・・

と、レビンは目に涙を滲ませて言ひ。

そんな彼女の頬に、九乃助は、バームクーヘン持つてない方の手で当てた。

「お前が居なくなるくらいなら、信代会を潰す・・

そう彼女に言つた。

レビンの頬に当たられた九乃助の手は、暖かかった。

「あんな奴らで、俺は死なん……」

そう、九乃助は力強く言つ。

「九乃助さん……」

ボロボロと、レビンの目からは涙が流れた。

そう言つてくれる九乃助が、とても嬉しかつた。

「九乃助……」

その二人の会話を、キエラは見ていた。

随分、二人とも、これだけ、仲良くなつた物だと思っている。

同時に、さつきからの台詞が、九乃助はバームクーへン食べながら
だつたで、複雑な心境だつた。

「お前も、食べるか？」

と、九乃助は、そう言つて泣いてるレビンに、バームクーへンを差し出した。

レビンは、そういう心境じゃない。

ジリリリリリ……

と、いきなり電話が鳴つた。

九乃助が、バームクーへンを食べている間に、キエラは受話器を握つた。

「もしもし……」

「あれ……、お嬢さんですか……」

その受話器からの声に、キエラは戦慄が走つた。
この声は、桐谷秀一。

・・・・・・・・・・・・

現在、桐谷秀一は、黒いベンツに乗っている。
中には、黒い服の男たち。

そして、ロープで結ばれた気を失つた純太。
桐谷の片手には、純太の携帯が握られている。
その携帯から、掛けてきたのであつた。

「焼野原九乃助に代わつてもらえません?」

桐谷が、ベンツの窓の向こうを眺めながら言った。

・・・・・・・・・・

第35話「この夜が終わる前に・・（後編）」

・・・・・・・・・・・・

ブオオーーン!!

九乃助は、アパートの前で愛車CR-Xのエンジンを始動させた。マフラーから、排気ガスが噴いている。

車を始動させたのは、桐谷秀一からの電話があつたから。

向こうは、純太を拉致したことを告げた。

そして、特定の場所と時間まで、レビンを連れて来いとのことである。

つまりは、人質の純太と、桐谷の目的であるレビンとの交換条件であつた。

さもないと、純太の命は・・。

といひ、向こうは人質交換という手段まで使い始めた。

エンジンが動き出したCR-Xに、九乃助とレビンは乗った。

キエラは、その二人の車に乗り込む姿をアパートから見ている。レビンは、自分が原因で事が起きたと思いつめている。

しかし、九乃助は、純太が捕まつた理由が、パチンコ屋に居たからという理由だつたで、半ば怒っていた・・。

怒りながら、車のクラッチを踏んで、トップにギアが入った。徐々にクラッチを離して、車体が動き始めた。

その走つていくCR-Xの姿を、キエラは見送った。

キエラは、九乃助には、後から行くと伝えていた。

・・・・・・・・・・・・

桐谷の姿は、自らが指定した場所である都会の海沿いの倉庫に居た。そこには、ベンツと多くの黒服達。

ベンツには、猿ぐつわと縄で縛られた純太の姿である。

気を取り戻した純太は、必死にあがいていた。

だが、縛られ動きが封じられている。

そして、自分の無力感を感じていた。

気づくと、純太の目には悔しさで涙が浮かんでいた。

・・・・・

時間は、もう深夜帯に近かつたせいか、比較的に道路は空いていた。その空いている道路を、CR-Xは駆けている。

「なあ・・

急に、九乃助は声を出した。

視線は、フロントガラス越しの道を見つめる。

片手で、ハンドルを握る九乃助の方にレビンは向いた。

「はい・・

その声に、窓際で考え方をしていた彼女は応答する。「純太のこと、気にしてるのか・・

そう九乃助は言った。

「はい・・

「アイツの場合は、自業自得だから気にするな・・

パチンコ通いの純太のこと、九乃助の額に青筋が立っていた。

しかし、それでも助けに行くのは、彼にとつては、大切な弟分だからだ。

それは、レビンにも解っている。

「それと、キエラの話が本当なら、さつき言つたとおりに、お前にも頑張つてもらうからな・・

」

と、話を切り替えた。

車に乗る前に、なにか打ち合わせをしてきたようだ。

「解つてます・・・」

決心したように、レビンは返事をした。

「怪我すんなよ・・・」

「大丈夫です。九乃助さんこそ・・・」

氣を使う九乃助の言葉に、レビンは頷きながら言つ。

「あんな奴らに、怪我するわけあるかい」

と、冗談交じりで答えた。

「そうですね・・・ふふつ」

その言葉に、レビンは笑う。

彼女の思いつめた顔は、少しだけ和らいでいた。

「あつたりめえだ。ははっ」

九乃助も、つられて笑う。

そして、具体的には言えないが、彼女は変わったと九乃助は思った。
初めて出会った時よりも、九乃助には彼女が可愛く思えた。

・・・・・・・・・

九乃助の目に、例の場所の標識が見えた。

約束どおりに、特定の時間に九乃助は着くことが出来たのだ。

例の倉庫に着いた頃には、もう夜は深まり深夜である。

倉庫に着くと、黒服たちの姿が見えた。

奴らが、純太を捕獲したのだと思うと、九乃助の目つきは鋭くなつた。

車に黒服が近づいた。

「降りろ・・・」

そう支持を受け、九乃助とレビンは車を降りる。

降りた瞬間、多くの黒服たちが囲んできた。

これは、逃げられないようにする配慮だ。

「純太は・・・」

九乃助は黒服に向かつて言ひつ。

「こつちに來い！！」

乱暴に、九乃助とレビンは背中を押され、倉庫の方へ歩かされた。どうやら、倉庫に純太と桐谷が居る。

・・・・・・・・・・

倉庫の中まで、九乃助とレビンは歩かされた。

そして、薄暗くなつた古く鏽びれた倉庫の中で、人の姿が見えた。倉庫に居るのは、長髪の黒いスース。

信代会、桐谷秀一である。

桐谷は、口元に笑みを浮かべている。

その桐谷の横には、ロープで縛られ横たわる純太の姿が見えた。

「あなたが、焼野原さんと、レビン嬢で・・・」

と、黒服たちに囲まれた九乃助とレビンに、声を掛けた。

純太は、声にならない声を出している。

「そうだ・・・。てめーが、桐谷とか言つのか・・・

「はい・・・

九乃助の強めの口調を、柔らかめに桐谷は返した。

「純太を放せ・・・」

身動きの取れない純太に目をやつて、九乃助は言った。

「お約束のレビン嬢を・・・」

桐谷は、条件であるレビンを手招きした。

そして、桐谷の手は懐に入つている。

「すまん・・・、レビン・・・」

「いいえ・・・、気にしないで下さい・・・

言われた通りに、九乃助は、レビンを桐谷の方へ歩かせた。

それを見た純太は、更に足搔いた。

彼には、かなり不本意な取引だったのだ。
しかし、もう取引は終わっていた。

レビンは、桐谷の居る位置に着いた。

そして、純太は乱暴な形で、黒服から九乃助の方に投げられた。
このような形で、取引は終了した。

「ふふふ・・

目的であるレビンの捕獲に、桐谷は終了したのだった。
なのに、彼の右手は懐に、まだある。
まるで、なにかを隠しているように・・。

「あつ・・、そうだつた」

桐谷は、急に声を出した。

「・・・

その妙な声に、九乃助は気をとられた。
すると、桐谷は懐から右手を出した。
なにかを握つて・・。
その時・・。

パーン!!

「！」

レビンの耳を打つ音が、近くで鳴つた。

その音を放つたのは、桐谷。

その桐谷の右手にあるのは・・。

「ぐつ・・・

九乃助は、胸を押された。

胸を押さえる手から血が溢れ出している。

それも、大量の・・。

純太は、目を疑う。

桐谷の手には、拳銃が・・・。

その拳銃が九乃助の胸を撃ち抜いた。

「てめえ・・・」

胸から血が溢れるの抑えながら、九乃助は力を絞るように言葉を吐く。

九乃助は、胸を押さえて前傾姿勢で倒れた。

「ぐつ・・・」

空気が抜けるように、声が出た。

そして、そのまま動かない。

「いやああああ！！！」

レビンは、その信じがたい状況に叫んだ。

その叫び散らす彼女の横で、桐谷は笑っている。

純太は、口が塞がれて声が出せない。

叫び散らしたかったのに、それは出来なかつた。

「はははは！！！悪いね、焼野原さん！！信代会侮辱を償つてもらつたよ！！！」

と、大声で笑いつつ、桐谷は言った。

このような惨忍なことが、出来るのが桐谷という男の本性。それを、キエラは恐れていた。

その通りに、九乃助は胸を撃ち抜かれたのだった。

レビンは、錯乱している。

純太は、目の前の現実に泣くしか出来なかつた。

二人に、大粒の涙が溢れている。

しかし、九乃助は倒れこんだまま動かない。

桐谷は、その二人の様子に構わずに、懷に、また銃を入れた。

「九乃助の遺体は、あんたらで片付けてくれ・・・」

そう捨て去るよう言い、錯乱して泣くレビンの腕を掴んで車の方へ歩いた。

九乃助は、純太と同じように、倉庫に倒れている。・。

・・・・・・・・・・・・

「ははつ・・」

笑いながら、倉庫の前に置いていた運転手の居ないベンツの後ろに、桐谷は乗っている。

無理矢理、レビンも車の中に連れ込まれていた。レビンは、錯乱して桐谷の手から離れようと、車の中で足搔いている。

しかし、無駄だった。

だが、しばらくしても来ない黒服たちに、桐谷は少し苛立つ。だが、そう思つてゐる矢先に倉庫の暗闇から、黒服一人が現れた。他にも、大勢居た黒服たちは後の処置を行つてゐるようである。

「すいません・・、いますぐ車を出します・・」

と、深く帽子を被つた黒服の一人がドアを開け運転席に座つた。もう一人は、助手席に座つた。

レビンが錯乱しつつも、ベンツは動き出した。

「場所は解つてるな・・」

と、桐谷が言う。

それに、黒服が頷く。

・・・・・・・・・・・・

「・・・」

桐谷は、ベンツから降りた。

すると、自分が言つてゐた場所とは違うのに居ると気づいた。ベンツは、誰も居ない高速度道路の橋の下だ。

なにがあつたのか、爆破のある所だ。

「おい！－場所が違うぞ！－！」

と、運転手の黒服に桐谷は叫んだ。

気のせいか、錯乱してたレビンは、いつの間にか落ち着いている。なにやら雰囲気が、おかしい。

桐谷は、この違和感を妙に感じた。

すると、運転席の黒服が車から出てきた。

「いいや・・・、合ひてますよ・・・。貴様の地獄めぐり特設会場は、こいだ・・・」

「・・・！」

桐谷は、違和感の正体に気づいた。

その黒服の声で・・・。

黒服は、帽子を脱いだ。

「嘘だ・・・」

桐谷は驚いた。

帽子を脱いだ黒服の正体は・・・。

「やつと、気づいたか・・・。俺は貴様に、うつかりと胸を撃たれたけど、死んでない焼野原九乃助ちやんだ・・・」

焼野原九乃助であった。

そのことに、桐谷は驚いた。

「嘘だ！－貴様は！－！」

九乃助は、帽子を脱いで桐谷に迫る。

「桐谷秀一は、銃の使いだとキエラから聞いた・・・。だから、血のり付きの防弾チョッキで、いつ撃たれても良いようにしたのよ・・・と、黒いスーツと一緒に防弾チョッキを脱ぎながら、九乃助は状況を説明し始めた。

その間、桐谷は、懐の銃を抜こうとした。

「げつ！」

だが、懷に銃がない。

「銃は、私が持つてますよ」

と、レビンが桐谷の銃を持つて、車から降りてきた。

実は、錯乱したように見せかけて、銃を奪っていたのだ。

レビンは、力丸助が防弾チョッキを着てゐるのに、どうぐの前に知らず

いた
そこで、寅次郎がつらを奪つた。

遅れて、同じく黒服姿で純太が車から出てきた。

「おまえの仕事は、おまえの仕事だ。」

二十一

九乃助が撃たれて、桐谷が去った後。。。

死んだように見せかけていた九乃助は、黒服全員片付けた。
そして、純太を解放して、黒服の衣装を奪い車を運転し、この場所

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

銃使いの桐谷から、銃を奪う作戦である。

ここに、来る前から練つてあつたのだ。

「さて・・・覚悟できてるか・・・」

桐谷に、九乃助は近づいた。

そして、拳がゴキゴキ鳴る。

武器のない桐谷は、震えている。

そのまま、叫んで桐谷は氣を失つた。

どうやら、彼の強みは、今はレビンの手にある拳銃であつた。
だから、素手では、なにも出来ない。

だから、氣を失うしかなかつた。

その姿を見て、九乃助は・・・。

「誰が、てめーみたいな殴つても解らないような奴を殴るか・・・
そう言い去つた。

「九乃助さん！」

レビンは、銃を捨てて、九乃助の方に走つた。

嬉しかつたのだ、何事もなく終われて。

「良かった、無事で・・・」

そう言って、九乃助に抱きついた。

「言つたろ・・・あんな奴らじや、俺は死なないって・・・」

そう言つて、自分の顔の下にある彼女の頭を撫でた。
こうして、二人は桐谷という危機を乗り越えたのだ。

純太は、足音を立てないようにその場から退こうとしていた。
逃げ出そうとした理由は、今回の原因を作つたことで・・・。

「純太・・・お前は殴つても解る奴だから、今から殴る・・・
九乃助は、そう言い放つて純太の方に向かう。

純太は、脂汗が沸いてきた。

数分後、絶叫が聞こえた。

こつして、純太のパチンコ癖は治つたそくな・・・。

・・・・・・・・・・・・

第36話「君が待つていいのなら・・・

・・・・・・・・・・・・・

商店街から、離れた場所に大きな庭園のある和式の木造築の屋敷がある。

ここは「信代会」の本拠地。

座敷には、数人の人影が見えた。

その数人は、座敷の畳の上に、各自自由な姿勢でいる。

座敷の中で、一人だけ正座で座っている者が居た。

正座で居るのは、袴姿の男。

そして、彼は口を開いた。

「桐谷が、帰つて来ない・・・

静かに、語つた。

だが、彼の内に秘めている考えは、この座敷に居る者すべてには解つていて。

「焼野原・・・、九乃助・・・

感情をむき出すように、男は言った。

その言葉に、他の者たちは頷く。

男は、正座を崩して立ち上がった。

彼らの執念は、計り知れない・・・。

・・・・・・・・・・・・

この上なく、とてもなく高い高層ビルの上階の個室がある。

そこに座る人物は、よほどの財力があると見えた。

この最上階の個室に、レビンの捕獲を命じている中年男性がいた。

そして、最上階の窓から景色を眺めている。

中年男性の横には、黒服がいた。

黒服は、怯えている様子であった。

中年男性は、持っていたワインを口元に近づける。

すると、同時に口元が動いた。

「たつた一人のチンピラに、信代会も遊ばれてるとはな・・・」

「信代会も当てに出来ないとなると・・・、どうするか・・・」
中年男性は、口元に近づけたワインを飲み干すと、グラスを手から離した。

バリン・・

グラスは、床に当たつて砕けた。

細かい破片が、飛び散る。

・・・・・・・・・・

夜も深まつた午後の10時。

何所にでもあるコンビニエンスストア。

その駐車所に、CR-Xが。

そして、店内には、九乃助の姿が見えた。

しばらくすると、二人は買い物袋を持って出てきた。

袋の中には、酒、ジュース、お菓子で一杯である。

「まったく、俺が雑用ですかい・・

と、豪は、CR-Xに荷物を積みながら愚痴つていて

九乃助も、愛車の後部座席に荷物を積んでいた。

「仕方ないだろ・・・、じゃんけんで負けんたんだから・・

と、九乃助がそう言いつつ、二人は車に乗り込んだ。

「どうか、どこが飲み屋に行つた方が安上がりですよ・・・」
豪が、そう言つ。

「予約取れなかつたんだから、仕方ないだろ・・・」

そう言い返した。

どうやら、これから飲み会をやるようである。

この飲み会は、九乃助の借金返済記念。

やつと、彼は返済に成功したのである。

その喜びの感謝祭であつた。

・・・・・・・・・

アパートの九乃助の部屋では、着々と準備が進んでいた。
準備と言つても、大したことしないので、すぐに終わつた。

部屋のテーブルには、レビン、純太、武田、キエラ、桐谷の姿が見える。

桐谷とは、もちろん、先日の銃使いの信代会の桐谷である。
信代会には、任務失敗での恥と、九乃助、キエラの脅しで戻れない
ので、彼はおとなしく服従の道しかなかつた。
だから、同じテーブルに居る。

「テーブル拭け・・・

キエラは、桐谷をこき使つた。

その彼女に、同調するように、子犬のジダンも吼える。

「はい・・・

嫌々、桐谷は従う。

いつか、逆襲してやるひつと思つてはいるが、彼の武器である銃は破壊された。

よつて、もう逃げ場はない。

それに逃げ出さないには、もう一つ理由がある。

「別に、私がやるから・・・」

と、レビンは氣を使つよつに言つ。

その言葉に、桐谷の心は、少し救われる。

「いいよ、別にこんな奴・・・

と、キエラは言い返した。

「ああ・・・僕が拭きますよ・・・」

「そう?」

桐谷は、そう言つてテーブルを拭き始める。

何故か、彼にも解らなかつたが、レビンを捕獲するといつ目的が薄れていた。

理由は解らないが、彼女に危害を加えたくないといつ思つたが、桐谷に芽生えた。

たぶん、かつて牙を剥いた豪、キエラも同じ氣持ちであるのだと思つてゐる。

武田と、純太はテレビを見ながら、二人して語り合つていた。二人が語り合つているの内容は・・・。

「レビンちゃんは、酒が弱いのは解つた・・・だが、キエラを酔わすのは難しそうだ・・・」

と、武田はボソボソ声で言つた。

「とりあえず、篤元殿にも協力を求めましょつ・・・」

そう純太が言うと・・・。

「あの男は、使い物にならん!!--」

武田は、そう言い捨てた。

この一人は、工口計画を立てている。

この前のリベンジであつた・・・。

武田の足元には、ジダンが近づいている。

もちろん、この計画は、薄々気づかれてはいるのに、気づいてない。

・・・・・

アパートまでの道のりを、荷物を積んだCR-Xが駆けていた。
運転席の九乃助は、片手でハンドルを動かしていた。

「信代会ですか・・」

と、豪は助手席に体重を預けて言つ。

「ああ

「レビンちゃん捕獲も、そろそろ本格的になつて来た・・。ってことですかい・・」

そう豪は、窓の景色を眺めて言つた。

彼は彼なりに、心配していた。

彼女を失いたくない気持ちは、皆同じである。

だから、信代会について対策を考えようとしていた。

「あいつらが本気になろうが、関係ない・・」

ハンドルを切りつつ、九乃助は言つ。

その言葉に頬もしさを感じる。

「そういうや、レビンちゃんが、こっち来てから・・、まだ3ヶ月しか経つてないんですね・・」

と、豪は背伸びをして言つ。

やたら、この3ヶ月が長く思える。

だが、もう3ヶ月が経つたと九乃助には思えた。

訳も解らず追われている少女が来てからだ、九乃助の毎日が長くなつたのは。

そして、短くも思えたのは。

毎日、純太少年と平凡に依頼を受け、適当に飯を食い寝の生活。

だが、それが平凡じゃなくなつたのも、レビンが現れたから。

そして、隣の助手席に居る豪と殴りあつたが、今はこうして同じ車に居る。

キエラには、ナイフを投げつけられたが、今では、いい九乃助とレ

ビンの妹分だ。

だが、キエラはレビンより年上・・。

桐谷については、今後、どうなるか解らないが、今はキエラに扱き使われている。

武田、純太も相変わらず。

そして、子犬のジダンも。

この調子が續けばいいと、九乃助は願う。

・・・・・

しばらくして、アパートに着いた。

買い物袋も持つて、一人は車を降りる。

その二人が来たのを、アパートの窓からレビンは気づく。

「あっ、九乃助さん、豪君が来たわよ」

と、声を出した。

それを、出迎えるように、純太、武田、キエラ、桐谷は動き出した。

二人は、アパートのドアに着いた。

「重つ・・

と、豪は愚痴つた。

「情けない奴・・

「ああん！・！」

ボソッと言つた、九乃助の一言に豪は反応した。

アパートのドアノブを握つた。

そして、ドアを開けた。

「ただいま」

九乃助は、そう言って部屋に上がつた。

ドアを開けた向こうには、レビンが居る。

「お帰りなさい」

そう、レビンは笑顔で返した。

これから、お菓子の袋、酒の缶を開け、飲み会が始まる。。。

・・・・・・・・

第36話「君が待つていいなら・・・」（後書き）

今回で、一区切り付けさせてもらいました。
しばらく、充電とさせて頂きます。

連載の再会は、もしかしたら、意外に、すぐかもしれませんし、結構かかるかもしれません・・・。

ですが、構想と書きたいネタをまとめてから、この作品を再スタートさせたいと思います。

このフリーナインは、未熟な出来ですが、書き手である自分には、物語という物を書いて行く自信をつけさせてもらった作品なので、まだまだ付き合っていこうと思います。

そして、この作品を支持してくださった方々には、とても感謝しています。自信をつける原動力となりました。本当に、ありがとうございました。

では、長くなりましたが、以上です・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6782a/>

フリーナイン

2010年10月9日01時34分発行